

身体配置による相互行為の協同構築過程の解明

牧野 遼作

博士（情報学）

総合研究大学院大学

複合科学研究科

情報学専攻

平成 28 年度

(2017 年 3 月)

本論文は総合研究大学院大学複合科学研究科情報学専攻に
博士（情報学）授与の要件として提出した博士論文である。

審査委員：

宮尾 祐介（主査）	国立情報学研究所／総合研究大学院大学
坊農 真弓	国立情報学研究所／総合研究大学院大学
伝 康晴	千葉大学
古山 宣洋	早稲田大学
稲邑 哲也	国立情報学研究所／総合研究大学院大学
山田 誠二	国立情報学研究所／総合研究大学院大学

（主査以外はアルファベット順）

目次

要旨	4
1. 序論.....	7
1.1 情報学における相互行為研究.....	7
1.2 人文科学における相互行為研究	8
1.3 研究概要	9
1.4 論文構成	10
2. 背景.....	12
2.1 活動を空間に位置づける	12
2.1.1 Kendon の F 陣形.....	12
2.1.2 身体配置研究の拡張	18
2.2 相互行為の中の身体に関わる現象についての研究.....	19
2.2.1 ジェスチャー研究	21
2.2.2 身体に関わる現象の産出の側面に対するアプローチ	23
2.2.3 身体に関わる現象の利用の側面に対するアプローチ	25
2.2.4 相互行為研究における構造的アプローチ	29
3 データ概要.....	33
3.1 未来館 SC 会話コーパス.....	33
3.1.1 背景.....	33
3.1.2 概要.....	34
3.2 千葉大学 3 人会話コーパス	36
3.3 記述手法	38
4. 研究 1 異なる陣形による複数の活動を位置づける方法の分析.....	39
4.1 目的.....	39
4.2 分析方針	40
4.2.1 分析対象	40
4.2.2 異なる陣形.....	41
4.3 分析.....	44
4.3.1 事例 1-1 H 陣形において語りがなされる事例.....	45
4.3.1.1 分析.....	45
4.3.1.2 考察.....	49

4.3.2 事例 1-2 F 陣形の中でなされる展示物解説という活動	53
4.4 総合考察	66
4.4.1 フィールドにおける役割	67
5. 研究 2 手の位置の組み合わせによる活動を位置づける方法の分析	68
5.1 目的・仮説	68
5.2 分析概要	73
5.2.1 データと符号化	74
5.3 分析 1 手の位置の組み合わせパターンの違いと「語り」開始の量的傾向の検討	75
5.3.1 手の位置の配置の分類	76
5.3.2 分析手法	76
5.3.3 結果	77
5.3.4 考察	78
5.4 分析 2 異なる手の位置を利用した語りの開始場面の質的検討	79
5.4.1 事例 1	80
5.4.2 事例 2	80
5.4.3 考察	82
5.5 総合考察	83
5.5.1 相互行為分析として手の位置の組み合わせを検討すること	83
5.5.1 相互行為のための資源としての手の位置の特性	84
6. 研究 3 身体配置に内包される階層構造の検討	88
6.1 相互行為における“収録されること”	90
6.2 本章の分析の流れ	92
6.4 カメラの存在を利用した収録される活動の組織的構築	93
6.4.1 収録される活動をそれ以前の活動と異なるものとして位置づける	94
6.4.2 理由の提示による収録される活動を位置	101
6.4.3 日常会話の中で“収録される”ことを位置づけること／利用すること	105
6.5 実験であることを利用した収録された活動の組織的構造	106
6.5.1 教示されたトピックに従って会話を展開する	107
6.5.2 教示されたトピックから外れて会話を展開する	111
6.5.3 実験環境会話において、収録される活動という環境の利用	112
6.6 結論	114

6.6.1 利用可能な資源としての“収録される”こと	115
6.6.2 “収録されること”を資源として捉えること	115
6.6.3 相互行為における収録される活動と身体配置	117
7. 総合考察	119
7.1 身体配置に内包される対比構造	121
7.2 身体配置の多層的構造と相互行為のための基盤を構築すること	128
8. 結論.....	131
8.1 情報学に対する貢献	131
8.2 相互行為研究に対する貢献.....	132
8.3 身体に関わる現象研究の今後	133
参考文献	135
初出一覧.....	142
謝辞	143

要旨

本稿は、会話中の人々の立ち位置や手の位置といった、基本的には維持されているが、しばしば変更される身体位置に着目したものである。個々人の立ち位置や手の位置は、その組み合わせによって特定の陣形・パターンを形成する。この陣形・パターンを身体配置と呼称する。身体配置に関する先行研究としては、Kendon (1990)のF陣形の研究が挙げられる。Kendonは、パーティー場面などの観察を通して、複数の人々が会話を開始し、展開させ、終了するまでの間、立ち位置によって陣形を形成し、維持していることを明らかにした。この陣形はF陣形と呼称され、相互行為を展開するための基盤を構築するものである。F陣形は、会話参加者が自身の前方に広がる操作領域を互いに重ね合わせるように立つことによって形成されるものであり、参加者の移動、新たな会話参加者やこれまでの会話参加者の撤退ということが起こるたびに、参加者たちは、ある人が前方に移動したならば、他者は下がり、ある人が左右に移動したならば、他者も合わせて左右に移動するというように、互いの立ち位置を調整し、会話が展開され続ける限り、F陣形を維持しようとする。以上のような、互いの身体動作による連鎖構造は、これから行う／いま行っている活動をどのような活動として位置づけるべきなのかを、互いの身体を通して示し合うものであり、ある活動を相互行為として位置づけ、その基盤を構築するものといえる。本稿では、以上を踏まえて3つの研究を実施し、KendonのF陣形の検討、及び構造的アプローチの拡張を行った。

研究 1 では、立位会話の中で、活動の変化が起こる場面に着目し、その中で
の立ち位置が、どのように調整されているのかを検討した。Kendon は、会話の
ための基盤を立ち位置からなる F 陣形としつつも、会話に特権的身分をもつ参
与者がいるとき、異なる陣形が生起する可能性を示唆していた。そこで、日本
科学未来館において、科学コミュニケーター(以下、SC)と呼ばれる職員が、来
館者に対して行う展示物の解説場面の分析を行った。その結果、展示物解説が
開始される前まで F 陣形を維持していた SC と来館者たちは、解説が開始され
る前に、SC が来館者とは異なる立ち位置となるように、互いの立ち位置を調整
していたこと、また解説がなされている間、その陣形を維持するように移動し
ていたことが明らかとなった。以上により、立ち位置による陣形は、単に会話
集団を他と区別する相互行為の基盤であるだけでなく、これから行う／今行
っている活動の変化に応じて変化するものであることが示されたのである。

研究 2 では、研究 1 の結果を踏まえ、立位会話以外、すなわち座位会話にお
いて、相互行為の基盤を形成する身体配置について検討を行った。座位会話で
は人々は立ち位置をあまり調整することがない。身体配置によって、これから
行う／今行っている活動をどのような活動として位置づけるかについて参与者
間で交渉し、相互行為が展開する中での活動の変化を反映しているとするなら
ば、座る位置以外の身体ないしは身体部位の位置を利用した身体配置の交渉が
なされている可能性が考えられる。そこで、本稿では人々の手の位置の組み合
わせに着目した。この手の位置が座位会話において、立ち位置の代替となりう
るならば、先行研究と研究 1 で示された方向性に沿ったかたちで、「異なる手の
位置の参与者が会話の中で異なる役割を担う」ことが観察される可能性がある。
そこで、実験室での 3 名の雑談から、一人が語り（思い出話など）をする場面
を抽出し、その前に、どのような手の位置の組み合わせがあるのかについて、
量的な分析を行った。結果、語りの前に、一人だけ異なる手の位置の参与者が
含まれる手の位置の組み合わせパターンが多く生起する傾向が見られ、さらに
事例について質的検討を行った結果、参与者たちが、手の位置の組み合わせを
利用し、語り手となること、または語り手となることを避けようとすることが
示された。以上の結果は、座位会話において手の位置が立ち位置の代替をして
いることを示すとともに、これまでの相互行為研究において扱われてきたジェ
スチャー、視線、立ち位置といった人々が何を指し示しているのかという人の
志向が記述可能な身体の振る舞いを超えて、手の位置という、それ自体では人

の志向として記述困難なものが、どのような条件のときに記述可能になるかを示したものである。この手の位置が記述可能となるということは、手の位置が人々の間で有標の状態となっていることを示すものであり（すなわち、一人だけ異なる手の位置の組み合わせ）、それと対比される無標状態（全員の手的位置が同じ組み合わせ）を指し示すことが可能となった。

研究 3 では、これらの研究を踏まえ、立ち位置の陣形・手の位置の組み合わせによって活動を位置づけるという相互行為の基盤が、どの場面まで拡張できるかを検討した。研究者が対象とする会話データは、すべて収録され、見られる活動である。このことを踏まえ、参加者たちがそうした活動をいかに達成しているかを検討したものである。

以上の研究を通して、Kendon の F 陣形に関する研究を、相互行為内での異なる活動への変化と陣形変化の関係、座位会話における立ち位置の代替としての手の位置の組み合わせという形で拡張し、その上で、相互行為中の身体が無標であることが、相互行為の基盤となりうる可能性を示した。

1. 序論

本研究は、人々が日常的に営む相互行為を対象とする。具体的には、人々がどのようにして日常会話などの相互行為を行うことができるのかという問題に取り組むものである。この目標を達成するため、相互行為の参与者全員が平等な状態、および一部の参与者だけが他と異なる状態について比較検討を行った。これら2つの状態は、例えば、立ち位置の組み合わせである陣形によって形成され。全員が平等である前者は従来から議論されてきた F 陣形に対応し、一部のみ異なる後者は本研究が提案する H 陣形に対応する。また、同様のことは、手の位置の組み合わせのパターンによっても達成される。この2つのパターンは、会話参加者が平等な状況、及び誰か1人が先導している会話状況に対応する。前者は相互行為における無標状態と考え、後者は有標状態と考えられる。本研究は、以上について分析・考察することを通して、相互行為の基盤を構築するための時間的・空間的構造の新たな視座を与える。

以上の研究を行うために、会話内の現象の中で、身体配置に着目した。身体配置とは、各々の会話参与者たちの立ち位置や手の位置といった身体位置の組み合わせによって構成されたものである。この身体配置の中にあるパターンを見出し、パターンが内包する構造を明らかにすることが、本研究の目的である。

また本研究は、情報学・相互行為研究の中に位置づけられるものである。以下、簡単に情報学・相互行為研究の流れ中の本研究の位置を示す。続けて、本研究の概要、最後の本研究の構成を示す。

1.1 情報学における相互行為研究

本研究は、研究方法としては、人々の会話場면을収録した映像・音声データを分析対象としている。当該データには、人間のアノテーターが視聴することで符号化(coding)や記述(annotation)を施し、それらに基づく分析・検討を行った。人々の日常的相互行為である会話は、人と人で行われる最も素朴な情報のやり取りともいえる。そのような会話が、どのような構造をもち、どのように可能となっているかを明らかにすることは、情報学の重要な課題の一つである。

Shannon & Weaver (1948)は、“通信の数学的理論(The Mathematical

Theory of Communication)”によって、情報を定義し、定量的な取り扱いが可能なものとし、一つの通信モデルを提示した。これによると、情報のやり取りは、伝える情報を符号化する段階、符号化された信号を送信する段階、受信した信号を復元する段階という3つの段階からなるモデルによって説明することができるという。同モデルは、機械同士の通信だけではなく、人々間のコミュニケーションにおいても適用可能なモデルとして構想され、情報を信号へと符号化し、それを復元するルールが、どのような形で記述可能となるかについて検討されてきた。

しかしながら、この情報理論モデルを人々のコミュニケーションに適用することには、様々な批判がよせられている(菅原, 1996; 谷, 1997; 喜多, 2002; 木村, 2015)。本研究もこれらの問題意識にもとづきながら、人々のコミュニケーションを検討する。即ち、人々の会話が、単に音声情報のやり取りにとどまらず、身振り手振り、そして本研究が着目する身体位置のような様々な資源を利用しながら構成されていることを明らかにする。このことを通して、情報のやり取りが一律のルールによって解釈できるものではなく、会話を取り巻く周囲の状況・環境によって変化し、人々が周囲の環境などに基つき、他者の振る舞いを適切に理解する方法をもっていることを明らかにする。以上のような観点で会話を分析し、その構造を明らかにすることは、情報学の基礎に貢献するものともいえる。

1.2 人文科学における相互行為研究

人々が行う会話は、人文・社会科学の様々な領域で研究されている。縦おば、文化人類学では、文化の機能／構造／パターンなどを明らかにすることを目的に、特定の文化に所属する人々の振る舞いを観察・記述することで研究が展開してきた。例えば、会話やコミュニケーションなどの相互行為に関する研究(菅原, 1996)、ジェスチャー研究(Morris, 1979)などが挙げられる。また、異文化だけではなく我々の日常生活を構成する日々の会話も、観察・分析を通して、その機能／構造／パターンを明らかにすることも可能である。社会学ではGoffman(1961; 1963; 1981)が、会話などの日常的な人と人の相互行為を観察し、その機能／構造／パターンについて検討した。近年では、言語学、文化人類学、社会学などに含まれる様々な研究がみられる。

その中でも、特に人々が実際に行った会話を対象に分析を行う研究の流れが

存在する。この研究の流れは、収録された会話映像を対象とした微細な分析は1970年台の Ekman & Friesen (1971)による表情の研究と Bidrdwhistell (1970)の提唱した動作学(kinesiology)の研究が祖とし (Kendon, 2007; 南, 2001), 社会学に根ざした目的探求を行う会話分析・相互行為分析, 認知科学/心理学に根ざした研究目的の探求を行うジェスチャー研究が近年では盛んに行われている。本研究を構成する個々の分析は, これらのいずれかの流れにのみ位置するのではなく, 様々な研究の側面の接点を検討することで, 相互行為研究に新たな知見をもたらすものとした。そのため, 上記の研究群について第2章で詳述し, 本研究の位置を明らかにする。最初に取り上げるのは, 本研究が対象とする立ち位置, 手の位置の組み合わせである身体配置をはじめて検討し, 上記の様々な研究の流れに大きな影響を与えている Kendon(1990)の研究についてである。

1.3 研究概要

本研究は会話における手の位置や立ち位置といった身体位置, そして会話参加者各々の身体位置の組み合わせによって作られる身体配置 (body configuration)ⁱを対象としたものである。身体配置に関わる研究としては Kendon(1990)による F 陣形の研究が知られている。これは, 「活動は常に位置づけられている"Activity is always located"」という考え, 言い換えると「人の行う活動は特定の空間が必要である」という考えに基づくものである。当然, 人と人が行う会話という相互的な活動においても, F 陣形などの身体配置の特定パターンとして特有の空間を構築することが求められる。F 陣形の詳細については次章以降で触れることとするが, 対面会話に必要な空間は, 参加者が相互の姿を見ることができ, 相互の声を聞くことができる範囲に位置することで構築される。F 陣形研究のもっとも重要な貢献は, 人と人が協同して行う会話

ⁱ 身体配置 (body configuration) という呼称は Kendon の F 陣形研究の当初に利用されていた用語である。しかし, この用語は静的すぎるとし, 近年の F 陣形研究では利用されていない (Kendon, 1990)。本研究では, 立ち位置による陣形 (formation) に加え, 手の位置の組み合わせについて議論をするものであり, 手の位置の組み合わせについても陣形と呼称することも可能である。しかし, 陣形という用語には, いくつかのモノがどのように配置されているかを示すものであり, 手の位置の組み合わせを陣形と呼称するのは, イメージにそぐわないと考え, この2つの身体位置の組み合わせについて身体配置という用語を使用する。

が、互いの身体位置の関係を通して空間に位置づけられていることを示したことにある。

しかしながら、Kendon が F 陣形という形で空間に位置づけられるとした会話は、立ち話、そして参加者たちの立場が平等な会話のみであった。本研究では、会話の中に、必ずしも F 陣形という形では位置づけられない活動がある可能性を指摘し、それらが身体位置の組み合わせを通して、異なる形で空間に位置づけられているか、否かを 2 つの研究を通して検討した。研究 1 では、立位での会話で、参加者たちの立場が異なる場合における空間パターンについて検討した。研究 2 では、参加者たちが座った状態でなされる会話について検討した。

以上のように、本研究では、参加者たちの役割が平等な立ち話だけではなく、役割に偏りがある会話や、座った状態での会話では、空間への位置づけられ方が異なることを示そうと試みた。研究 1 と研究 2 の成果を踏まえ、研究 3 は、相互行為研究において、多くの研究の分析対象とされるビデオ収録された会話映像を、“収録されている”ことが、会話参加者にどのように意味があるのかという観点から分析を行った。そして、本研究で取り扱ってきた身体配置を利用して、人々が収録された会話という活動をどのように位置づけ、展開していくかについて検討した。

1.4 論文構成

以上のように、本研究では、会話内の人々の立ち位置や手の位置といった身体位置の参加者間の組み合わせである身体配置に着目した研究を行う。その中で、身体配置を形成すること、変更することが、会話という相互行為の開始や相互行為内の活動の変化を、どのように反映しているのかを検討する。加えて、相互行為がどのように空間に位置づけられるのか。さらに、相互行為を開始し、展開するための基盤は、身体配置によって構築しているかを検討する。以下、第 2 節では、本研究の背景について記述する。まずは、前述の Kendon の F 陣形研究について詳述する。さらに会話内の身体に関わる現象についての先行研究を概観し、Kendon の F 陣形の検討、及び構造的アプローチの研究上の位置づけを明らかにする。その上で、上記の研究の拡張を目指す、本論文における研究の位置づけを示す。第 3 節では、本論文内で研究の分析対象とした、「未来館

SC 会話コーパス」と「千葉大学 3 人会話コーパス」と呼ばれる 2 つの会話データについて詳述する。以降、Kendon の F 陣形のアプローチを拡張させた前述の研究、第 4 節では研究 1 を、第 5 節では研究 2 を、第 6 節では研究 3 を、それぞれ報告する。第 7 章では、それらの研究の結果をもとに、参与者たちの身体配置が、相互行為の基盤を、どのように構築しているか、そしてそのことは、どのような意義があるのかについて議論を進め、第 8 節には結論を記す。

2. 背景

本研究は、会話における立ち位置や手の位置といった身体位置を対象とした研究を進めていく。そして、Kendon(1990; 2010)の F 陣形研究を様々な点で拡張する。そこで、本節では F 陣形研究(Kendon, 1990; 2010)について詳述し、さらに F 陣形研究を基礎においた後続の研究についても詳述する。また一方で、人々の会話などを取り扱う相互行為研究は、立ち位置、手の位置といった身体位置だけではなく、当然音声発話、そして多種多様な身体に関わる現象を取り扱っている。本研究も相互行為における多種多様な身体に関わる現象を取り扱った研究の一つに含まれるものである。そこで、相互行為における身体に関わる現象を取り扱った研究の歴史と、現在の広がりについて記す。また身体を取り扱った研究は、対象が同じであってもそれぞれが位置する学術領域によって、現象の取扱、分析の方法論、探求対象が異なる。本稿の仮説、分析に影響を与えた心理学におけるジェスチャー研究、社会学における会話分析・相互行為分析、そして Kendon の構造的アプローチの 3 者を概観し、それぞれに対する本研究の立場を示す。最後に、先行研究を踏まえた上での、本研究の目的をより明確に示し、相互行為研究における位置づけを述べる。

2.1 活動を空間に位置づける

本研究は、Kendon(1990; 2010)の、“様々な活動は空間に位置づけられる”，という考えをもとに、立ち位置や手の位置といった身体位置、そして会話参加者の各々の身体位置の組み合わせによって形成される身体配置を検討するものである。この節では、Kendon の F 陣形研究について詳述し、続けて本研究が、どのような点で先行研究の拡張を行っているのかについて述べる。

2.1.1 Kendon の F 陣形

Kendon(1990)はパーティーなど、数多くの人々が壁や家具などの物体によって仕切られないオープン空間で共在し、その中の一部のみが会話参加者として立ち話をする場面の観察を行った。観察の結果、人々が会話を行うときに陣形(formation)を形成することを発見し、その陣形を F 陣形と呼称した(Fig.1)。F

陣形は会話に参加する人々の立ち位置・体の向きによって形成される陣形である。F 陣形の定義は、活動というものが、空間に常に位置づけられているという考えに基づいている(Kendon, 1990; 2010)。例えば、猫が昼寝をするとき、猫はどんな寝相を選ぼうとも横たわることができる物理的特徴を備えた空間が必要になる（つまり寝返りをうてない狭い通路や、湖の上のように寝ているうちに沈んでしまうような空間では昼寝することができない）。そして、人が何らかの活動を行うとき、その活動に必要な空間が存在する。そして、活動に必要な空間とは、他者からも理解可能なものとなる。例えば、人が読書という活動を行うときや、テレビを視聴するという活動を行うときの、自身の身体と本・テレビとの間に必要十分な空間が必要である。そして、この空間は他者からも理解可能なものであり、操作領域(transactional segment)と呼ばれる(Kendon, 1990; 坊農,2009)。活動中の操作領域に他者が侵入することは、不適切なこととして理解される。例えば、ある人がテレビを見ているとき、その人とテレビの間を横切るとき、軽く謝罪することが日常的に経験できることから、操作領域に侵入することが基本的には不適切であることが理解できるだろう。また、基本的に Kendon(1990)はこの操作領域が、体の中心から前方に弧を描くように投射するものと考えている(Fig. 2)。

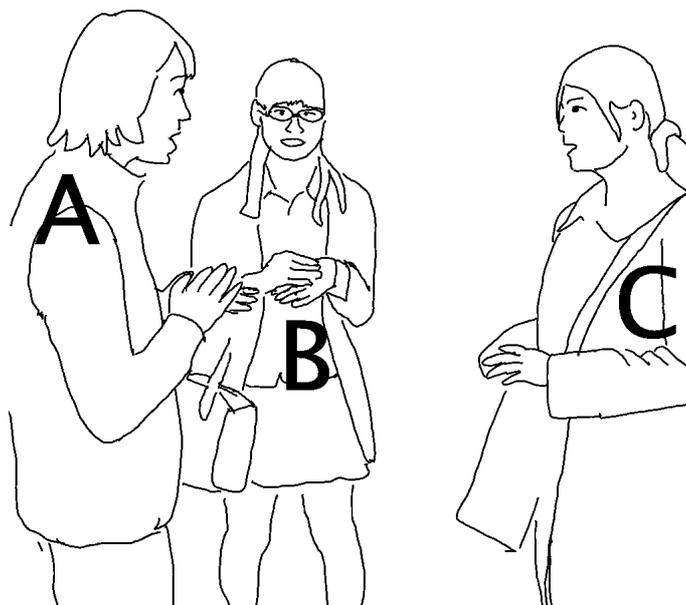


Fig.1 F 陣形

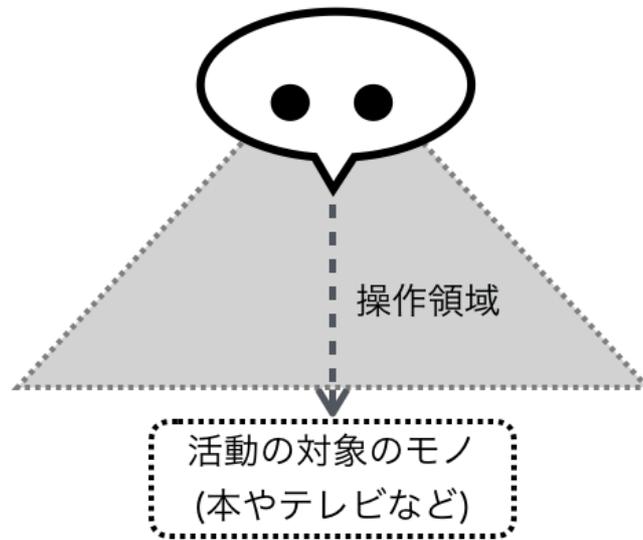


Fig. 2 人の操作領域の模式図

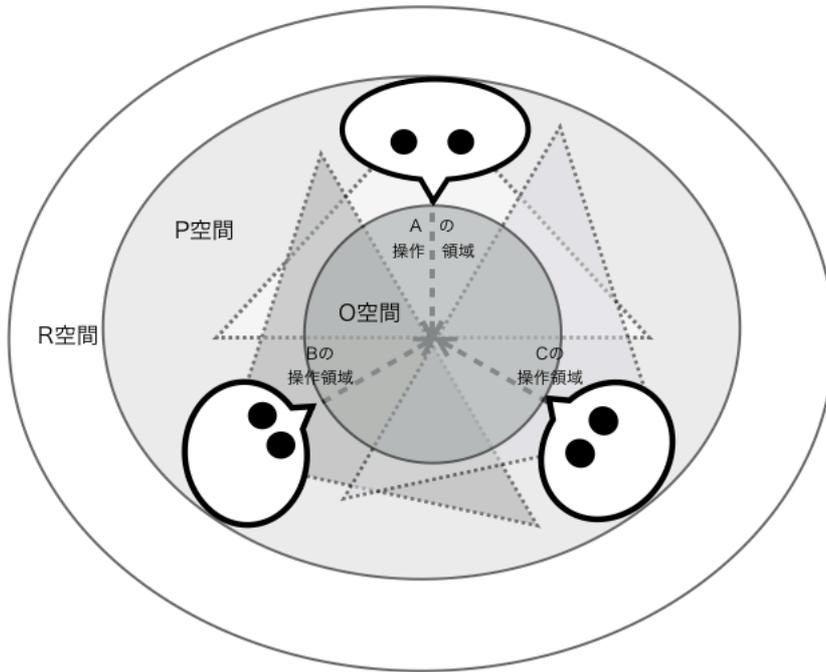


Fig. 3 F 陣形の模式図

会話という活動にも適切な空間が必要である。即ち、人々は会話相手となる対象との間で適切な操作領域を持つ。そして、その会話相手となる対象が人の場合、その人も操作領域を持つ。F 陣形とは、この 2 つ以上の操作領域を重ね、共有する位置に会話参与者たちが立った状態のことを指す。そして、人々は会話を開始するときに互いの操作領域の一部を共有するように F 陣形を形成し、共有された操作領域は O 空間と呼称される。さらに、O 空間に対する外縁の輪状の空間は、会話参与者たちが立つ位置となり、P 空間と呼ばれる。さらに P 空間の外側の空間は R 空間と呼称される(Fig. 3)。

F 陣形の形成後、会話が展開していく限り、人々は O 空間を維持するように自身の位置や体の向きを変更する。例えば、会話参与者の一人が前に移動したならば、他の参与者はそれに合わせて、自身の立ち位置を移動させる。または参与者の一人が体の向きを大きく変えたならば、他の参与者はそれに合わせて体の向きを変更する。そのため、Fig. 3 はあくまで F 陣形の中の一時点を切り取り、一時点で切り取った模式的に示したものにすぎない。例えば会話を行うために、操作領域を共有させ O 空間を構成し、P 空間に人々が立った状態は Fig. 3 のような円形のものだけではない。2 人会話の場合、2 人が対面した状態、隣り合った状態、3 人以上の会話の場合、L 字形に立つ状態も、F 陣形が形成された状態であるといえる。Kendon(1990)はこの形状の違いを配列(arrangement)の違いとした。円形の状態は円形配列(circle arrangement)、対面状態は対面配列(vis-a-vis arrangement)、隣り合った状態は隣接配列(side-by-side arrangement)、L 字の状態は L 字配列(L arrangement)とそれぞれ呼称される。

また、会話が展開する中で、会話の参与者が入れ替わるとき、人々は自身の身体の位置や向きを調整することで、F 陣形を維持する。新たに会話に参加しようとする人は R 空間で一時的に待機し、既存の参与者たちが、彼／彼女の存在に気づき、彼／彼女の操作領域を既存の参与者たちの操作領域と共有可能な立ち位置の場所を用意した後に、その場所（つまり新規の参与者が O 空間を構成するように P 空間に立つことのできる場所）に彼／彼女に移動することで、新新たな F 陣形を形成し、会話の参与者となる。また、参与者の一部が会話から立ち去る場合も、残った参与者たちのみで、彼らの操作領域のみを共有する形で新たな O 空間を構成し、新たな F 陣形を形成することで、残った参与者たちによる会話が継続される。

以上のように、オープン空間で人々が立ち話をするとき、F 陣形を形成し、

会話が継続する限り、F 陣形は維持されていることが指摘されてきた(Kendon, 1990; 坊農, 2009). こうした、人々の会話時に F 陣形が形成されるという特徴に着目し、人との自然な会話が可能なロボットやアバターの開発を目的とする工学分野の研究において、F 陣形は度々参照される (星ら,2009). そのような研究では、O 空間、P 空間から構成される F 陣形の形状に着目し、その形状の中にロボット・アバターを入り込むことで、人との会話に対する不自然さが軽減できるか否かの検討がなされてきた. しかし、以上で示したように F 陣形とは、会話時に形成される立ち位置による陣形が特定の形状を示すという主張を行う概念ではない. 前述のように、F 陣形は様々な形状の配列がありうる. さらに、会話参加者の移動に応じて、他参加者が移動することで F 陣形を維持するように形状は変化し、参加者の入れ替わりによっても、その形状は変化しうる. つまり、会話における周囲の環境、会話相手、どのような会話かという活動の違いによって、F 陣形の形状は柔軟に変化するものなのである. よって、Kendon(1990)の F 陣形に関する研究とは、立ち位置による陣形の形状を指すものではなく、むしろ、会話において、立ち位置による陣形が構造的システムをもつことを明らかにするものである. この F 陣形のシステムの特徴は、第一に会話の活動を空間の中に位置づけることによって、会話という相互行為の参加者とそれ以外の他者を異なる集団と区別することができる点にある. 第二に、そのシステムの中で、自分以外の参加者の振る舞いに対応して、常に陣形を調整し続けることによって、相互行為の基盤を作り続けることができる点にある. この、会話という相互行為の基盤を、参加者同士で協同的に構築する過程こそが、F 陣形が示す構造的システムであるといえる. そのシステムが存在する結果、一時的に特徴的な F 陣形の形状が観察可能になるにすぎないのである.

以上のような F 陣形のシステムなど、相互行為の中の構造的システムを明らかにするためのアプローチを、Kendon は構造的アプローチと呼称した. このアプローチについては、第一に参加者を個々に見るのではなく、参加者間の行動的關係とそのフィードバック過程への着目、第二に相互行為を多重的な層構造として捉える、第三に出会いの帰結ではなく進行中のプロセス自体に着目し、いかに陣形の定常性が維持されているかを検討するという 3 つの特徴を提示している(菅原, 1996). 以上の構造的アプローチの詳細については、他の先行研究との比較を通して、後述する. 以下では、相互行為における参加者たちの身体に関わる現象を扱った先行研究に対して本研究を位置づける.

2.1.2 身体配置研究の拡張

先に述べたように本研究は、Kendon(1990; 2010)が構造的アプローチを用いて行った「立ち位置による陣形によって会話活動を空間に位置づけ、相互行為の基盤を参与者間で協同的に構築していく過程としての F 陣形システム」の研究をもとに、3 つの研究を行う。これらの研究は F 陣形の研究を様々な面で拡張するものである。F 陣形研究の詳細を述べた上で、本研究の位置づけについて記す。

第一の研究は、立位会話における陣形は、会話内の活動変化をどのように反映するかを検討するものである。繰り返すように、すべての活動は空間に位置づけられるものであり、F 陣形（及びそのシステム）とは、会話という活動を空間に位置づけるものである。従って、会話活動の変化によって、形成される F 陣形は当然異なると考えるべきであろう。素朴な観察ながら、Kendon(2010)は動物園の象をみる観客や野球（おそらく草野球）の試合を見る観客は、隣接配列の F 陣形を形成しながら会話をするを指摘している。

しかしながら、1 つの会話の中に含まれる活動とは 1 つなのだろうか。そして、1 つの活動からなる 1 つの会話は、1 つの F 陣形に位置づけられるのだろうか。

F 陣形とは会話参与者を他と異なる集団として定義づけるものであり、単一会話が続く限り単一 F 陣形が形成され続けると定義されていた(Kendon, 1990)。しかしながら、Kendon(1990)も F 陣形を形成し、行われる会話をいくつかの段階に分けられるものとして記述している。会話冒頭の 2 人会話の場合、挨拶に続くちょっとした会話(small talk)は対面配列で行われ、そこから会話の本題への移行に際して、隣接配列へと変化することが多いとされている。また、F 陣形を形成する会話とは、参与者たちが平等な権利を持った会話である。対して、参与者間の権利の差異がある会話においては、F 陣形とは異なる陣形が形成される可能性を示唆していた(Kendon, 1990)。この可能性について、Kendon(2010)は教師と生徒、演者と聴衆といった異なる役割をもった人々の行う会話において、そのことが参与者間の距離が離れるといった形で空間に位置づけられるとしている。授業中に、教卓に立つ先生と、そこから離れて座っている生徒たちは、授業という活動が、参与者たちが空間的に離れることによって位置づけられていることの一例であるといえる。

しかしながら、日常的に異なる役割をもった参与者間の会話であっても所謂 F

陣形で会話をすることもあれば（廊下で大学教授と出会った学生が常に離れた位置ではなさないように）、そうではないこともある。そして、一つの継続された会話であったとしても、その中で、刻々と参与者間の役割、権利の差異が変化することもある。第一の研究では、そのような会話事例を踏まえ、人々の会話の中の活動の変化、つまり役割や権利の差異が変化することが、立ち位置による陣形という空間にどのように位置づけられ、関係しているかを検討した。

第二の研究は、参与者が座っている場面の会話を対象としたものである。座って会話を行う場面では、座る位置によって F 陣形が形成されると考えられる。つまり、円卓や四角い机を囲んで、もしくは机がない状態で座って行う場合、すでに参与者たちの操作領域は共有され、O 空間が構成され、F 陣形が形成されているといえるだろう。また、座位会話の場合、会話参与者を他と区別する必要がない。しかしながら、第一の研究の会話内の活動の変化が空間に位置づけられているならば、座位会話においても、何らかの身体位置と、その組み合わせを利用して、活動の変化が、空間に位置づけられている可能性がある。第二の研究では、人々の手の位置とその組み合わせからなる身体配置と、その組み合わせが、会話の中の活動の変化をどのように反映しているかを検討した。

研究 1 と 2 は、人々が身体配置のパターンを通して会話という活動を位置づけ、相互行為の基盤を協同的に構築しているという過程を示したものである。研究 3 では、この過程について、会話冒頭部分に特に着目し、今まさになされている会話が、どのような活動であり、参与者の中でどのように位置づけるべきなのかを検討したものである。

2.2 相互行為の中の身体に関わる現象についての研究

ここまで、最も重要な先行研究である Kendon の F 陣形の研究(Kendon, 1990; 2010)について詳述した。当然であるが、会話という相互行為の中で、音声発話だけではない、会話参与者たちの身体に関わる現象に着目した研究は Kendon の研究以外にも古くから、多種多様に存在する。最も古い身体動作に着目した議論としては、古代ローマ時代の演説の研究が挙げられている(McNeill, 1992)。演説を効果的に聴衆に聴かせるために、どのような身振りを組み合わせるべきかについてのマニュアル・カタログは古くから多数存在する(秋田, 2004)。また、

どのようなふるまいが、その場に適したものなのかというマナーの研究も、相互行為における身体的ふるまいの研究の一種とすることができる。前述の参与構造、儀礼的無関心、焦点の当たった相互行為など、その後の相互行為研究に対して重要な影響を与えた社会学者の Goffman(1963)はマナーの教則本に書かれた現象を題材とした分析・考察を行い、それらは彼の研究の主要な部分を占めている。また、文化人類学では、マナーとしての身振り以外にも、特定の地域／特定の集団内での、特有の身振り手振りの収集といった研究も古くから行われている(Morris et.al, 1979)。

Goffman などが、マナーの教則本や自身の日常生活の中での観察から、相互行為(及びその中で起こる身体に関わる現象)の記述を行ってきたのに対して、近年の相互行為に対する研究の多くは、収録された会話データを対象とし、研究が進められている。日常的な観察に基づく分析に対して、収録された会話を分析対象とすることは、何度も繰り返し会話場面を見返すことができ、会話内で起こる様々な現象(発話、身体動作、視線など)の時間関係が明確に分析可能となる長所があり、先行研究では、会話内で起こる様々な現象や、現象間の関係性が明らかにされてきた(Kendon, 2004; McNeill, 1992; 2005; Goodwin, 1981; 1986 など)。このような、ビデオデータを対象とした微細な分析は1970年台の Ekman & Friesen (1971)による表情の研究と Bidrdwhistell (1970)の提唱した動作学(kinesiology)の研究が祖とされる(Kendon, 2007; 南, 2001)。そして、本論文で行う研究もまた収録されたビデオデータを対象に分析を行うものである。

以上のように、近年ではビデオデータの観察をもとに行われてきた研究が数多く存在する。そして、それらの研究が対象とする会話内の身体に関わる現象は多岐に渡る。本論文では、立ち位置や手の位置といった身体位置という現象に着目した研究を行うが、同様に立ち位置や手の位置に着目した先行研究も存在する。例えば、立ち位置に関しては、前述の Kendon 以外にも、文化人類学者の Hall(1966)が、会話をする人々が所属する文化や会話相手との関係、もしくは相手と行う会話活動の違いによって、相手との距離が変化することを指摘し、近接学を提唱した。Kendonはこの近接学を参照しながらも、相互行為を行うときの、人と人との間の距離だけではなく、参与者たちの身体の向き的重要性を指摘した上で、F 陣形の研究を行っている(Kendon, 1990)。また、手の位置に関しては、手の置き方(e.g. 膝の上に置く、腕組みなど)の違いが、人の心理状

態の違いを示すものとした研究 (大坊, 1998), トピックの変更に合わせて手の位置を変更することを示した研究(Bull, 1987), 手の位置の種類が次の動作の種類と関連することを示した研究(Dosso & Wishaw,2012)などが存在する. 以上のように, 会話内の立ち位置や手の位置の身体位置に関する研究は, 相互行為内の身体に関わる現象を取り扱った研究の中で, 主流とはなっていないものの, 連綿と存在するといえる.

しかしながら, 数多く存在する相互行為内の身体に関わる現象を取り扱った研究を, 現象の種類によって分類するのは, 不適切といえる. なぜならば, 同様の現象を取り扱った研究であっても, それぞれの研究目的, 依拠する学問分野によって, その現象をどのように捉えるかという観点が, 全く異なっているからである. 以下, 本章では, 本研究に関わる前述の F 陣形の研究に加え, **Kendon(2004)**によるジェスチャー研究について概観し, **McNeill(1992; 2005)**によるジェスチャー研究と相互行為分析・会話分析の研究という2つの観点を, 前者を「身体に関わる現象の産出の側面に対するアプローチ」とし, 後者を「身体に関わる現象の利用の側面に対するアプローチ」と捉え, それぞれについて概観する. そして, **Kendon** の構造的アプローチについて「身体に関わる現象の産出の側面に対するアプローチと, 身体に関わる現象の利用の側面に対するアプローチと併記することで, その特徴を明らかにする. そして, 身体に関わる相互行為研究における本研究の位置づけを明らかにする.

2.2.1 ジェスチャー研究

会話の中で, 身体に関わる現象を取り扱った研究の主流の1つとしてジェスチャー(**gesture**)研究が存在する. ジェスチャーとは, 会話の中で人々が産出する身振り手振りであり, 主に手が動いている状態を指す. ジェスチャー研究の歴史は, 前述の会話内の身体に関わる現象を取り扱った研究の歴史に含まれるものといってよいだろう. 演説における効果的な身振り手振りや, ある特定の文化集団で頻出する身振り手振りを収集した **Morrisら(1979)**の研究もジェスチャー研究の歴史に含まれるものである. 一方で, 1990年台以降のジェスチャー研究を牽引し, それ以降の研究に対して影響を与えてきたのが **Kendon(2004)**と **McNeill(1992; 2005)**によるジェスチャー研究であるといえる.

Kendon も当初は特定の文化集団による特定の身振り手振りを対象とした検

討を行っていた。その後、文化などの違いに依拠しない、人々の身振り手振りの一般性について検討を行うようになった。その中で、Kendon は会話内で人々の多様な手の動きを、以下のように区別した。まず、Kendon(2004)はジェスチャーを誰かに何かを伝えるための動作としたため、水を飲むためにコップを持つ／何かを書くためにペンをもつ、といった実用的目的をもった実用的目的を持った動作(practical action)と、頬をかく／髪を弄るような自己身体接触動作は、感情表出のための動作として、ジェスチャーではない手の動きとした。さらに加えて Kendon(2004)は、誰かに何かを伝えるための動作として、手話、パントマイム、エンブレム(emblem)、ジェスキュレーションの 4 つを提示した(Kendon, 1975; 2004)。その中で、手話(sign language)は語彙や文法といった言語的特徴を備えⁱⁱ、他の 3 つとは区別された。パントマイムは、人の動作を忠実に模倣することを目的とした動作を指す。OK サインや V サインのような特定の意味と結びついた特定の字型や手の動きが存在することを指摘し(人差し指と親指の先をくっつけ円をつくり、他の指を広げた状態の OK サインは大丈夫という意味と結び付けられている)、これらの手の動きをエンブレムと呼称した。そして、エンブレムのように特定の意味とは結びついていないが、会話の中で、誰かに何かを伝えるための動作をジェスキュレーションと呼称した。ジェスキュレーションは、形態だけによって理解されるものではなく、文脈や周辺で生起する発話内容と組み合わせることによって理解される。例えば、ある人が料理の作り方の説明を行う中で、「塩を振って」という発話と同時に、片手で何かを掴んだような字型を作りながら、手を宙に掲げ、3 回スナップをする動作をしたとする。このとき我々は発話内容から、その手の動きが塩を料理に加える動作であることが理解できるのと同時に、発話内容だけでは理解できなかった、塩が 3 回分、料理に加えられたことが理解できるようになる。以上のように、Kendon が身振り手振りの中からジェスキュレーションと呼称したものは、手の動きの意味が単に字型によって理解されるわけではない。そして、単に発話の欠落を補っているわけでもなく、その手の動き自体が周囲の文脈、発話と密接に結びつく独特の機能を持つことを示すものである。このような動きは、今日

ⁱⁱ 基本的に手話は言語学領域における研究が行われている。しかし、本研究の手法と同様に、Kendon のジェスチャー単位を手話に適用を試みた研究(菊池・坊農, 2013)や会話分析的な手法を利用した手話の研究(坊農, 2011)も存在する。よって、言語的特徴を備えた身体動作として、手話を本研究の分析対象外とするのは、不適用かもしれない。しかしながら、本研究ではろう者が含まれた／手話が産出されるような会話データを対象とはしていないため、手話とジェスチャーの区別については議論を行わない。

のジェスチャー研究の中で特に議論の対象となる現象である。

また **Kendon** のジェスチャーの分類は、パントマイム、エンブレム、ジェスキュレーションの順に、動作の形状と意味の間に社会的なルールが減少するとされ、この順に並べられた **Kendon** の連続体 (**Kendon's continuum**) と呼ばれる (McNeill, 2005)。またジェスチャー研究における **Kendon** の貢献としては、ジェスチャー (特にジェスキュレーション) が、共通の時間的構造をもっていることを示すジェスチャー単位を示したことである (Kendon, 2004; 細馬, 2009a)。ジェスチャーは、誰かに何かを伝えるための動作の核となる動作 (これを **Kendon** はストローク (**stroke**) と呼称した) が存在し、その前に核の動きを行うための準備動作、核の動作が終わった後に戻ってくる動作が存在する。つまりジェスチャーは、準備動作 (**preparation**)、ストローク、復帰動作 (**retraction**) の順に産出される。そして準備動作から復帰動作までの一連の動きは、一つのジェスチャー単位とされる。以上の **Kendon** によるジェスチャーの分類 (及び **Kendon** の連続体) やジェスチャー単位は、以降のジェスチャー研究及び会話内の身体に関わる現象を取り扱った研究に対して、多大な影響を与えている。

2.2.2 身体に関わる現象の産出の側面に対するアプローチ

続けて、今日のジェスチャー研究のもう一人の泰斗であり、心理言語学・発達言語学におけるジェスチャー研究の先駆者である McNeill (1992; 2005) の研究について概観する。McNeill は、**Kendon** の連続体において、ジェスキュレーションと呼称される、それまでの会話の文脈や共起した発話内容と密接に関わる手の動きを主な研究対象とし、自発的ジェスチャー (**spontaneous gesture**) と呼称した。

自発的ジェスチャーは、特に産出者自身の発話と共起するものとして定義されている (McNeill, 1992)。彼らの研究によって、自発的ジェスチャーは、単に発話内容と結びつくだけでなく、発話の音声学的ピークとジェスチャーの核となるストローク動作が共起することが示されている (野邊, 1997)。さらに、**Kendon** が主に日常的な会話場面を分析対象としていたのに対して、McNeill (及びそれに続く) の研究の多くでは、実験的に統制された会話データを主な研究対象とした。彼らは 2 人の被験者の内、1 人に短いアニメーションを視聴させ、その内容を見ていない他方の被験者に説明させるというアニメーション説明課

題の会話データを分析の対象とした。この会話データの中の自発的ジェスチャーを対象とした研究の中で、自発的ジェスチャーの中に、ジェスチャーがどの視点に基づき生起するかによって複数の種類に分けられること、そしてジェスチャーが何を参照して生起するかによって複数の種類に分けられること (McNeill, 1992; 喜多, 2002), そして、繰り返し生起する同一性のある自発的ジェスチャーが存在し、ジェスチャーの空間的配置によって、説明のための構造を構築されること (McNeill, 2001; 古山, 2002), などを明らかにしてきた。

以上のように Kendon と McNeill は共に、ジェスキュレーション／自発的ジェスチャーと特定の形態が特定の意味と結びつくものではなく、発話と強い結びつきをもつジェスチャーを研究の対象としている。しかしながら、Kendon はジェスチャーを「誰かが何かを伝えるためのもの」として研究対象としていた。この定義は、ジェスチャーが故意(*deliberate*)に産出されるものとみなしている。このとき、McNeill が自発的ジェスチャーを故意(*deliberate*)に産出されるものとして見なしていたかについては、議論が分かれる。古山(2012)によれば、故意(*deliberate*)とは「偶発的ではない」という解釈と、「わざと」という解釈が可能であるとしている。そして自発的ジェスチャーとは、わざと産出されるものではないが、偶発的ではない形で生起するものであるとされる (McNeill, 2005)。この McNeill らの自発的ジェスチャーの定義を理解するためには、彼らの研究目的への理解が不可欠である。彼らは人々の思考の過程を理解することを目的とし、会話の中の発話と、それに共起する自発的ジェスチャーが重要な「窓」であると考えた。上記の様々な自発的ジェスチャーを対象とした研究は、(人々の内部に存在する) 未完成の思考・イメージが発話と自発的ジェスチャーを通して結実する過程として捉えるものであり、この考えは成長点理論 (*growth point theory*) と呼称される (McNeill, 1992)。

このように思考が発話やジェスチャーなどの単位に分解できないといった観点から、したがって「わざと」何らかの事象を他者に伝えているわけではないが、思考を結実させるというある種の偶然ではない必然性を伴ったジェスチャーが存在することになる。このように思考が発話やジェスチャーなどの単位に分解できないといった観点から、したがって「わざと」何らかの事象を他者に伝えているわけではないが、思考を結実させるというある種の偶然ではない必然性を伴ったジェスチャーが存在することになるといえる。

以上のように、Kendon と McNeill というジェスチャー研究の泰斗たちは、

会話の中の身振り手振りの中に、それ自体形状によっては理解されない存在があることを指摘し、分析の対象とした。一方で、それらの研究が対象として呼称するジェスキュレーション／自発的ジェスチャーの定義はすべての面で一致するわけではない。この定義の違いは、それぞれの研究が明らかにしようとする目的の違いによると考えることが妥当であり、どちらの定義が正しいものなのかを議論をすることは不毛であろう。ともあれ、McNeillらの言語心理学・発達心理学におけるジェスチャー研究とは、その目的に基づき、自発的ジェスチャーという身体に関わる現象が、なぜ産出されるのか、という側面に光を当てた研究であったといえるだろう。

2.2.3 身体に関わる現象の利用の側面に対するアプローチ

McNeillに代表される言語心理学・発達心理学におけるジェスチャー研究は、会話内で生起する身体に関わる現象を対象とした研究の一つの主流であり、これらの研究は会話内の身体に関わる多種多様な現象の中の特徴的な一部(つまり自発的ジェスチャー)を取り出し、それらがなぜ産出されるのか、について思考過程との関連についての示唆を与えた。一方で、会話内で生起する身体に関わる現象を扱った研究のもう一つの流れとして、社会学における会話分析と呼ばれる研究が存在する。会話分析とは、社会的行為の中で、当事者によって生み出された秩序を記述し、どのようなやり方で、その秩序が組織だった形で生み出されるのかを分析するものである(Psathas, 1995)。西阪(1997)によれば、会話分析は、社会的行為の秩序の根拠や原因を解明するものではなく、「ある相互行為の秩序が、相互行為の具体的進行のなかで、またその具体的進行をとおして、その時々々の相互行為上の偶然的条件に依存しながら、いかに組織されているか」を記述するものとされる。つまり、彼らは展開される相互行為から何かを発見することや様々な事例の中から一般的性質を発見することを目的とするのではなく、個々の事例の中で、何が達成されているかを記述することを目的としているといえる。この会話分析は、Sacks(1972)による電話会話を対象とした分析から始まり、会話の中で、人々が順番交替という規範・秩序に従い、会話を展開していること(Sacks et al, 1974)などを明らかにしてきた。中でも、会話分析において、重要なアイディアの1つとして、会話の中の連鎖組織というものがある。会話の中で頻繁に見られる連鎖組織として、2つの発話による連

鎖をあげることができるだろう。「昨日何食べた？」という A による発話(A の発話)のあとに、「ラーメン」という B による発話(B の発話)が続けられたとき、A の発話は質問、B の発話はその応答として理解できるだろう。このような2つの発話間の関係は隣接ペアと呼ばれ、相互行為分析における重要な概念の1つである(Schegloff, 2007)。この隣接ペアの考え方に基くと、A の発話は第一成分、B の発話は第二成分と呼ばれる。隣接ペアの考え方によると、第一成分が産出されると、異なる参加者から、第一成分の対となる第二成分が産出されることが期待される(ここでは、質問の対として応答がある)。そして、期待された第二成分が産出されなかったとき、応答がなかったことが参加者たちにとって理解可能なものとして浮かび上がる。上述の例では、B の発話が隣接ペアの第二成分であり応答として産出されることは、A の発話が質問という第一成分であることへの理解を示すものとなっている。

以上のような、社会学における会話分析では、人々の日常的に営む会話という活動がどのように達成されるのかについて明らかにされてきた。Psathas (1995)によれば、この会話分析が分析の対象とするのは、相互行為のなかのトーク(talk in interaction)である。よって、彼らが分析の対象とするのは、音声発話だけではなく、非言語的・非音声的な相互行為のあらゆる側面である。そのため、Psathas (1995)は、相互行為分析という呼称を提唱している。特に、近年ではビデオ撮影機材が安価かつ軽量化したことに伴い、多くの研究者が会話場面をビデオによって撮影し、その撮影されたビデオデータを対象としている。そのため、身体に関わる現象に着目した研究は増え続けている(Depperman, 2013)。中でも、このような観点からなされた研究としては、医療場面における患者の身体が、相互行為の中で、どのように利用されるのかについて分析を行った Heath(1989)の研究、道案内場面などの日常会話における身体の振る舞いの記述を行った Mondada(2009)の研究、そして、Goodwin(1981)によるものが代表的である。本研究では、Psathas の主張を踏まえ、以下、彼らの研究を相互行為分析と呼ぶことにするⁱⁱⁱ。ただし、彼らの研究は、ジェスチャー研究のよ

ⁱⁱⁱ 本研究で、相互行為分析という呼称を利用するのは、Goodwin(1984)らの研究が身体に関わる現象をも言及するものであることを強調するためであり、彼らの研究を会話分析と相互行為分析という異なる分野として区別することを目的とするものではない。しばしば、会話分析という呼称、及びその初期の研究内容から誤解されることがあるが、会話分析というものは、その当初から会話の中の音声発話のみを分析の対象としていたわけではない。当然、電話会話など、参加者自身が音声発話を通してのみ、会話を達成する場面では、音声発話のみが分析の対象となりうるが、対面会話のように、音声発話と同時に、身体が存在、

うに、身体に関わる現象の中の一部を取り出して分析の対象とするのではない。ある会話が、どのような活動として達成されているのかを明らかにすることを目的としているため、会話の中で生起する視線、身振り手振りなどが参与者にとって適切(relevant)なものであり、相互行為の中で利用されているかという観点から分析を行うものである。そのため、生起していたとしても適切ではなく、利用されていない身体に関わる現象は、分析から除外されるのである。

以下、相互行為分析の中で、身体に関わる現象を対象とした分析の草分けであり、それらの現象の記述について独自のスタンスを明確的に打ち出している Goodwin(1981; 2007)の研究について紹介する。Goodwin はその研究の中で、視線や身振り手振りなど様々な身体に関わる現象について言及し、分析を行っている。このとき、重要なのは、発話における隣接ペアのように、身体に関わる現象の連鎖的組織(sequential organization)^{iv}を記述することである。例えば、Goodwin(1981)は相互行為の中で人々が視線を互いに向け合うことを、以下のように記述している。A と B という 2 人が会話を行っているとき、A が B に視線を向ける (A の視線)。すると、続けて B が A に視線を向け返す (B の視線)。このような場面において、A の視線は、B が視線を自身に向け返すことを求めるものであり、B はそのことを理解したために視線を向け返した。この B の視線によって、A は、B が A の視線の意味を理解した、ということが理解可能になる。以上のように、相互行為内におこる振る舞いの連鎖的構造を記述することが、Goodwin の研究の基礎となっている。ただし、Goodwin の研究は、(上の例のように視線という) 特定の身体に関わる現象のみを対象としたというよりも、様々な場面における相互行為の中で、多種多様な身体に関わる現象から適切なもの(前述の例では視線)がどのように利用されているかを明らかにしたものと見える。しかし、まずは McNeill らの身体動作の産出の側面に関する

周囲の環境を利用して、会話を達成する場面では、それらをどのように利用し、会話を達成しているかが研究の対象となっている(平本, 2015)。そのため、所謂会話分析を行っているとされる Sacks や Schegloff の研究の中にも、身体に関わる現象に言及したものは存在する。(Sacks & Schegloff, 2001; Schegloff, 1984; 1998)。“会話分析”は主に音声発話を対象としたものであるとし、非言語の振る舞いを対象と加えることで、マルチモーダル分析や相互行為分析という既存の“会話分析”とは異なる研究とする風潮がないわけではない。しかし、筆者は会話分析や相互行為分析を厳密に区別する意図はないことを強調しておく。^{iv} Schegloff(2007)が主張する連鎖組織(sequence organization)とは隣接ペアのように会話の中の発話のみを対象とした。Schegloff は、発話以外の視線や身振りなどによる連鎖を連鎖的組織(sequential organization)と呼称している。ただし、振る舞いが連鎖するという隣接ペアのコンセプトは、Goodwin(1981)が示したように、発話以外の振る舞いを記述する上でも極めて有用であるといえる(高木, 2009)。

アプローチと比較するために、ここではジェスチャーについて言及した研究について紹介する。

相互行為分析の観点からは、McNeillの研究は身体に関わる現象を産出した個人内のみには帰属するものとして扱っていると批判される(Streeck, Goodwin & LeBaron, 2011)。相互行為分析の研究者たちは、相互行為の中で身体に関わる現象の産出者だけではなく、他の会話参与者たちが、その現象をどのように扱っているのかを検討するべきだと主張している。その中で Goodwin(2007)は、McNeill(1992)が提唱したジェスチャー空間(gesture space)^vの概念を批判・拡張する形で、ジェスチャーというものが先行した文脈や共起する発話だけではなく、周囲の環境と密接に接続することを指摘した。この概念を Goodwin は環境に接続された身振り(environmentally caupled gesture)と呼称している。環境に接続された身振りという概念は、彼の相互行為の記述、分析に対する考え方が明確に現れたものといえる。彼は専門家(考古学者)と素人(学生)が採掘作業を行いながら、専門家が素人に対して専門知や、考古学におけるやり方を伝えるという活動を分析する中で、土を指さしカラーマップと対応させるといったジェスチャーは、カラーマップといった道具、そして彼らが採掘する土といった環境と密接に関わっていることを指摘した(Goodwin, 2007; 西阪, 2008a)。つまり McNeill にとって、ジェスチャーとは産出者の思考と密接に紐付いたものであり、それ故に思考過程を明らかにするための有用な「窓」となりえた。対して、Goodwin の観点からは、ジェスチャーは周囲の環境と密接に結びついたものであり、その結びつきによって産出者と受け手が理解可能なものとなり、そして参与者にとって利用可能なものであるといえる。

また同時に、Goodwin にとって、ジェスチャーだけではなく発話、身振り手振り、視線といった相互行為の中で産出される行為(action)は、先行して存在する行為や道具・環境を相互行為の中で利用可能なものとして位置づけ、同時に先立つ行為を変容させるのである(Goodwin, 2013)。この考えは、基体(substrate)、記号論的資源(semiotic resources)、文脈的統合態(contextual configuration)^{vi}という用語によって、以下のように説明することができる。相

^v 産出者の体の前に広がるジェスチャーが頻繁に産出される空間のことを McNeill(1992)はジェスチャー空間と呼称した。

^{vi} この用語について、土倉(2014)は文脈的配置、平本・高梨(2015)は文脈的布置という訳語を当てている。本研究では、Goodwin(2013)の北村らの訳にもとづき、様々な形式をもち、多様な位置に置かれる様々な資源が配置されることによって新たな枠組みを作り上げることから、統合態という訳語を利用する。

互行為の中で、先行して産出された発話や、その発話の文法構造・音韻など発話に含まれるもの、身振り手振りや遊びのために地面に描かれた円や採掘する土の色の違いといった参与者たちを取り巻く環境は基体として取りまとめられる。この基体は、人々が参与する相互行為・活動を展開し、達成するために、適切に選択される。この基体の中から選択された参与者にとって適切で多様な記号論的資源の組み合わせは、文脈的布置という集合として組織される。さらに相互行為が展開する中で、文脈的布置、及びそれを構成する記号的資源は基体となり、新たに適切な記号的資源が選択され、新たな文脈的統合態が組織される(Goodwin, 2000; 2013; 平本・高梨, 2015; 土倉, 2014)。以上の相互行為の参与者を先行して取り巻く基体、その中から現在選択され組織化される文脈的布置は、相互行為の展開の中で常に更新され続けるという構造をもっているというのが、Goodwin の考えといえる。

Goodwin の観点から、ジェスチャーを含む行為とは、過去に存在する基体、現在作られる文脈的布置の中で人々にとって理解可能になるものである。そして、更にそのジェスチャーは基体として、新たな文脈的布置として適切に選択され、利用可能な資源となるものである。そしてジェスチャーは、環境との関係で他者に理解されるものとして産出され、同時にその身振りも環境の一部として、展開される相互行為の中で利用され続ける記号的資源の一つとなっているのである(Goodwin, 2000; 2007; 2013)。以上のように、相互行為分析、特に Goodwin による研究は、相互行為の中で起こる身体に関わる現象が、周囲の環境と密接に結びつく形で、参与者たちが理解可能になることを指摘しただけではなく、その現象が相互行為を展開するための利用可能な資源であることを指摘した。この点から、Goodwin の相互行為に対する研究アプローチとは身体に関わる現象が、相互行為の中で参与者にとってどのように利用されているのか、を明らかにしようとしたものいえる。

2.2.4 相互行為研究における構造的アプローチ

以上、本節では相互行為における身体に関わる現象は、すでに様々な現象が研究で取り扱われ、多種多様な研究領域において分析の対象となっていることを示した。その中で、Kendon(1990; 2004)は相互行為の中で生起する多種多様な身体に関わる現象(立ち位置や身振り手振り)を対象に研究を行った。Kendon

は、ジェスチャーに対する研究や F 陣形の研究を通して、相互行為の中で観察される多種多様な身体に関わる現象に対して、記述可能な構造を見出したといえる。この Kendon の発見、記述した身体に関わる現象の構造をもとに、多くの研究が行われた。McNeill に代表される言語心理学・発達心理学の研究は、その中で、社会的・文化的ルールなどの、外在する鋳型によって特定の形状が与えられていない「自発的ジェスチャー」に着目し、それが伝達しようとする人の意図によって産出されるものではなく、思考過程の中でこぼれ落ちるものであることを指摘した。対して、Goodwin に代表される相互行為分析の研究は、会話などの相互行為による活動がどのように達成されるかを記述するために、参与者たちは、発話や周囲の環境と同様に、身体動作や互いの身体の中にある構造を利用していることを明らかにした。

本研究では、前述のように Kendon の F 陣形、及び構造的アプローチに基づき研究を行う。では、Kendon の構造的アプローチとは、上記の 2 つの研究アプローチと、どのように異なるのだろうか。まず McNeill のアプローチとは、身体に関わる現象の産出の側面に光を当てたものであった。そして、身振りというものが、単に伝達を意図したものだけではなく、我々の想定するような意図の外に、こぼれ落ちる形で産出される可能性を示唆した。そのため、彼らの研究は、Kendon の取り扱ってきた多種多様な身体に関わる現象の一部のみを取り出したものであり、かつ身振りを産出の側面だけからアプローチしたものとして批判されるものであった。本研究では、言語心理学・発達心理学が取り扱ってきた自発的ジェスチャーという枠組みにはとらわれず、立ち位置・手の位置といった身体に関わる現象を取り扱い、また単に身体に関わる現象の産出の側面を探求するのではなく、相互行為の中で、いかに利用されているのかを検討する点で、Kendon 及び相互行為分析の観点に連なるものである。同時に、言語心理学・発達心理学が示してきた動作の反復(古山, 2009)などの現象は記述の中で利用する。そして、心理学におけるジェスチャー研究が示唆した人々の振る舞いの中には、意図の枠外にあるが、同時に思考の産出過程においてこぼれ落ちるが存在する視点は、本研究にとって重要な示唆となりうるものである。

Goodwin に代表される相互行為分析は、Kendon の F 陣形研究、構造的アプローチと極めて似た側面をもつ。前述のように構造的アプローチとは、(i) 参与者を個々に検討するのではなく、参与者間の行動的關係とそのフィードバック過程への着目、(ii) 相互行為を多重的な層構造として捉えること、(iii) 出会いの帰

結ではなく進行中のプロセス自体に着目し、いかに定常性が維持されているかを検討すること、という3つの特徴をもつ手法であるとされている(菅原, 1996). 特に, (i)参加者を個々に見るのではなく, 参加者間の行動的關係とそのフィードバック過程への着目する点は, 会話分析における連鎖組織(Schegloff, 2007)とそのアイデアに基づく Goodwin の身体に関わる現象の連鎖の記述によって, より精確になされているといえるだろう. 一方で, 相互行為分析の「活動がどのように達成されるかを記述する」という目的と, (ii)相互行為を多重的な層構造として捉える, という特徴は相反するものである. そして, このことは, Kendon 自身が提示した特徴には含まれていないが, 彼の分析の特徴である, 一部の身体に係る現象のみを取り出して検討する点が重要であると本研究では考える.

比較をするために, Kendon の F 陣形の検討と, 相互行為分析において立ち位置を検討したものとして, Mondada(2009)による相互行為空間(interactional space)の研究を挙げる. Mondada(2009)は公共空間の中で, 道案内という活動がなされる場面の観察を行った. 結果, 人々は, 案内される側は, 案内をしてもらう人を公共空間の中から探しだし, 接近し, 案内する側は, この接近に対して反応を行う. この連鎖は, 互いの立ち位置, 体の向きを調整し, 体系的な組織によって, 相互行為空間を構築されていることを示した. この観察結果は, 道案内という会話が開始される前の準備部門と, 案内が開始された部門の差異を参加者たちは, 自身の身体的資源を利用し, 相互行為のための空間を構築することを, 互いに示し合っていることを示すものである. Mondada(2009)の検討は, 道案内という活動の開始が, どのように達成されているかを, 立ち位置や, それ以外の様々な記号的資源を用いて記述したものである. 対して, Kendon(1990)の検討は, 立ち位置のみに着目したものである. そして, その立ち位置の組み合わせである陣形は, 公共空間に大勢いる人々の中の一部のみが, 会話をするための集団として, 他の人々と区別される資源であり, 会話が開始され展開される中では, 維持される.

相互行為分析の目的は, 人々の活動がどのように達成されているかを記述することである. そのため, 発話, 立ち位置, 視線といったものは, 参加者が活動を達成するために, 利用されたか否かが記述される. 前述の Goodwin(2013)の考えを踏まえるならば, 相互行為の中の行動は参加者たちが理解可能な形で産出される. そしてその行動は次の行動のために利用可能な資源となる. この

とき、行動を構成する様々な記号論的資源間には、階層構造は存在しない。即ち、行動によって、様々な記号論資源が変容し、変容した記号論的資源によって行動も変容するというように、相互反映的な関係性が存在するだけである。この関係性を見るためには、1つの身体に関わる現象に着目するよりも、活動を記述することが重要である。そして、相互行為分析において多重的な層構造は認められないと考えることができる。このことはMondada(2009)の研究の中で、道案内という活動の記述を行うときに、相互行為空間を形成することによって、道案内がなされたという記述をするのではなく、道案内という活動によって相互行為空間が形成され、相互行為空間が形成されることによって道案内が可能になるという、相互反映的な記述がなされていることに顕著である。

これに対して構造的アプローチでは、立ち位置特定の記号的資源同士の連鎖構造が分析の対象となっている。また、会話分析が特定の活動とそのための資源の相互反映的な過程を記述しようとするに対して、構造的アプローチでは、会話の参与者と他者が区別され、会話が展開していくための基盤が立ち位置の調整によって作られていることを明らかにしようとしている(Kendon, 1990)。確かに、立ち位置による陣形は、会話の展開にあわせて調整されるものである。そのため、立ち位置と会話の間に相互に反映しあう関係がないわけではない。しかし、まず会話を展開するために、立ち位置による陣形が必要とされる。このことは、相互行為の中に多重的な層構造が存在することを前提とした分析であり、活動と資源の間に階層構造を見出すことを目的としない会話分析との大きな違いであるといえる。

本研究で行う会話事例の分析においても、相互行為分析が提示してきた連鎖的組織といった道具立ては、重要なものである。しかし、相互行為のために基盤となる身体配置を明らかにするという目的は、F 陣形と会話活動の関係のように、相互行為の中に層構造が存在する考えに準じるものである。この目的を達成するために、立ち位置や手の位置といった身体に関わる現象の一部のみに着目した研究を行っていく。

3 データ概要

本章では、各々の研究において分析を行った2つの会話データの概要を記す。1つは未来館 SC 会話コーパスと呼称される会話データである。もう1つは千葉大学3人会話コーパスと呼称される会話データである。それぞれの会話コーパスは公開(予定)されている。

3.1 未来館 SC 会話コーパス

3.1.1 背景

未来館 SC コーパス (Bono et.al, 2014; 坊農ら, 2013; 城ら, 2014, 2015)^{vii} は、日本科学未来館に勤務する科学コミュニケーター(SC)が来館者に対して、未来館の展示物を解説する会話データである。城ら(2014; 2015)によってコーパスについて記した論文を参照しながら、このデータの概要について、詳述していく。

坊農ら(2013)による科学コミュニケーションについての研究プロジェクトの一端として、未来館 SC 会話コーパスは作成された。このコーパスは、日本科学未来館(以下、未来館と表記)でなされた会話を収録したものである。未来館は、東京都江東区青海の国際研究交流大学村内にある科学館であり、「科学技術を文化として捉え、私たちの社会に対する役割と未来の可能性について考え、語り合うための、すべての人々にひらかれた場」を設立理念として作られた施設である^{viii}。未来館には、科学コミュニケーター(以下、SC と表記)と呼ばれる職員が雇用されている。SC は、前述の未来館の理念を達成し、科学者・一般の人々をつなぐ役割のため、職務を遂行している。SC は未来館に雇用される職員であり、職務としておおまかに展示フロアでの来館者への解説・実演、展示やイベントの企画・制作や科学情報の発信や他組織とのネットワークづくりといった業務を行っている。特に展示フロアでの来館者への解説において、「知識を伝え

^{vii} この会話データは、NII 情報学研究データリポジトリ (<http://www.nii.ac.jp/cscenter/idr/>) より順次公開予定である。また本章の内容は、公開時に配布予定の牧野・坊農(In Press)による利用マニュアルにもとづいたものである。

^{viii} 日本科学未来館ホームページ(<http://www.miraikan.jst.go.jp/>)より (2016/2/13 確認)

るだけではなく、みなさんとともに考えながら話を深めていく」「正解のない問題に対し、さまざまな立場の意見を聞くことでみんなが新たな気づきを得る」ことを未来館スタイルとして打ち出している^{ix}(城ら, 2014)。このスタイルは、科学教育というものは、科学分野における専門家が専門知識を持たない人々に対して、正確な科学知識を伝えるものであるという欠如モデルを前提とし、人々を啓蒙していくというスタイルではない(藤垣・廣野, 2008)。むしろ専門家と専門知識を持たない人々が、互いに双方向に知識・意見を募り、議論を深めていく重きを置いたものである。坊農ら(2013)は、この SC と一般の人々の間の双方向のやり取りによって、どのように科学に対する議論が深められているのか、そしてそのための熟達した技術を SC はどのように発揮し、どのように熟達していくのかを明らかにするために未来館でのフィールドワークを行った。未来館 SC 会話コーパスは、このフィールドワークの 1 つとして、収録されたものであった。また、同時に、このコーパスの収録は、様々な学術分野(会話分析・自然言語処理・画像処理)による人々のコミュニケーション場面の検討を可能とすることも目的としたため、複数のカメラによって、会話場面が収録されている。

3.1.2 概要

以上のような背景によって、収録された未来館 SC 会話コーパスは、以下のような場所、参加者による会話が収録されている。コーパスに含まれる会話データは、未来館 5 階展示フロア「空間のひろがり」「巨大望遠鏡で宇宙の謎に挑む」において収録された。2 つの展示エリアは繋がり、1 つの大きなスペースを形成している。このスペースは壁に挟まれた大きな通路となっており、壁には展示パネル／モニターが設置され、3 台ほど模型が設置されていた(Fig.4)。壁に挟まれたスペースに入ることができる入口/出口付近は、スロープを置き、会話データの収録を行っている旨を記載した看板を設置し、可能な限り研究協力者が入り口／出口付近に常駐し、収録に同意していない他の来館者が収録スペースに誤って入ってしまわないように配慮した。なお、会話データは、国立情報学研究所の倫理委員会において人を対象とした調査研究として審査を受け、収録を行っており、上記の収録スペースに入る参加者たちには、収録及び会話データ

^{ix} 日本科学未来館ホームページ

(<https://www.miraikan.jst.go.jp/online/communication/work.html>)より (2016/2/13 確認)

公開に対する同意が得られている。

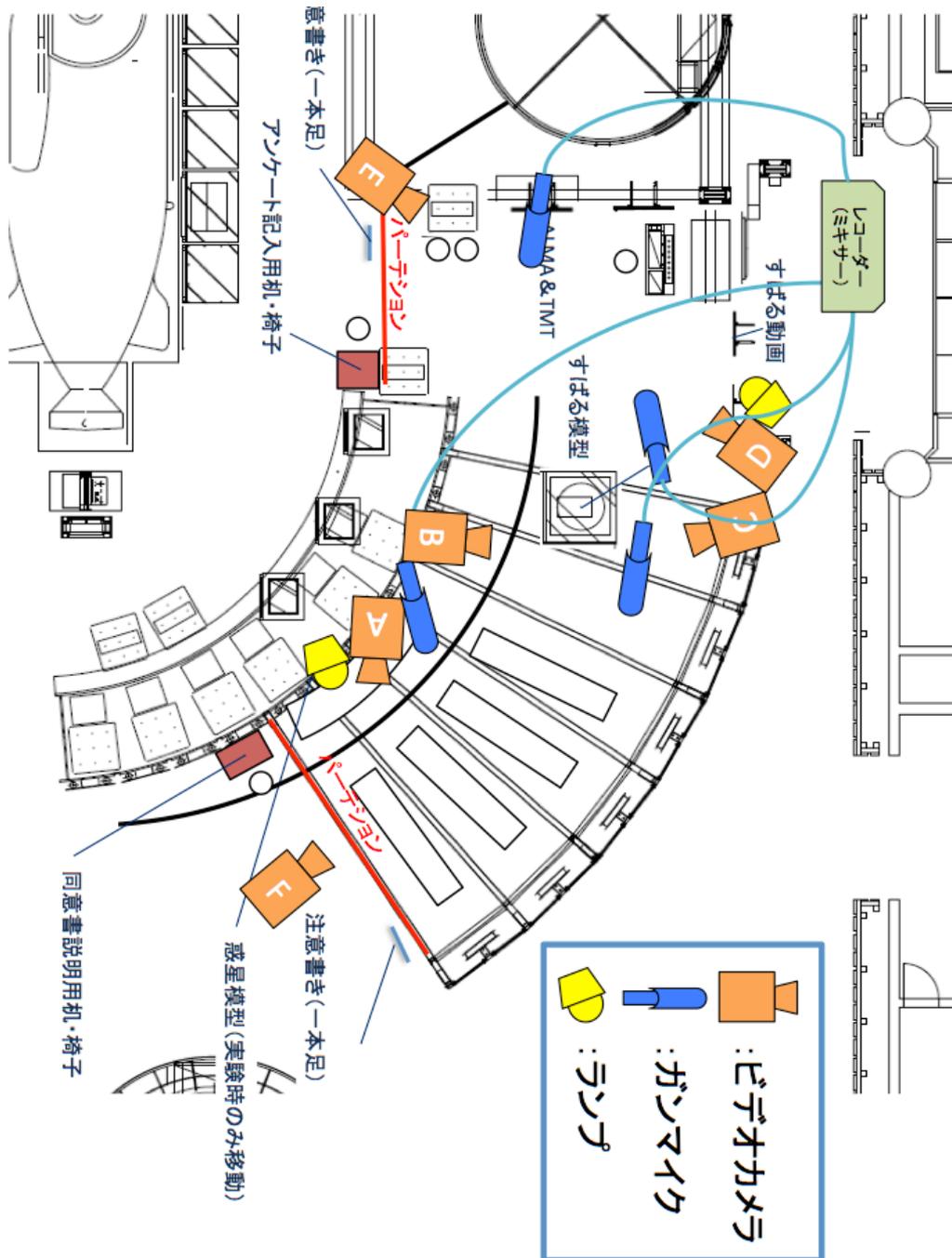


Fig.4 収録スペースの模式図(城ら, 2014 より一部改定)

会話には、SC と、収録日に実際に未来館に来館していた来館者たちが参与している。計 15 名の SC の協力があり、会話データごとに、1 名の SC が会話に参与していた。この SC は、未来館に勤務している現役、または過去に未来館で勤務していた OB/OG が含まれており、彼／彼女らは、他 SC より「ベテラン／熟達している」と評価されている人々であった。対して来館者は、会話データごとに、1 名以上、最大 5 名が参加している。上記のスペースを収録のために区切ることは、1 日つき 1 時間程度であった。全 10 日間の収録日を通して、ベテラン SC 2 人に 1 日 30 分ずつ、それぞれ 3 組の来館者に対して、可能な限り普段通りに対話をしてもらい、その様子を撮影した。1 組当たりにかかる対話時間や展示物の紹介方法については特に定めなかったため、数分で終わる対話もあれば、10 分を超える対話も生じた。収録スペースにおいて、参与者たちの会話を収録するために、5 台の定点ビデオカメラ、4 本の指向性ガンマイク、5 台の Kinect を Fig.4 のように設置した。さらに撮影者によるビデオ撮影、参与者たちが胸元へと装着した無線マイクによって、会話の動画・音声の収録を行った。ビデオカメラは、定点の 5 台、会話を行っている SC・来館者の周囲を適宜歩きながら撮影するためのビデオカメラの 6 台によって収録された。マイクは、定点として 4 本の指向性ガンマイクが設置された。また SC が必ず胸元へと無線マイクを装着し、来館者のうち任意の 2 名が胸元へと無線マイクを装着した。以上のカメラ・マイクによって収録された動画・音声をもとに、本研究では分析を行っていく。なお、本研究では分析対象のデータとはしなかったが、5 台の定点ビデオカメラと同じ位置に 5 台の Kinect を設置し、データが収録されている。以上の参与者たちの協力、収録方法にり、未来館 SC 会話コーパスは 35 会話データ、約 8 時間の会話データが収録されている。その中で、本研究の分析対象としたのは、3 つの会話データである。3 つの会話データは、すべて、SC1 名、来館者 2 名からなる 3 人会話であった。

3.2 千葉大学 3 人会話コーパス

千葉大学 3 人会話コーパスとは、なるべく日常場面に近い自然な相互行為を高品質なデータとし収録することを目的に構築されたものである (Den & Enomo, 2014; 伝・榎本, 2014)。このコーパスに収録された会話は、研究者によって集められた親近性のある同性の 3 名による 10 分程度のものである。実際

には、1グループごとに、約10分間の会話を3回収録されているが、コーパスとして公開されたのは、2回目の収録された12組の10分間の会話のみであった。これは、会話参加者の収録環境への慣れと疲労度・集中力や話題の豊富さが理由であるとされている。このコーパスの会話は、サイコロを降って出た目に書かれたトピックについて話すことが教示され、同時にそのトピックからの脱線も許される教示が与えられた環境での会話であった。また、この後、分析対象とする事例で共通して観察されるように、会話の収録冒頭では必ず参加者の1人が「トピックは〇〇（サイコロの目によって教示されたトピック）です」と宣言を行う。この宣言は、研究者によって指示された形式であった。集められた3名の参加者は、各々の前に丸い机が置かれ、3名が円形に配置されるように設置された椅子に座っていた(Fig.5)。

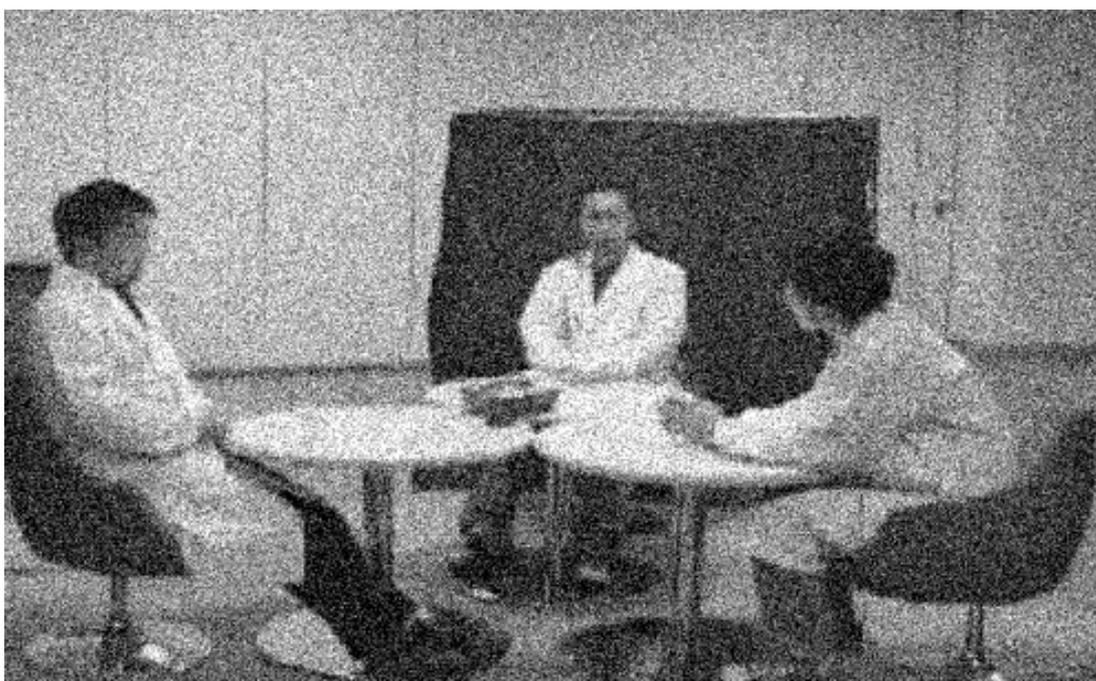


Fig. 5 千葉大学3人会話コーパス

3.3 記述手法

本研究が分析対象として取り上げる会話データの発話書き起こしはJefferson (2004)が開発し、西阪(2008b)が日本語に用いた方法に基づく。主な記号は以下のようなものとなる。

(1.2)沈黙が生じた秒数を示す

(.) 0.2 秒に満たない沈黙を示す

[言葉の重なりの開始

] 言葉の重なりの終了

: 直前の音の引き伸ばし，その個数により引き伸ばしの長さが示される

↑ 続く音素の音程が高いことを示す

↓ 続く音素の音程が低いことを示す

¥ 囲まれている部分が笑いを含んだ声で産出されたことを示す

° 囲まれている部分が，相対的に弱められた発話であったことを示す

hh 呼気音を示す

文字(h) 文字が呼気音と共に産出されたことを示す

>文字< 囲まれた部分が相対的に早く発話されていたことを示す

<文字> 囲まれた部分が相対的にゆっくりと発話されていたことを示す

4. 研究 1 異なる陣形による複数の活動を位置づける方法の分析

本章で行う研究 1 では、未来館 SC 会話コーパスデータに含まれる展示物解説場面の立位会話を分析する。対象とする会話場面には、雑談という活動と、展示物解説活動という 2 つの活動が含まれており、この 2 つの活動は連続して生起している。この活動の変化が起こったときの参加者たちの立ち位置による陣形を検討する。以上の分析を通して、既存の F 陣形（参加者たちが平等な位置に立つ状態）に対して、H 陣形（特定の参加者が他者を先導する状態）が存在することを示す。

4.1 目的

Kendon が提示した F 陣形のシステムとは、会話活動というものが空間上に位置づけられることを示したものである。そして空間上に位置づけられることによって形成される F 陣形には 2 つの構造が含まれている。つまり、人々がもつ活動に対応した空間(すなわち操作領域)を重ねる形で O 空間を構築し、その周囲には人々が立つべき P 空間が広がり、さらにその外縁に R 空間が広がるという空間的構造、参加者たちが互いの立ち位置を調整しながら F 陣形を維持するという時間的構造である。さて、この考えは、我々の活動は常に空間に位置づけられるという考えに基づくものであり、ある一つの会話が一つの活動によって構成されていることを前提としている。そのため、一つの会話が継続する限り、一つの F 陣形が維持される(Kendon, 1990)。また、活動のための空間である操作領域を重ねることによって構築される F 陣形は、当然会話の中の活動が変化することによって、様々な形で現れる。Kendon(2010)は動物園の象をみるときや野球（おそらく草野球）の試合を見るときに、隣接配列の F 陣形を形成しながら会話をすることを指摘している。また、Kendon(2010)は教師と生徒、演者と聴衆といった異なる役割をもった人々の行う会話において、そのことが参加者間の位置が離れるといった形で空間に位置づけられるように、所謂雑談時に形成される F 陣形とは異なる身体配置が存在することを指摘している。また、ポスター発表場面において、参加者たちが見るべきモノ(object)が存在し、発表者と聴衆という参加者間の役割が異なるときも、円形配列や対面配列のような典型的 F 陣形とは異なる陣形が観察されている(坊農, 2009)。

だが、すべての会話は常に一つの活動から構成されるのだろうか。前述のように、F 陣形とは会話参加者を他と異なる集団として定義づけるものであり、単一会話が続く限り単一 F 陣形が形成され続ける定義されていた。しかしながら、Kendon(1990)も F 陣形を形成し、行われる会話をいくつかの段階に分けられるものとして記述している。会話冒頭の 2 人会話の場合、挨拶からちょっとした会話(small talk)は対面配列で行われ、そこから会話の本題への移行に際して、隣接配列へと変化することが、多いとしている。そして前述のように、会話参加者間の役割の違いによって、人々の身体配置の形状は変化する。しかしながら、日常的に異なる役割をもった参加者間の会話であっても所謂 F 陣形で会話をすることもあれば（廊下で大学教授と出会った学生が常に離れた位置ではなさないように）、そうではないこともある。そして、一つの継続された会話であったとしても、その中で、刻々と参加者間の役割、権利の差異が変化することもある。そこで、研究 1 では、単一の会話が複数の活動で構成されると考える。そして、単一の会話の中で活動変化が、人々の立ち位置によって形成される陣形変化に反映されるかを検討する。そして、会話内の活動変化が身体配置の変化を通して、空間に位置づけられるか否かを明らかにする。

4.2 分析方針

研究 1 では、展示物解説会話場面を対象に、2 つの断片について質的に検討を行う。対象とする会話データは、3 章で詳述した未来館 SC 会話コーパスである。以下、本章での分析に関わる部分について、概要を記す。続けて質的分析の方針として、2 つの異なる陣形について述べる。

4.2.1 分析対象

本章の分析は、未来館 SC 会話コーパスを対象とする。このコーパスには、未来館に勤める科学コミュニケーター(SC)が来館者に対して、展示物の解説を行った場面が収録されている。つまり、対象とする会話データは、参加者間で社会的役割の差異がある会話場面であるといえる。しかしながら、前述のように、未来館の方針、及び科学コミュニケーションの理念から、SC は展示物や科学知識について、来館者に一方的に知識を啓蒙するという形ではなく、SC と来館

者による対話を通して、科学に対する知識、捉え方を深めていくことを目的としている(城ら, 2014). これは、単なる理念というだけではなく、来館者にとって SC とはどのような存在なのかということが必ずしも事前に明確であるわけではなく、どのような存在であるかを来館者たちに示し、どのようなコミュニケーションを取ろうとするかを示すことを事前に行うことが指摘されている(Bono, et.al, 2014). つまり、SC は自身の役割によって、来館者に対して展示物解説という会話活動を開始するのではなく、自身の役割を示すことなどで来館者との会話を通して達成し、その後展示物解説という活動に移行すると考えられる. そこで、本章では、会話データの中から、SC が展示物解説を開始する直前の会話から、解説を展開するまでを分析の対象とする. そして、連続した会話場面の中に含まれる解説前までの会話活動と解説という活動という 2 つの異なる活動が、どのように異なる形で空間に位置づけられるのかを検討していく.

4.2.2 異なる陣形

会話内の異なる活動が空間に位置づけられているかを分析するために、以下の仮説を検討していく. 検討していく仮説とは「人々の立ち位置によって形成される陣形の中には、F 陣形と、F 陣形とは異なる陣形が存在する」というものである. Kendon(1990)は、F 陣形に参加する人々は皆平等な権利を持っているとした. 対して、参加者間の権利に差異がある場合には、異なる陣形が生じる可能性を示唆している. この陣形では、異なる立ち位置に立つ参加者の立ち位置は、Head position と呼ばれ、当該陣形は、Head position となる参加者を含むこととなる(前述のように、この可能性を Kendon(2010)は教師や学生といった異なる役割の参加者が、離れた距離に位置しながら、相互行為を展開していることを指摘している). この F 陣形とは異なる陣形では、Head position となる参加者が優先的な発話権を所持していることが示唆されている(Kendon,1990). 本研究ではこの Head position を含む陣形を H 陣形と呼称し、F 陣形と H 陣形の違いが、会話の中でどのように現れる、相互行為にどのように影響を与えるのかを検討する (Fig. 6) .

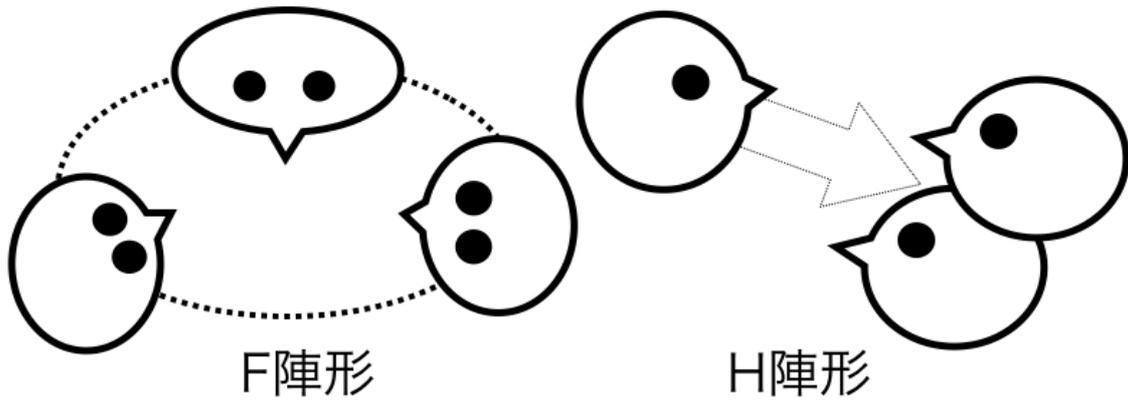


Fig. 6 身体の空間陣形の2種類

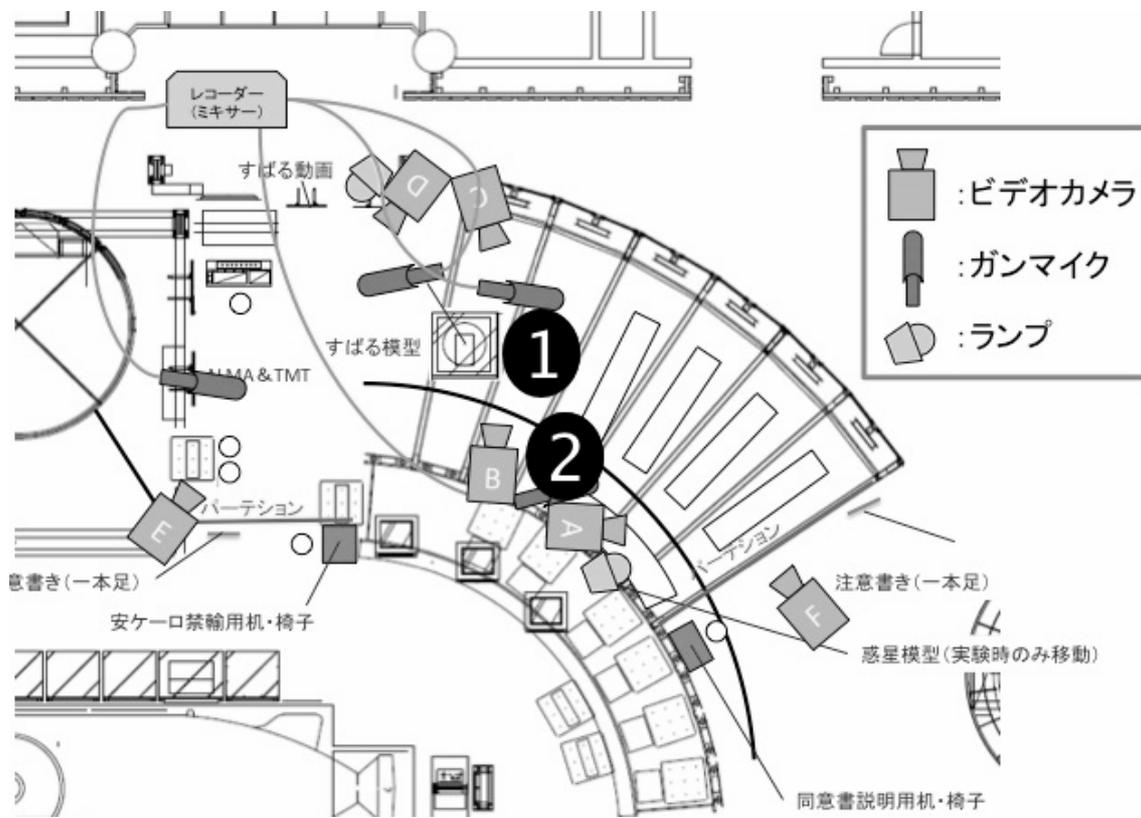


Fig.7 会話データの収録環境(城ら, 2014 より一部筆者により加筆)

4.3. 分析

本研究では、上記会話データの中で、SCによる展示物の解説中、来館者とSCの間で、どのような身体の間隔陣形が形成・維持・変更されるかについて事例分析を行う。また、このような陣形の変化は3人以上の会話場面において観察可能となる（2人会話の場合、H陣形と想定される場面で、どちらが先導的立場となっているかが観察できない）。また、一方で4人以上の会話場面の場合、2人会話が2組といった会話の分裂が生起する可能性がある^x。本章の目的であるF陣形に対するH陣形を観察するために、研究1ではもっともシンプルなH陣形が形成されうる3人会話を対象とした。未来館SC会話コーパスは35会話データからなる。そのうち、2人会話(SCと来館者1名)は8会話、3人会話(SCと来館者2名)は17会話、4人会話(SCと来館者3名)は5会話、5人以上会話は5会話データであった。17会話データの3人会話の内、3会話データは親子の来館者であったため、分析の対象外とした^{xi}。14会話データを対象に分析を実施した。そして、本章では2つの会話データ内の断片について質的検討の結果を示す。

事例1-1では、SCが、1人だけ他の2人とは異なる立ち位置に立つH陣形時に、来館者に対してどのようにして展示物解説を開始し、その解説に対して、来館者が解説を受け入れるのかについて分析を行った。事例1-2では、SCと来館者が、O空間を形成するF陣形において解説がなされた事例であるが、SCがその解説をどのような形で産出しているかを分析した。事例1-1は、展示物解説という活動が、H陣という形で位置づけられている可能性を示すものである。それに対して、事例1-2は、H陣形を利用せずに解説を行った事例の検討である。事例1-2を通して、H陣形の中で解説をしなかったとき、その解説という活動はどのように位置づけられているかを明らかにするものである。なお事例1-1は収録スペース内のすばる望遠鏡の模型前(Fig.7-①)、事例1-2は壁に展示されたパネル（宇宙の広がり）前(Fig.7-②)で行われた会話であった。

^x 会話の分裂については Egbert(1997)などを参照。

^{xi} 後に考察するように、立ち位置による陣形などの身体配置は、参加者が互いの身体が同じ／異なる状態であることを理解し、示し合うことによって形成されているといえる。よって、大人とは身体が大きく異なる子供が参与した会話データは、本研究の分析には不適切と考え除外した。なお、子供が参与したとき、展示物解説活動とその周囲でなされる相互行為についての分析は牧野・坊農(2016)を参照のこと。

4.3.1 事例 1-1 H 陣形において語りがなされる事例

まず事例 1-1 は、当初形成された F 陣形が破棄され、新たに H 陣形が形成されることによって展示物解説が開始されたと考えられる。以下の分析において、まず展示物解説と H 陣形の形成の関係性、F 陣形破棄された後に H 陣形が形成されたか、解説が継続する中で H 陣形が維持されたのか、この 3 点について検討していく。

事例 1-1 は SC と 2 名の来館者 (V1 と V2) による会話である。会話データの中で、他の展示物解説が終わったところで、SC は来館者たちを先導し、すばる望遠鏡の模型(以降では模型と表記)の前へと移動した。移動直後に SC は来館者たちにハワイについて尋ねた。すると、V1 は、V2 と共にハワイへ旅行したことがあるが、すばる望遠鏡のあるマウナケア山へ行くことは旅程の都合で断念したことを SC に話した。このハワイ旅行に関する会話が展開していたとき、SC と V1 との間で対面配列による F 陣形が形成されていた。そのとき V2 は V1 の横から少し離れ、すばる望遠鏡の模型の側面に位置していた (Fig.8-A)。

Fig.8 と Fig.9 は、SC と来館者の立ち位置(①から④)、発話 (Fig. 8 中央, 01 行目から 19 行目) を示したものである。立ち位置を示した図では、実線は参加者たちがいる立ち位置を、点線は移動前の立ち位置を、矢印は移動の方向を、それぞれ示している。また点線で囲われた発話の間、参加者たちは立ち位置を示した図の状態にいたことが示されている。また図の左に置かれた A から N は彼女らの身体動作を模したものである。それらの動作を伴った発話は{n}の後、下線が引かれている。上記に対応する動作の内容については、発話下部に同一の{n}後、太字かつ斜体で記述した。

4.3.1.1 分析

事例 1-1 は便宜的に 2 つの段階に分けることができる。すなわち、SC と V1 が V2 を会話に誘うという段階(Fig.8)と、SC が V1 と V2 に対して展示物である「すばる望遠鏡の模型」について解説を行っている段階(Fig.9)の 2 つの段階である。これらの中で、参加者たちの立ち位置がどのように変更されたのかを見ていく。

当初、V1 と SC の間で、対面配列の F 陣形が形成されていた(Fig.8-A)。結論

を先取りすると、この事例では V1 と SC による対面配列の F 陣形から、まず V2 を含めた H 陣形への移行がなされ、次に 3 者が H 陣形を維持した中で、SC の解説が行われたといえる事例であった。まず 01 行目の発話によって、SC と V1 の間で続いていたハワイ旅行の話が終結した。その後、SC と V1 がそれぞれ V2 を会話に参加するように勧誘していた。まず V1 は、それまでいた位置から半歩前に踏み出し、前傾姿勢となった(トランスクリプトの下線{1})、しかし、V1 は元の位置へとすぐに戻り、V2 のほうへと向いた(下線{2})。そして Fig.8-B の状態で V1 は V2 に向けて 03 行目の発話を行った。ここまでが、V1 による V2 の会話へ参与することへの勧誘であった。続けて、下線{3}の V1 の発話(05 行目)と共起して、SC が半歩前に出るのと同時に、V1 が右手を上げた(Fig.8-C)。下線{4}の発話(06, 07 行目)に共起して、SC は元の位置に戻り Fig.8-D のようになった。ここまで、SC と V1 がそれぞれ半歩ずつ前に進むが、すぐに元の位置に戻った。続いて、SC による V2 の勧誘がなされた。下線{5}において、再び、SC が一歩前に進み、V2 に向かって、左手を手差した(Fig.8-E)。この手差しと共起した下線{5}の SC の発話(07 行目)の宛先となった V2 は、一歩後ろに下がりながら(Fig.8-F)、頭を軽く横に振った (Fig.8-G)。V2 の相槌直後に、SC は 09 行目の発話を産出した。この発話における下線{6}において、V1 が V2 の隣へと移動した(Fig.8-H)。この一連の動作によって、三者の配列は V1 と V2 が隣り合い、SC は模型の前に立つという配置となった。以上が事例 1-1 における 1 段階目である。

2 段階目において、来館者たちは、展示物の周辺で 2 回移動した。1 回目の移動は、V1 が SC の 11 行目の発話の下線{7}で前傾姿勢になる一方(Fig.9-J)、V1 と V2 が下線{8}に伴って同時に一歩前に進んだ(Fig.9-K)。2 回目の移動は、SC が、14 行目の発話下線{9}に伴って一歩下がり(Fig.9-L)、{10}の誘いに対して、V1 が模型の前面に移動(Fig.9-M)、その後の沈黙と SC の 17 行目発話にともなって、V2 も模型前面に移動し、V1 の隣に並んだ(Fig.9-N)。

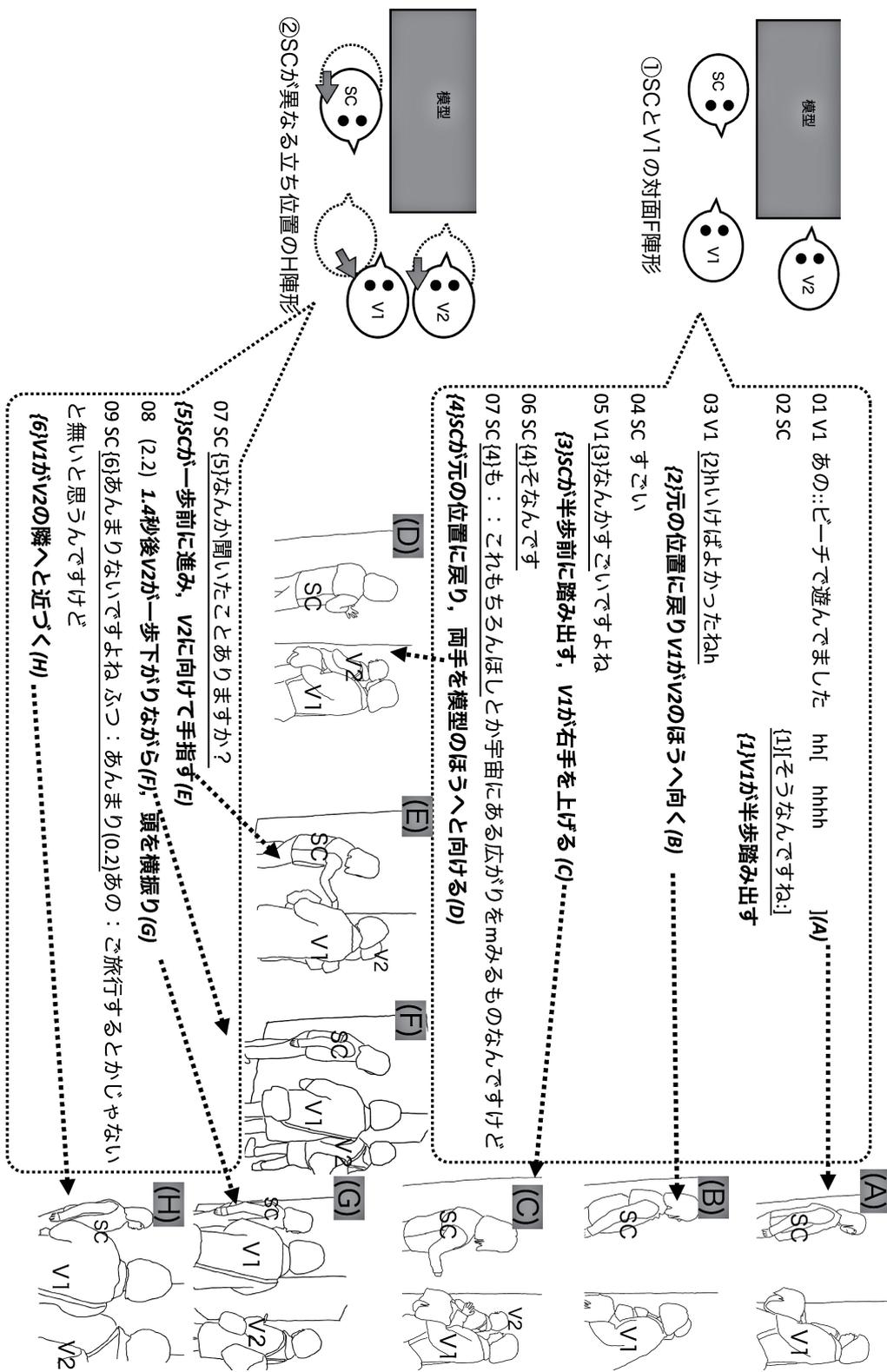


Fig.8 事例 1-1 前半における参加者たちの立ち位置の模式図・トランスクリプト・静止画

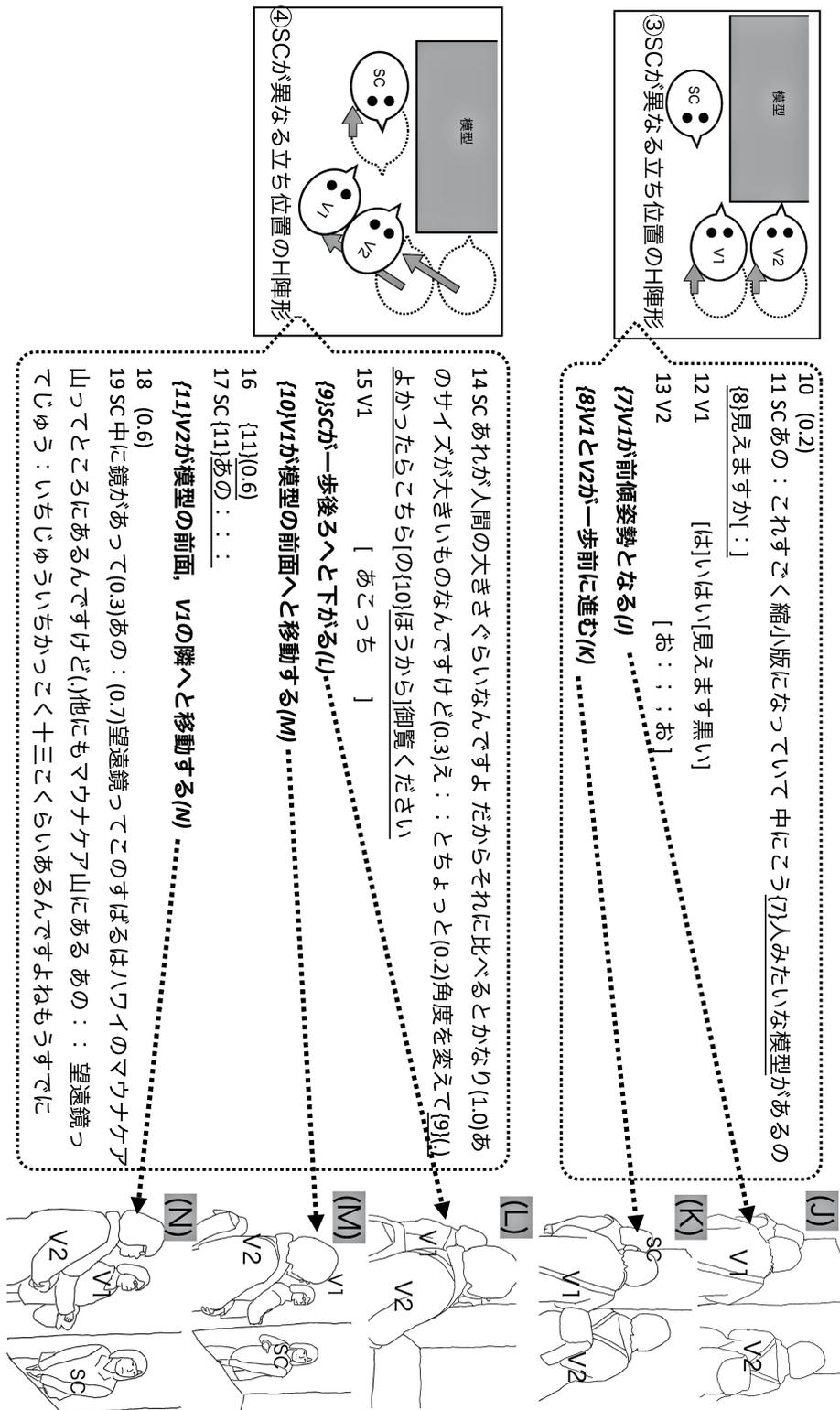


Fig.9 事例 1-1 後半における参加者たちの立ち位置の模式図・トランスクリプト・静止画

4.3.1.2 考察

事例 1-1 では、参与者たちが、立ち位置を変更しながら、会話を展開し、その中で SC が展示物解説を開始した。まず、この立ち位置の変更に伴う陣形の変化について考察していく。

F 陣形から H 陣形への移行

当初、V1 と SC 間で、対面配列の F 陣形が成立していた。そのとき、V2 は、Fig.3-A のように、V1 と SC とは少し離れた場所に立っており、V1 と SC の F 陣形には参与せず、離れた位置(outer position)にいたのである(Kendon, 1990)。このことは、01 行目から 07 行目にかけて V1 と SC が半歩進んだことに対して、V2 が何の反応も行わなかったことが示されている。SC は、離れた位置にいる V2 に対して勧誘している。まず 05 行目において、SC が半歩進み、右手をあげようとする。しかし V1 が手を上げ(Fig.8-B)、発話したことを受けて、SC は一旦 V1 との会話に戻り、模型のほうへと身体を向けた。だが、すぐに 07 行目の発話の下線{4}の部分において、V1 に模型の説明をしつつも、V2 のほうへと身体を向け、一歩踏み出し、再び右手を上げ、V2 を手差ししながら、V2 に対して質問した(下線{5})。この質問を受けて、V2 は 1.8 秒後に、一歩後に下がった。V2 は後退し、頭を軽く横に振った。V2 の行動に対して、他の参与者はどのように受け止めたのだろうか。「はい/いいえ」の質問に対して、頭を横に振ることは、否定の応答として理解できる。また SC の質問(07 行目)から 1.4 秒の沈黙の後に、V2 は頭を横に振ることで、応答を行った。頭を横に振るという行為による応答と、応答の遅延によって、V2 の応答は非優先的な否定の応答であるといえる(Pomerantz, 1984)。そのため、SC が再び質問した 09 行目の発話は、V2 の応答が遅延されている 07 行目の質問の応答の「はい/いいえ」が反転するデザイン質問として産出したといえる。また V2 が一歩下がったこと、頭部による応答までの遅延を合わせて考察すると、V2 は、SC と V1 の共有する O 空間に入ってくるわけではないが、頭部動作によって SC の発話に対して応答する責任は果たし、参与者となる意志を示しているといえる。このため、V2 の立ち位置は、会話とは関係のない離れた位置から、他の参与者が参照しなければならない位置へと変化したと考えられる。その後、V2 が位置を変更する際に視線

を向けていた V1 は V2 の隣に立った。この移動によって、三者の陣形は、Fig.8-②及び Fig.8-H のようになった。この配置は、H 陣形と呼ぶことができるのだろうか。1つの可能性として、この立ち位置による陣形は、V2 という参加者が加わったことによる F 陣形内における配列の変更 (SC と V1 による対面配列から三者の L 配列の F 陣形) と見ることもできる。しかし、このとき V2 は、V1 と SC 間で F 陣形 が形成されていたときにいた離れた位置(outer position)から、その F 陣形の O 空間を共有するために、前へ移動したわけではない。V1 と SC の F 陣形への参与の誘いに対して、一步下がっていたのである。このことから、その後形成された SC, V1, V2 の三者によって形成された H 陣形における O 空間は、それまで形成されていた SC と V1 間で形成されていた F 陣形の O 空間を引き継いだのではない。むしろ、それまでの O 空間を破棄し、新たな O 空間を共有する形で、SC と V1, V2 の三者の間で新たな陣形を形成していたといえる。このことから、H 陣形とは、F 陣形内部の配列の一部ではなく、陣形の中の F 陣形に対する異なる陣形であると考えることが妥当であるといえる。

H 陣形の形成と展示物解説の開始

次に、このように形成された H 陣形と、SC による「すばる望遠鏡の模型に関する解説」が、どのような関係になっているのかを見ていく。H 陣形の形成は、上記のように、単に V2 が後ろに下がっただけではなく、V1 が V2 の隣に並んだことによって達成されたものである。では、このとき V1 は、H 陣形を形成するような立ち位置に立ったのだろうか。そして、このあと SC は立ち位置を変更することによって、F 陣形を再形成しなかったのだろうか。これらのことを検討することは、参加者たちの立ち位置と展示物解説という活動の開始の関係について強い示唆を与えるものとなるだろう。SC による展示物解説は、11 行目の発話から開始している。一方、事例で抜粋された事例に先行して展開していた来館者たちのハワイ旅行に関するトピックは、解説の開始から遡った 04 行目の SC の発話によって完結していた。したがって、05 行目から 10 行目までの間、何を次の会話のトピックとするのか、そして、そのトピックをどのような形で展開するのかについて調整していたと考えられる。実際には、どのような調整であったのか。まず、05 行目の発話時に、半歩進み、SC が手をあげようとする。V1 もこれとほぼ同時に右手をあげ、模型について“すごい”と評価

する発話を発した。SCの半歩前進、ならびに何かを手差ししようとする行為が、V1の右手をあげる行為とバッティングしたのである。V1の関心が模型そのものへ向かいつつ合ったのを受けて、SCは展示物に身体を向け、07行目の発話を開始する。ここでSCは発話の後半で「聞いたことありますか?」と、V2に対して質問を投げかけた。ここで、SCは知識の確認を行っていることとなる。これは、これから行う展示物の解説を、どのような知識量をもった参加者に対して行うかを確認することとなり、展示物解説という活動が開始されることをある種投射しているものとなる。一方で、この投射は、“知ってる?”など直接的に知識を確認する形と比較して(城・坊農・高梨, 2015), より弱い形での投射といえる。さらにこの知識の確認、つまり解説開始の投射に対して、来館者たちは発話上で、自身の知識量を示すことは行っていない。だが、V2が一步下がり、それに対してV1の隣に立つという立ち位置によって、来館者たちは発話権が平等な参加者としてではなく、解説の聴き手として振る舞うことを示しているといえる。この立ち位置による自身の役割を示すことが終わるまで、SCは09の発話のようにフィラーを含めながら、解説の開始を遅延させている。このことから、来館者たちはSCの知識量の確認という発話を、解説の開始の承認のためのものであると理解したことを立ち位置によって示し、SCもその立ち位置によって得られた承認によって、11行目の解説を開始したといえる。

展示物解説の継続とH陣形の継続

最後に、事例1-1で展示物解説の開始時に形成されたH陣形が、解説の継続にともない、どのように維持されたのかを見ていく。SCは、11行目において、解説を一時中断し、V1とV2に対して、これから説明する模型が見えるかどうかを確認した。このとき、V1は姿勢を前傾させ、模型をきちんと見ようとする意図を示した。展示物がよりよく見えるように、来館者たちは一步前へ前進した。このとき、V2は、V1と同時に前進し、V1とV2が隣り合って立つように調整された。一方、SCは14行目でV1とV2に移動するよう誘ったが、それに対してV1は先に移動した。V2は、視線を、模型から先に移動していたV1に向けていた。そしてV1の新たな立ち位置が確定した後に、V1と隣り合う立ち位置へV2は移動した。SCは、移動するV1とV2に対して視線を向け、2人が隣り合う位置へ移動し終わるまで、解説の再開を行わなかった。

来館者たちによるこれら 2 つの移動の特徴は何か. 1 つ目の移動において, 来館者と展示物との間の距離の短さから, 移動する可能性は一步前に進むことに絞られていた. そのため, V1 と V2 は同時に前進を行っていたといえる. 一方で, 2 つ目の移動において, 展示物の前面の移動は, 前面に空間が広がっていることから, 移動後の立ち位置に複数の可能性が存在する. そのため, 片方の来館者が移動し終えるまで, 他方の来館者は移動をせず, これまでの陣形が維持できるようにしていた. この 2 つの来館者の移動は, それぞれ H 陣形を維持するように, 参与者たちが移動したものであった. 加えて, 来館者たちの移動は, これから移動すべき空間が, 展示物などとどのような位置関係にあるのかという環境に沿うような移動であった. 一方で, SC も来館者たちが, 陣形を維持し, 解説という活動を位置づけることを維持しようとしていることを理解しているため, 陣形が再形成されるまで解説を一時的に中断していた.

以上のことから, SC と来館者という, 事前に役割が与えられている参与者たちによる会話においても, 専門家である SC が役割にだけ基づき, 展示物解説を開始するわけではないといえる.

4.3.2 事例 1-2 F 陣形の中でなされる展示物解説という活動

事例 1-1 を通して、F 陣形と H 陣形という異なる陣形が存在すること、さらに H 陣形が展示物解説を位置づけるために形成されること、そして、解説が継続する間、参加者が環境の制約の下、相互に立ち位置を調整することによって、H 陣形を維持することが示された。この結果は、H 陣形が展示物解説という活動を空間に位置づけるために利用されているということを示唆するものである。しかしながら、展示物解説活動は、必ずしも H 陣形の形成のみによって、開始されるわけではない。では、そのように解説がなされている際の陣形は、解説とは無関係なのだろうか。以下、分析 2 では F 陣形の中で解説が開始された事例 1-2 の分析を通して、検討していく。

事例 1-2 の開始前、来館者は横並びに立ち、来館者から見て右斜め前方に SC が立つ形の H 陣形が形成された (Fig.10-A)。SC は、このような状況で解説をした。その後、一旦 F 陣形が形成されたが、その陣形を保ったまま、来館者の質問に回答するかたちで SC が新たな解説を開始した。Fig.10 は、事例 1-2 の SC と来館者の立ち位置(①から⑥)、発話トランスクリプト(00 行目から 18 行目)、静止画(A から F)を示したものである。Fig.10 では参加者の立ち位置とともに、展示物が図示されている。展示物 A は、太陽系の惑星の模型が乗せられた机を、展示物 B は、壁掛けの模式図であり、宇宙の大規模構造を示したものである。中央には太陽系が、右上には天の川が描かれている。また、Fig.10 の 18 行目以降、SC は解説を継続したが、SC と来館者の立ち位置は Fig.11 の通りとなり、変化が見られなかった。18 行目以降、立ち位置の変化はなかったものの、SC は多くのジェスチャーを産出した。Fig.12 から Fig.16 にかけて、参加者の手振りや、それに共起した発話、およびその前後の発話を示した。発話は発話の右横の番号通りに連続して、展開した。さらに Fig.12 から Fig.16 の白矢印は SC の動作方向、黒矢印は視線の移動方向を示している。

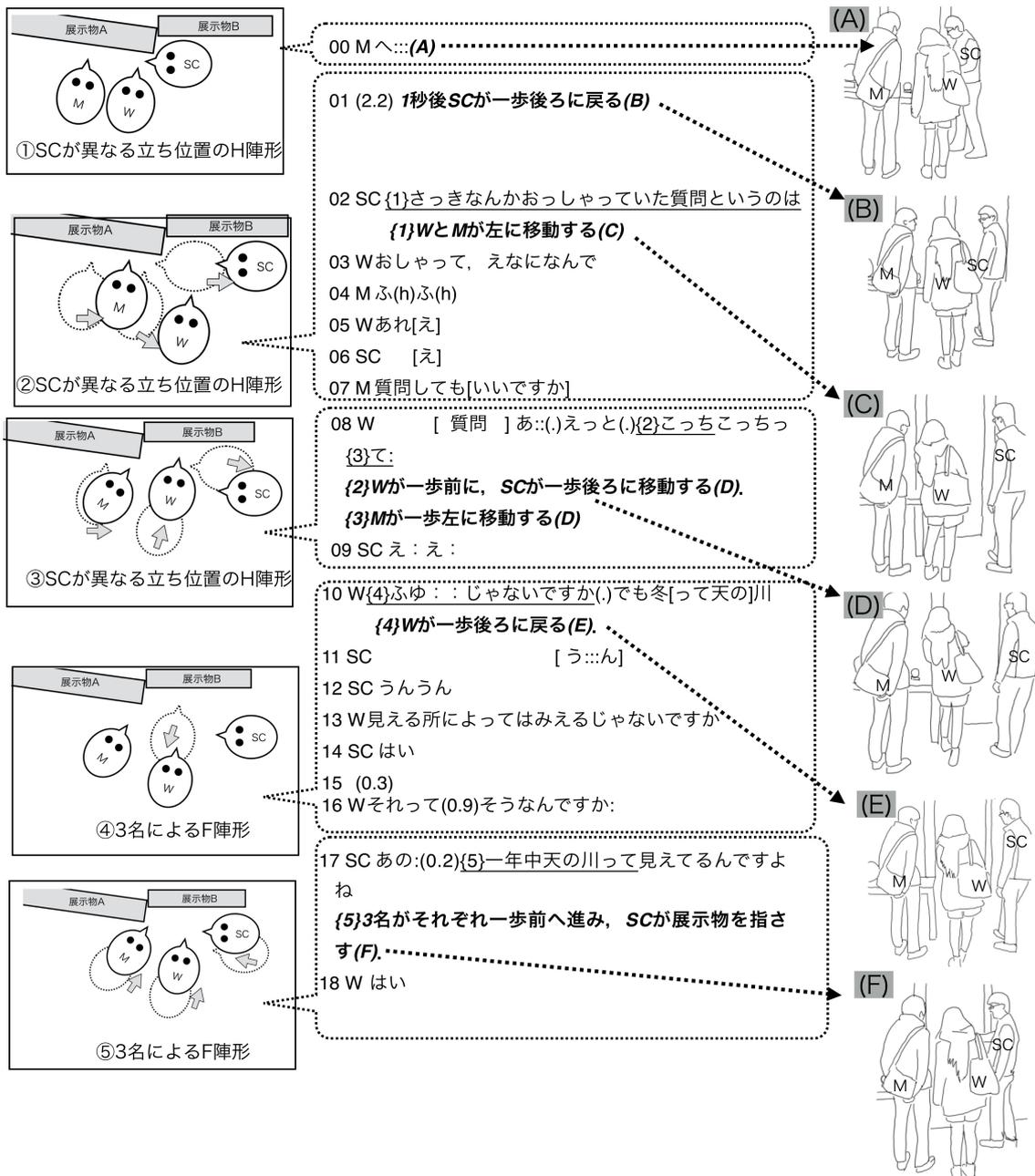


Fig.10 事例 1-2 前半における参加者たちの立ち位置の模式図・トランスクリプト・静止画

4.3.2.1 分析

事例 1-2 も便宜的に 2 つ段階に分けて分析を行っていく。即ち、3 名の参加者の空間陣形が H 陣形から F 陣形へと変化する段階、ならびに F 陣形が維持された状況で SC がジェスチャーを伴いながら解説を開始した 2 つの段階である。

まずは、空間陣形が変化する第 1 段階について見ていく。事例開始に至るまで、SC は展示物 A の太陽系の惑星模型について説明をしていた。この解説の際、2 名の来館者は横並びに立ち、その前に、SC は立つことから、H 陣形が成立していたといえる(Fig.10-A)。先の解説終了後、沈黙(01 行目)が生じた。その間、SC は、一步後ろへと下がり(Fig.10-B)、02 行目で来館者に対して、質問された内容の確認をした。この発話と同時に、来館者 W と M は左に移動した(Fig.10-B)。ここまでの 3 名の移動は、展示物 A の前から展示物 B の前への移動となっており、参加者たちの配列は H 陣形が維持されていた。この陣形を維持した状態で、W は 08 行目から SC に対する質問を開始する。質問の発話に伴って、W は一步前へと進み、展示物 B を指差した(Fig.10-D)。この W の移動にともなって、SC が一步後ろへと下がった。さらに遅れて、さらに M が半歩左に移動した(Fig.10-D)。10 行目の発話で、W が一步後ろに下がり、元の位置に戻った(Fig.10-E)。W の質問は 16 行目で終わり、それに対して、SC が、17 行目から応答する形で解説を開始した。17 行目の解説の開始で、SC は展示物を指差しするために自身の立ち位置から一步前に移動し、それと同時に来館者たちも自身の立ち位置から一步前へと移動した(Fig.11-F)。このため、応答から開始される SC の解説は F 陣形を維持した形で行われていたといえる。

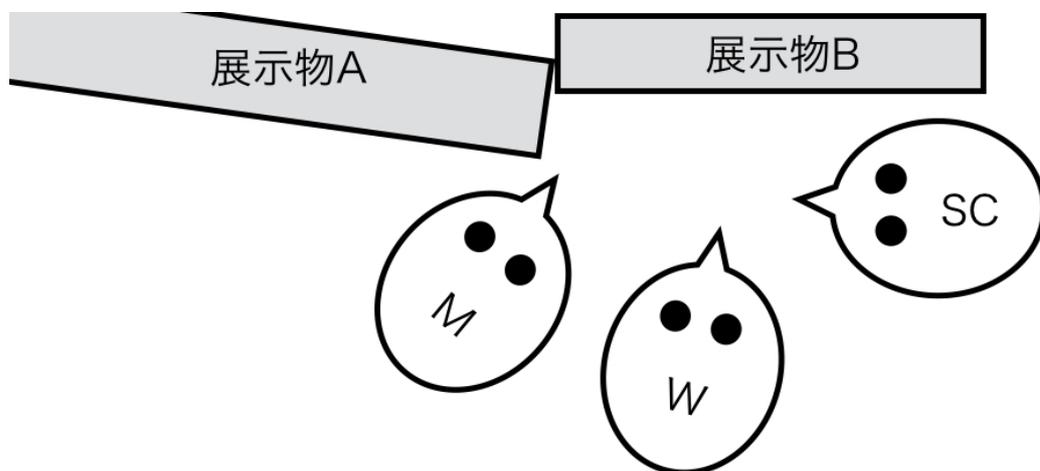


Fig.11 事例 1-2 における後半の参加者たちの立ち位置

ここで、17行目以降のSCの解説と共起したジェスチャーを見ていく。以下、ここで生起したジェスチャーを5つに分けて、記述する^{xii}。

ジェスチャー1(Fig.12): Fig.12-i は Fig.10-F の静止画と同じものであり、SCは展示物の中央を指差している。Fig.12 の下線{1}の発話に共起して、中心から少し手を左側に引き(Fig.12-ii)、下線{2}の発話に共起して、右側に押し出し(Fig.12-iii)、下線{3}の発話に共起しながら、展示物 B の左上から下へと二度移動させた(Fig.12-iv)。

ジェスチャー2(Fig.13): 21 行目の発話で、まず指差していた右手の手型を変更し、左手をその上に添え(Fig.13-i)、Fig.13 の下線{1}の発話と共起させ、右手を展示物 B 中央から右上へと移動させた(Fig.13-ii)。続けて、下線{2}の発話と共起させ、中央においた左手を展示物 B の左下へと移動させた(Fig.13-iii)。そして、下線{3}の発話と共起して、視線を展示物 B から来館者たちへと変更した(Fig.13-iv)。

ジェスチャー3(Fig.14): 25 行目から 29 行目まで、SCは展示物 B の右上を手指し、左手を宙に浮かす状態(Fig.13-iv)を維持し、30 行目、Fig.14 の下線{1}の発話と共起して、右手を展示物中央へ、左手をだらりと下げ(Fig.14-i)、下線{2}の発話と共起して、右手を展示物 B の右上へと上げ、{3}の発話(30 行目)と共起して、来館者へ視線を向けた(Fig.14-ii)。次に 31 行目の下線{4}の発話と共起して、右手を展示物 B 中央へと戻し、指さす手型へと変更し、下線{5}の発話と共起して、展示物 B 中央の下を二度ほど、弧を描くようになぞった(Fig.14-iii)。そして下線{6}の発話とともに、右手をだらりと下にさげ、来館者へと視線を向けた(Fig.14-iv)。

ジェスチャー4(Fig.15): 両手をだらりと下げた状態(Fig.15-iv)から、34 行目の Fig.15 の下線{1}の発話と共起して、SCは両手を体の前で組む形にし (Fig.15-i)、下線{2}と共起して、右手を 2 回、上に向けて上げ(Fig.15-ii)、二度上げたあとに、体の前で両手を重ねた(Fig.15-iii)。続けて、下線{3}の発話と共起して、両手を横に広げ、来館者たちに視線を向けた(Fig.15-iv)、その後 34 行目の発話が終わるまで両手は横に広げたまま維持され、37 行目発話終了と伴って、両手はだらりと下げられた。

ジェスチャー5(Fig.16): だらりと両腕を下げた状態から、40 行目の Fig.16 の

^{xii} ただし、この分け方は Kendon(2004)の提唱するジェスチャー単位に必ずしも則しているわけではなく、説明のための利便性に則して分けたものである

下線{1}と共起して, SC は右手を上げ, 再び展示物 B の中心を手差し(Fig.16-i), そのまま下線{2}の発話と共起して(Fig.16-ii), 右上へと上げていき, 下線{3}で, 来館者のほうへ視線を動かした(Fig.16-iii). また SC は 42 行目の“夏”という発話と 45 行目の“です”の間に, およそ 0.4 秒の間があり, その間に W の 43 行目の発話が産出された.



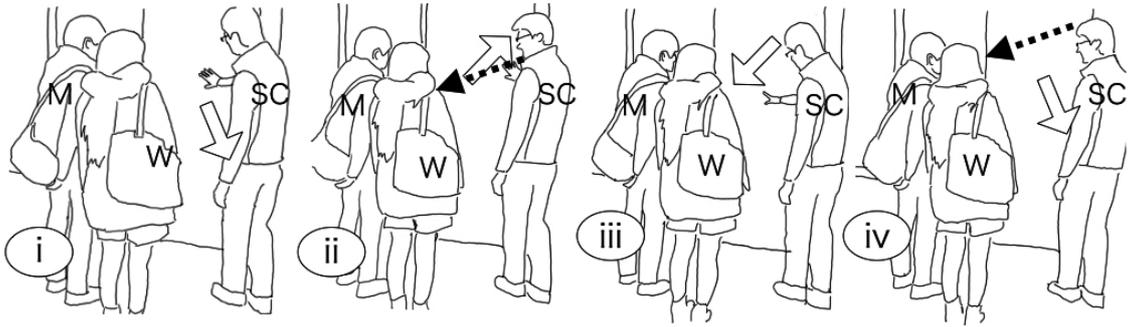
19 SC {1}夏はこっち向き{2}冬はこっち向きで{3}春秋はこっち向き(.)
 で見えてるんですけど：：

Fig.12 事例 1-2 後半におけるジェスチャー1



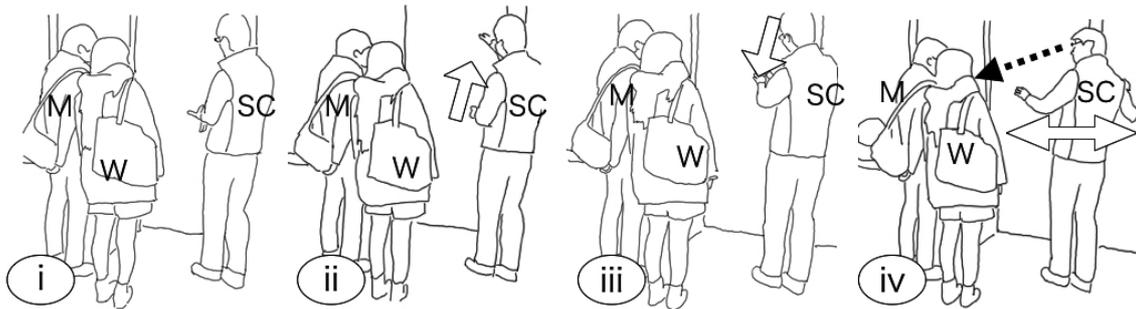
20 (0.7)
 21 SC あの：：星の数がやっぱり(0.6) こっちを{1}見てるとこっ
 ちを{2}見てるのだとだいぶ違いますよね
 22 W はい
 23 (0.2)
 24 SC だから天の川の{3}濃さが違う
 25 W ふ：：ん
 26 M ふう：：ん
 27 W そっかあ
 28 M ふうん
 29 (0.7)

Fig.13 事例 1-2 後半におけるジェスチャー2



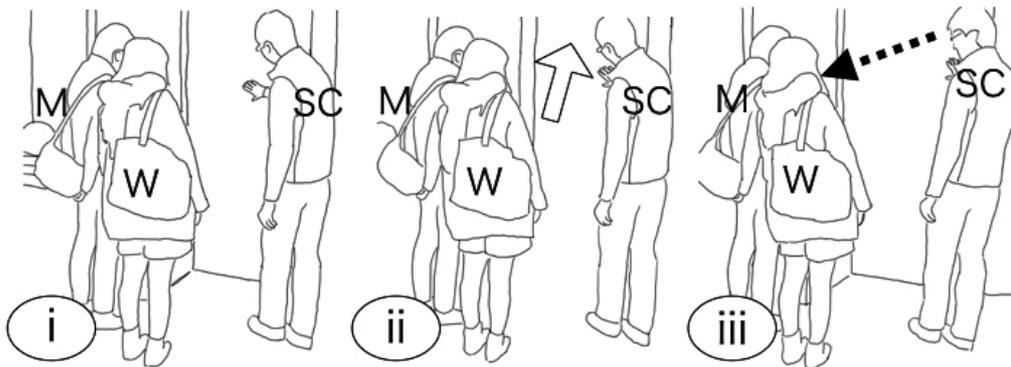
- 30 SC そうすると (0.5) 街明かりがやっぱ邪魔をしてしまうので:
 (0.5) {1}濃い天の{2}川のほうがやっぱり街明かりにも消え{3}に
 くい(0.6)ですよね
 31 SC {4}うす: い天の{5}川はちょっとした(0.2)光{6}できてしま
 います
 32 W ああ: :
 33 (0.5)

Fig.14 事例 1-2 後半におけるジェスチャー3



- 34 SC あと春秋の場合{1}は(0.2){2}こう(0.5)頭上にだあ:と流れてるというよりも{3}地平線
にこう横向きに流れてる(0.6)形に見えるので
 35 M ああ: :
 36 (0.3)
 37 SC どうしてもあの: :見えにくかったり街の灯で消されてしまいます
 38 W はあ:ん
 39 M ふう:ん

Fig.15 事例 1-2 後半におけるジェスチャー4



40 SC だからやっぱり {1} 見応えが {2} あるのは
 41 (0.3)
 42 W な [つ]
 43 SC [な] : {3} つ

Fig.16 事例 1-2 後半におけるジェスチャー5

4.3.2.2 考察

以上の分析の結果，事例 1-2 では H 陣形から F 陣形への移行が見られた。このときの H 陣形は，最初の解説の開始以前に形成されていたものであった。この陣形は参加者たちの移動にもかかわらず維持された。しかし，SC が来館者に対して，質問を促す発話を行い，それに対して来館者 W が質問した後に，陣形が変形した。それに，この陣形の変化は，事例前で行われていた語りが終わり，展示物 A から展示物 B へ移動した後，SC が解説を行う役割を一度放棄したこと，それに対して来館者 W が質問を行うために，発話をする権利を獲得したことが反映されたことによると考えられる。

しかしながら，来館者 W の質問に対して，SC は短い発話によって応答するのではなく，展示物の内容に踏み込んだ解説を行う必要があった。そのため，17 行目より SC は来館者 W の質問に応答する形で解説を開始した。このとき，三者の陣形は F 陣形から H 陣形への移行が見られなかった。このように開始され，F 陣形の中で構築されていく解説はどのような特徴をもっているのか明らかにするために，解説の中で利用されているジェスチャーに着目した。ジェスチャーは前述のとおり，5 つ生起している。これらのジェスチャーでは，W の質問である天の川の見え方が異なる要因についての説明に伴って，生起したものである。そのため，ジェスチャーには，見え方の違いを明らかにする対比構造が包含され，繰り返し提示されていた。まずジェスチャー1では，夏と冬と春秋という季節ごとに天の川が見える向きを，“こっち”という発話にジェスチャーを同期させることで説明していた。このとき，見える向きについて，夏は，展示物の中心から右上を，冬は中心から左下を，春秋は展示物の左上から右下を指でなぞるジェスチャーで示した。続くジェスチャー2では，見える向きによって，見える星の数が変わることを示すものであった。このジェスチャーは右手と左手によって構成されている。まず右手のジェスチャーは展示物の中心（地球の位置）から，右上の向きをなぞり，ジェスチャー1における夏の見え方を示した。続いて，左手のジェスチャーは中心から左下の向きをなぞり，ジェスチャー1における冬の見え方を示した。この両手を使ったジェスチャーにより，見え方によって天の川の濃さが異なることを示した。ジェスチャー3において中心から右上の向きへとなぞるジェスチャーを行いながら，濃い天の川と発話を行い，逆に中心で二度ほど円を描くようなジェスチャーと同期させ，薄い天の川

と発話を行った。ここまでの 3 つのジェスチャーによって、夏は天の川が中心から右上方向に見え、そして、そちらのほうが星の数が多く、天の川が濃くみえることを説明し、対比的に冬は天の川が中心から左下方向に見え、その方向では星の数が少なく、天の川が薄くみえることを示している。このようにジェスチャー1 から 3 の中央から右上／左下へと手を動かすジェスチャーを繰り返すというキャッチメント(古山, 2009)を通して、SC 展示物上に Fig.17 のような対比構造を示したといえる。この対比構造の構築を SC が極めて意図的に行っていることは、夏冬の対比構造から外れた春秋における天の川の見え方を説明するジェスチャー4 においては、唯一展示物から手を離し、宙においてジェスチャーを行っていたことからいえる。

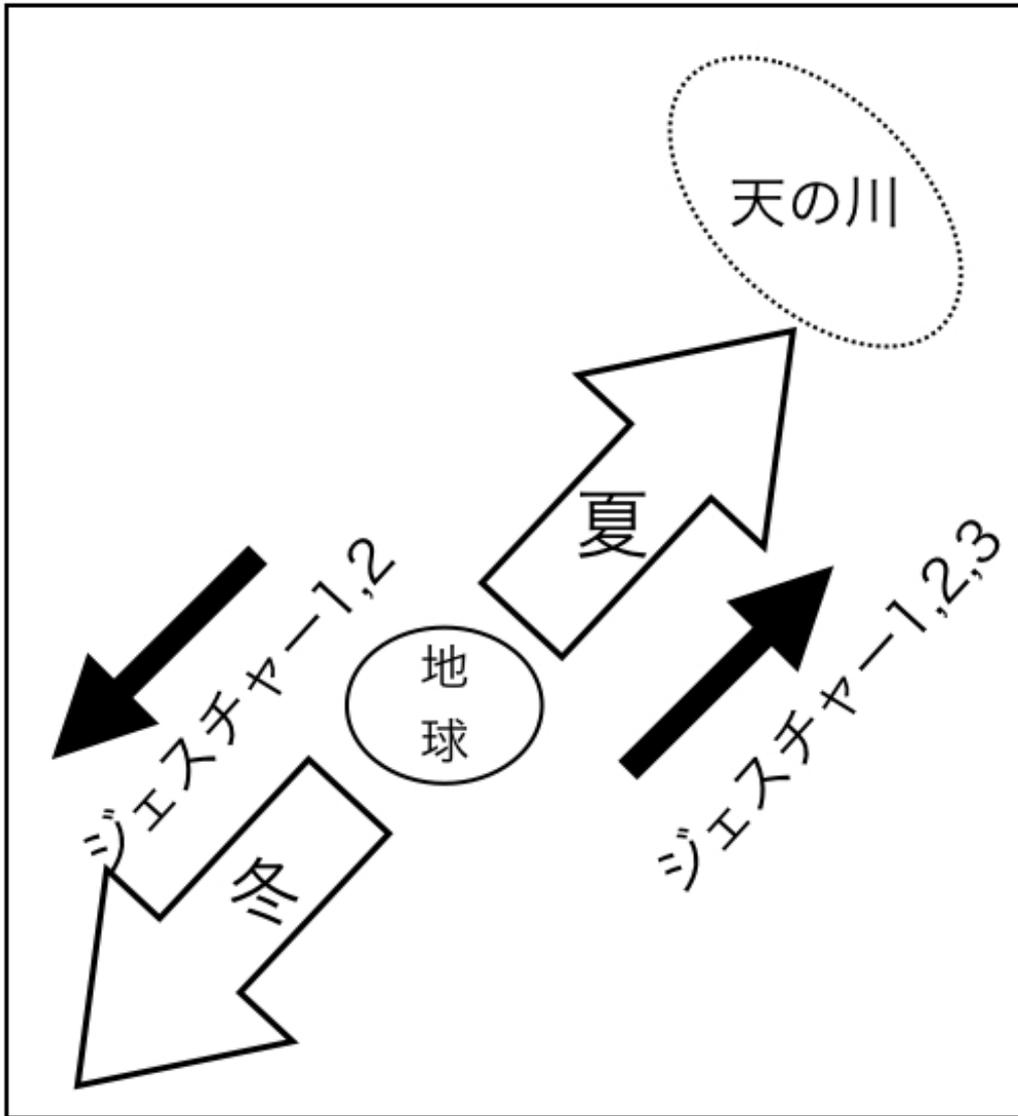


Fig.17 事例 1-2 後半におけるジェスチャーの対比構造

また SC は一連のジェスチャーの中で、動作状態だけではなく、停止状態も使い分けることによって対比構造を明確化していた。まず、ジェスチャー1 と 2 の終了後においても、SC は展示物に触れた手を降ろさなかった。またこの状況はジェスチャーを完全に終えるのではなく、手型や手の位置を維持しているホールド(Kendon, 2004)となっている。ホールドを行うことは、次のジェスチャーが一つ前のジェスチャーから連続したものであることを示しつつ、また自身の発話がまだ終わっていないことを示している(細馬, 2009b)。逆にジェスチャー4 前のジェスチャー3 では展示物に触れていた手を下げ、だらりと腕をさげた状態となり、完全に一つのジェスチャーが終わったことを示すホームポジション (Sacks & Schegloff, 2001)となっていた。ホームポジションへと移行したことは、これまでのジェスチャー1, 2, 3 に対して、これから行われるジェスチャー4 が異なるものであることを示しているといえる。以上のように2つの停止状態を使い分けることで、ジェスチャー1, 2, 3 が連続したことを示す一方で、それぞれのジェスチャーの末尾において、来館者のほうへと視線を向けることは、ジェスチャーが連続性を志向しつつも、それぞれジェスチャー1, 2, 3 といったまとまりをもっていることを示し、対比構造が繰り返していることを来館者に示しているといえる。以上のように SC は来館者に対してジェスチャーの繰り返しであるキャッチメント、ホールドによる連続性の提示とホームポジションによる連続性の中断を提示することによって対比構造を来館者に示したと考えることができる。そのことで、解説の末尾となるジェスチャー5 では、“見応えがあるのは”(40 行目)と発話をしながら、中央から右上へと手をなぞるジェスチャーを再び示し、まだ完結していない発話の間に沈黙を挟むことによって、来館者 W が夏(42 行目)と答えを先取りすることができるようになっている(城・細馬, 2009)。このような、答えが予測可能な解説には、相互行為の中で、どのような意味があるのだろうか。来館者は SC の解説のクライマックスを先取りして答えることができた。そして、それは SC のジェスチャーの対比構造によって可能になったものである。ではなぜ、SC は解説のクライマックスを、来館者が予測可能な形で提示したのだろうか。このことは、SC は事例 1-2 において、自身らが形成している陣形を F 陣形として捉えていることを示すものである。SC の視点で言えば、解説役として、最も重要となるクライマックスの産出を来館者に譲り渡すということは、今行っている活動を「解説」として位置づけていないと考えられる(仮に H 陣形の中での解説であれば、SC がクライマッ

クスを譲渡することは、逸脱行為とみなされる可能性が高い)。また、来館者の視点で言えば、クライマックスを語ることは、決して相手の役割の侵害とはならず、むしろ、当該の場面の共同的な構築に携わっているといえる。このことから、来館者も自身らの陣形が F 陣形であることへの理解を示しているといえる。以上のことから、事例 1-2 のように F 陣形の中で、SC によって内容としては展示物の解説がなされているとき、SC は自身の解説として位置づけられる可能性のある発話のデザインを調整し、来館者と協同的に構築する、答えを見つけ出すということをしている。

さらに、本研究で扱っている SC は、専門家として非専門家である来館者に科学知識を語るという業務を行っている。一方で、科学教育・コミュニケーションの歴史の中で、オープン空間において展示物などを利用した方法は、非専門家を単に知識が欠如したものであり、それを専門家が啓蒙するという欠如モデルの立場ではなく、知識を単に伝えるのではなく、展示物を利用して、科学に対するリテラシーを高めるという文脈モデルの立場に立ったものである。このような観点から考えると、事例 2 は、来館者から発せられた質問に対して、SC が単に知識を一方向的に伝えるのではなく、ジェスチャーによる対比構造を示すことで、科学リテラシーを伝える方法をとっていたと考えられる。以上のように、事例 1-2 では、参加者たちは H 陣形を形成することで、解説を行うわけではなかった。しかし、そのとき空間陣形を利用していないわけではない。むしろ、F 陣形の中で、展示物の内容を解説しなければならないとき、参加者たちは自身の活動が解説という活動に位置づけられないように、様々な資源を利用して調整しているといえる。

4.4 総合考察

本研究では、異なる身体空間陣形で生じた 2 つの解説(事例 1-2 は解説とは、参加者たちに位置づけられないものであった)について分析を行った。2 つの事例は共に、SC と 2 名の来館者の会話事例であった。また事例内で、ある陣形が形成されている状態から開始されたものである。そして、その陣形は、事例内で、異なる形状の陣形へと変化したものであった。事例 1-1 において、その陣形の変化は、単に陣形内の配列の変更ではなく、F 陣形から H 陣形へと、新たな陣形を形成したものであった。さらに、SC はこの陣形の形成されるのを待つ

形で、解説の開始を遅延させていた。そして、解説が継続される中、参加者たちは自身と他者の立ち位置の関係、周囲の環境との関係を調整しながら、H 陣形を維持していた。続く、事例 1-2 でも同様に、陣形の形状の変化が観察された。しかし、このときの陣形の変化は H 陣形から F 陣形への変更と考えられるものであった。F 陣形であることに影響を受け、参加者たちは自身の活動を解説とは位置づけなかった。

4.4.1 フィールドにおける役割

以上より、分析対象とした会話データでは、人々が解説という活動を位置づけるために、立ち位置による陣形を利用していることが示された。本研究のデータの参加者は SC と来館者という役割に分けられるものであり、この役割において SC は展示物の解説という語りを行う専門家としての義務をもつ。しかし、そもそも Goffman(1961)が指摘したように、会話における人々の役割とは、事前にすべてがトップダウンに決められているのではなく、状況内の活動システム(Situated activity system)の中で、参加者が自身の振る舞いや役割を調整することで決まってくる部分もある。この考えを踏まえると、一見事前に決められた役割によって、解説を行う権利を所持しているように見えるときでさえ、H 陣形のように、他者とは異なる振る舞いをする（と同時に、させてもらうこと）によって、自身の役割を示し、そのことによって役割を達成しているのである。したがって、本研究の示す知見は、事前に役割が決まっていなくても、いわゆる自由な会話だけではなく、事前に役割が決まった会話にも適用の可能性があると考えることができる。

5. 研究 2 手の位置の組み合わせによる活動を位置づける方法の分析

Kendon(1990)は F 陣形の研究を通して、会話という 2 人以上の人々が協同して行う相互行為が活動に位置づけられることを示した。同時に、活動を空間に位置づけられる立ち位置の陣形は相互行為を展開するための基盤となることを示した。そして前章の研究 1 では、会話内に含まれる活動変化に合わせ、陣形が異なることを示した。以上のことから、雑談のように参与者間の権利が平等な会話では、参与者が互いに位置が同じようになる陣形（所謂 F 陣形）が形成されるといえる。対して、参与者間の役割が異なるとき、異なる役割をもった参与者は、他の参与者とは異なる位置に立つ陣形(H 陣形)が形成されることが示された。一方で、これまでの検討は、すべて参与者たちが自由に歩くことができる会話場面のみを検討してきた。研究 2 では、参与者たちが歩き回ることのない実験室における座位会話を対象とする。そして、座位会話場面で、会話という活動はどのような形で空間に位置づけられるのか、を検討する。座位会話において立ち位置の代替として手の位置が利用されうるのかを検討していく。

5.1 目的・仮説

前章及び先行研究は、会話という活動は、個々人の立ち位置の組み合わせによって形成される陣形という形で空間に位置づけられていることを示した。そして会話活動の変化に応じて、その陣形は変化するものであった。

これらの結果は、会話参与者が自身の立ち位置を通して、現在の活動をどのようなものとして位置づけるか／理解しているかを他者に示し、それを受けて他者が自身の立ち位置を調整することを通して、陣形が形成、または活動に応じた変化が達成されていることを示唆している。そして、会話を行うとき、人々は自身の立ち位置を通して、現在行っている会話活動／これから行う会話活動をどのようなものかとして自身は捉えているかを示すことができ、個々の参与者の捉え方を相互に承認しあうことによって、活動を開始／展開することが可能になっているともいえる。このことから、身体位置を組み合わせ、陣形を形成することは、相互行為の基盤を構築することの一助となっていることを示唆しているともいえる。

ここまでの議論は、常に参加者が立った状態の会話を対象としてきた。立った状態であるからこそ、参加者たちは立ち位置を互いに調整することが可能であり、その調整によって互いの活動への理解を示し、承認し、陣形を形成し、会話の基盤を構築していたといえる。しかし、我々は自由に歩き回ることができ立った状態のみで会話を行っているわけではない。一定の位置から動かず、座った状態で会話を行うことも往々にある。では、このような状態では、活動の開始や変化に応じて、陣形を形成し変化するに類似したことは怒っていないのだろうか。同時に、座った状態では、立ち位置によって活動の捉え方を示すこと、他者の示しを受けて自身の位置を調整することができないのであるならば、人々は、それを行っていないのか、それとも代替の手段を利用しているのだろうか。本章の研究では、この問いについて探索していく。

まず、立位会話における立ち位置（及びその組み合わせの陣形）のもつ働きが、座位会話で必要なのか、必要とするならば代替として何が使われているかについて議論をすすめるため、陣形のもつ働きを、会話（相互行為）を行うために基盤を構築する働きと、会話の活動をどのように位置づけるかを示すための働きの2つに分けて考えていく。前者の可能性については、人々が座った位置がF陣形（もしくは近似の状態）を形成している可能性があるだろう。F陣形とは、相手の姿が見え、そして声が聞こえる位置かつ、自身の姿を相手が見ることができ、声が聞こえていると推測できる位置に参加者たちが互いに立っている状態である。よって、座位会話も、会話開始前に座る位置をF陣形のようにすることができるはずである。例えば、喫茶店で喋る人たちは、対面や横並びに座る。これはF陣形の対面配列や隣接配列に近いものといえるだろうし、会議を行うときに参加者たちは円形に近い形状に座ることのは円形配列に近いと考えられる。よって、座位会話においても、会話の基盤を構築するための位置調整は、会話が開始される以前の座る位置の調整によってなされていると考えることもできるだろう。

一方で、後者については、単に立ち位置を座った位置に置き換えるだけでは不十分であると考えられる。なぜならば座ったままでの会話を行うとき、開始前はさておき、会話が展開する中で、座った位置を大きく調整することは、あまり日常的に観察されない。一方で、座位会話の場合でも、会話内の活動の変化や参加者間役割の変化は起こりうるものである。Kendon(1990)が指摘したような雑談を通じて、本題に入るような会話は座位であっても日常的に経験される。

また、会話分析などで分析対象となる “語り(story telling)” という現象は会話の中でしばしば生起する(Sacks, 1974; Jefferson, 1978; 西阪, 2008a). 語りの中では、特定の参加者は語り手(teller)という役割を担い、そうではない参加者たちは聴き手(listener)という役割を担う(Goodwin, 1984). 会話の中で語り手となるろうとする話者は、前置き(Preface)や質問(Pre-telling)を利用することにより、他の参加者に自身が語りを開始することへ承認を求め、承認されることで、語りを開始される(Schegloff, 2007; Mandelbaum, 2013). 以上のように、参加者が異なる役割を担い、参加者が互いにそれを承認することによって達成される語りは、参加者同士が平等な状態に比べて、一つ以上の順番からなる長いストーリー（例えば自身の経験や他者からの伝聞によるものなど）を語り手が聴き手に伝えることができる活動であり、座位会話においても平等な状態から語り手と聴き手に分かれるという形で、参加者間の役割が変化するといえるだろう. 前章で見てきた展示物解説という活動も、解説役と聴き手に参加者が分かれ、解説という長い語りが生成されるものと考えることができ、語りの一種として考えることができる. つまり研究 1 とは雑談から語りへと遷移時に、人々が陣形を変化させていることを示したものと言い換えることができる.

では、座位会話では、このような活動の変化、役割の変化が生じたとき、座位会話において参加者たちは立ち位置の陣形以外の何かを変化させているだろうか. 本研究における目的・仮説を明確にするために、以下、一つの事例を見ていく.

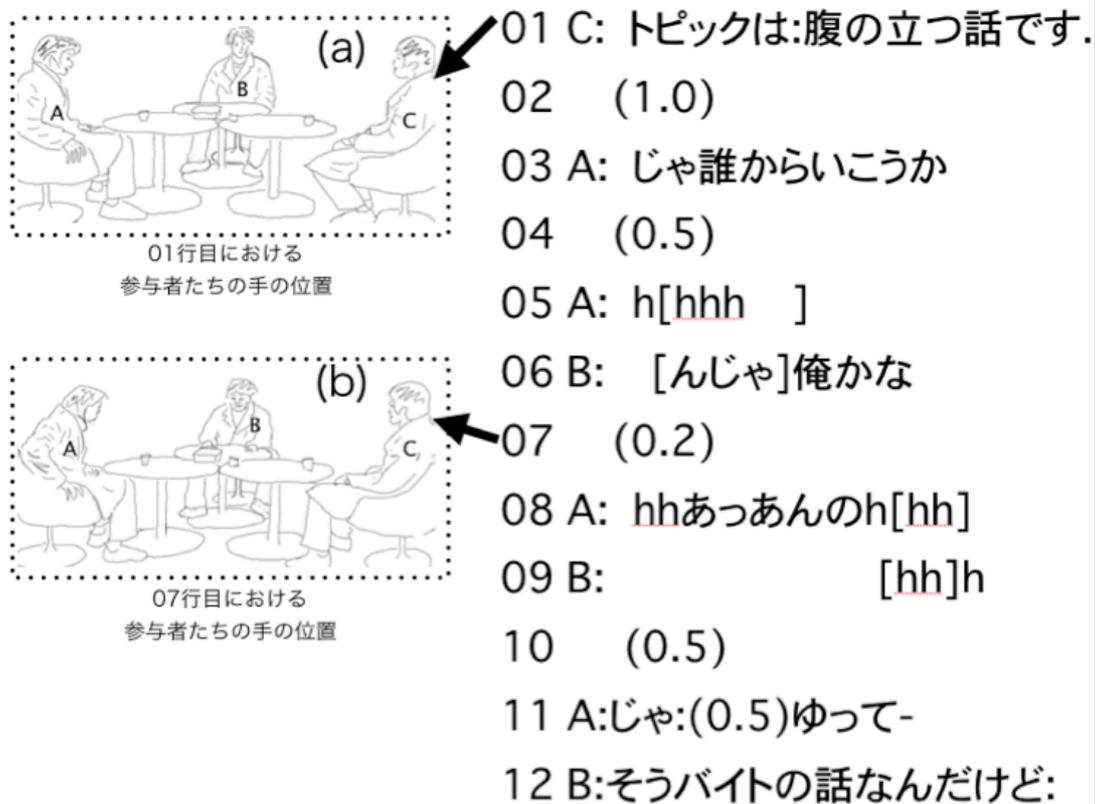


Fig. 18 事例 2-1 における発話と参加者たちの手の位置

事例 2-1(Fig.18)は、本研究の分析で利用する千葉大学 3 人会話コーパス(Den & Enomono, 2007)という会話コーパスの断片である。会話データについては第 3 章に詳述しているが、以下分析に関わる点について略記する。この会話は実験室に集められた 3 名の同性友人間のものであり、事前に研究者によってトピック(e.g. 恋の話, 臭い話など)が与えられていたが、同時に脱線も許されることが教示されていた。そのため、収録の冒頭部分で、会話参加者たちはトピックについて誰が話すか、もしくは脱線するかを交渉し、最終的に参加者のうち 1 人の語りを開始されることが多く観察される(この点について第 5 章の研究 3 で後に詳細に分析を行う)。事例 2-1 では、01 行目で C によってトピックが提示され、03 行目以降で誰がトピックについて話すかが交渉され、最終的に 12 行目より B がバイトの話について語り始めている。つまり、断片内で交渉から、語りへと活動の変化が生じており、なおかつ B が語り手となる役割の変化も生じ

たものといえる。一つの可能性として、この変化が発話を通してなされていたとも考えることができる。すなわち、発話による B の立候補(06 行目)、その A による承認(08,11 行目)によると考えることも可能である。一方で、立位会話で、活動の変化／役割の変化が立ち位置の調整によっても示されていたことから、座位会話においても身体を用いて、この変化を示し合っている可能性について、以下検討していきたい。

まず、参与者たちの視線について記述しておく。01 行目でトピックを提示した C は、発話前は目の前の机に視線を向けていたが、発話開始と伴って冒頭では A に視線を向け、そのまま 01 行目の発話を産出した。このとき、A は視線を下に向けており、B は発話開始時には C に向けていたが、C の視線移動の後に自身も一瞬 A に視線を向け、その後視線を下に向けた。1.0 秒の沈黙内で、B は顔をあげ、再び A に視線を向けた。そして A は顔を下に向けたまま発話(03 行目)を開始したが、末尾の「か」において顔をあげ B に視線を向けた。これに対して B は視線を下に向けながら、発話(06 行目)を産出した。なお C は、A が B に視線を向けるまで、A に視線を向け、その後 A に追従するように B に視線を向けた。その後 A は 08 行目まで視線を B に向けていたが、その後視線を外し、下に向けた。08 行目の発話直前 B は二度ほど一瞬 A に視線、すぐに下に視線を下ろし、そして発話末尾で再び一瞬 A に視線を向けていた。そして、A は 11 行目の発話においても末尾で一瞬 B に視線を向けたが、それ以外は下に視線を向けていた。発話末尾で A に視線を一瞬返す以外は、正面に視線を向けていた。そして、12 行目発話開始後、B は A に視線を向けながら語りはじめた。なお、C は常に B に視線を向けていた。

以上の視線の観察は、視線を向けられたものが視線を返すこと (Goodwin, 1981) や、次の話者となるものに視線を集めること (Sacks et.al, 1974) などの分析に寄り添うものである。特に、04 行目までの C の視線遷移は、話者でも聞き手でもない第三の参与者が、次の話者に視線を向けることが観察可能となっている (榎本・伝, 2011)。以上のことから、先行研究と同様に、視線は、次話者決定のための資源となっているとはいえる。一方で B が語り手となることを示すため資源とは考えにくい。なぜならば、B の視線は、次の話者となる A に視線を向ける、もしくは向けられた A によって向けられた視線に向け返すという形で変化したのみであり、これは上記の分析の結果に寄り添うが、特に語り手となることを示そうとしたものとはいえない。一方で 04 行目以降の C の視線が変

化しないことは、C は次の話者に対して視線を向けることをやめ、B が語り手となる可能性を承認していると理解できる。では、B が語り手となる可能性と、そしてそのことを A が承認することは、どのようにして示されているのだろうか。

この断片の中で視線以外に大きな変化が観察されたのは、参与者たちの手の位置である。断片冒頭において、Fig.18-(a)のように、A,B,C において三者は机の下に手を置いていた。03 行目において、A は自身の髪を触る自己接触動作を伴いながら、発話を産出した。B が 06 行目の発話とともに、机の上に手を置いた。同時に、A は自身の髪に触れるのを止め、08 行目の途中までで、両手を机の下に戻した。そして C は、常に机の下に手を置いていた。以上の手の動きに関する観察は、B は自身が語り手となることを、手の位置という資源を利用して示す可能性を示唆している。このことは、先行研究において、語り手となる参与者が語る前に、これまでの動作を中断することや、手を机の上に置くという観察に寄り添うものである。(Goodwin, 1984; Streeck & Heritage, 1992)。しかし、事例 2-1 において、単に語り手となろうとする参与者が単独で手の位置を変更しているだけではなく、聴き手となる A もまた、自身の動作を中断し、手の位置を机の下に変更していることに注目したい。A が机の下に手を置くことによって、C は手の位置を変更しなかったため、B だけが机の上に手を置いた状態となっていた(Fig.18-(b))。このことは、前述の立ち位置による陣形の中で、役割が異なる参与者が違う位置に立つことと似た現象と考えることができる。さらに、Kendon(1990)は、会話の基盤構築において立ち位置という資源が利用されるのは、顔や視線のように短期的に変更されやすくはないが、一方で変更可能であるという特徴をもっているためと主張している。座位会話における手の位置も、同様に頻繁には変更されないが、変更可能な特徴をもっていると考えられる。

以上の観察、及び考察から、本章では、座位会話では、立位会話における立ち位置の代替として手の位置という資源が利用されていること、そして座位会話において会話内の活動の変化／参与者の役割の変化を互いに示し合うために、参与者たちの手の位置の組み合わせのパターンが変化している、という仮説について検討していく。

5.2 分析概要

本研究では、手の位置の組み合わせパターンの変化と、会話内の活動の変化／役割の変化の関係性について検討していく。本章では、分析 1 として量的検討を行い手の位置の組み合わせパターンと会話内の変化の関係性についての傾向を示す。さらに、分析 2 では、量的検討で示された傾向が参与者にとって利用されているかについて、質的検討を行う。以下、分析で利用するデータ概要、量的分析で用いるデータ内の会話、身体についての符号化について記す。

5.2.1 データと符号化

本章で利用する会話データは第 3 章で詳述したように、千葉大学 3 人会話コーパス(Den & Enomoto, 2007)を用いる。発話に関しては先行研究によって発話単位タグ(榎本・伝, 2011)が付与された。このタグによって、資料内の会話は順番交替システム (Sacks et.al, 1974) に基づき、参与者たちが会話を展開している状態と、一人の参与者が語り手となり、ストーリーを展開する状態に分けられている。本研究では、このタグを利用し、後者の状態を語りが展開されている場所として、分析に利用した。

次に手の位置の情報を得るためには以下の符号化を実施した。まず、会話中の参与者の身体状態はジェスチャー、非ジェスチャー、休止状態の 3 種を用いて分類した。ジェスチャーは「誰かに何かを伝えるための身体動作」であり、既存のジェスチャー単位(Kendon, 2004; 細馬, 2009a)に従い準備(preparation)から復帰(retraction)までの一連の動作をジェスチャー状態とした。非ジェスチャーとは、ジェスチャー以外の動作（水を飲むための実用的動作、髪を触るといった自己接触動作）であり、こちらもジェスチャーと同様、準備から復帰までの一連の動作を非ジェスチャー状態とした。ただし、またジェスチャー状態、非ジェスチャー状態は単に手が動いている状態だけではなく、一連の動作が復帰によって終了するまでの間の停止状態もホールド(McNeill, 1992)として含めた。以上のジェスチャー／非ジェスチャー状態以外の手が停止した状態を休止状態とした。このアノテーションは 12 組のデータ中の 2 組のデータに関して筆者を含む 3 名によるアノテーションを行った。一致率の検定を行ったところ、 $\kappa=0.78$ となり、信頼に足るアノテーションと判断した。

次に休止状態の参与者たちの手の位置について以下のように分類を行った。立ち位置の代替として手の位置を考えたとき、当然ジェスチャーやそれ以外の

身体動作を行っている時にも、手の位置は参与者にとって利用可能な資源であるべきである。しかしながら、動作状態において、手の位置がどこに置かれているのかを典型的に分類することは困難であった。そこで、量的分析では、すべての参与者が休止状態になったときのみに着目した。そして、手の位置の分類は、様々なやり方が考えられるが、前述の事例 1 及び先行研究の示唆より、手の位置が机の上に置かれているか否かで分類を行った。即ち、参与者の片手ごとに、机の下に手が置かれている／机の上に手が置かれている／机よりの位置に手が置かれている(机より上の上肢に触れている状態など)、の 3 種に分類した。さらに、休止状態は、左右の手が同時に休止しているので、左右の手の違いを排除し、片手の 3 分類の組み合わせで、合計 6 種類に分類した。即ち、両手が机の上／机の下／机より上に置かれた状態の 3 種類、すなわち片手がそれぞれ机の上と机の下／机の上と机より上／机の下と机より上の 3 種類に分類を行った。以上の会話データに対する会話及び身体の符号化データを利用し、以下の分析を行っていく。

5.3. 分析 1 手の位置の組み合わせパターンの違いと「語り」開始の量的傾向の検討

座位会話において手の位置の組み合わせパターンが、会話内における活動／役割の変化を示す資源として利用されているかについて、以下量的に検討する。分析 1 での会話内における活動／役割の変化としては、先行研究によって付与された、会話内の「語り」状態の開始を利用する。前述のように、語りとは、会話内での活動の変化であり、同時に参与者たちの役割の変化も起こっている状態である。手の位置の組み合わせによって示される活動／役割の変化は、他の現象にも起こっている可能性が十二分にあり、また語りの開始が他の資源(例えば、前置きなどの発話や、視線、姿勢の変化)によって構築されている可能性もある。本研究は、それらの可能性を否定するわけではないが、探索的研究として手の位置の組み合わせが語りを開始するための資源として利用されている傾向を量的に以下検討していく。以下、手の位置組み合わせパターンの分類方法について、その後量的分析の方針について述べ、続けて分析結果を記していく。

5.3.1 手の位置の配置の分類

手の位置の組み合わせが相互行為の基盤を構築しているかを検討するために、3名の参加者が同時に休止状態であったときを分析対象とした。先ほどの手の位置の分類に基づき、手の位置の組み合わせは3パターンに分けられる。(i) All same パターン (以下、AS パターンとする)は3名の参加者の手の位置が同じ種類であったパターンである。(ii) One different パターン(以下、OD パターン)は参加者のうち2名が同種の手の位置で休止し、1名が異なる手の位置で休止していたパターンである。(iii) All different パターン(以下、AD パターンと記述)は3名の参加者がそれぞれ異なる手の位置で休止していたパターンとした (Fig.19)。

分析1に入る前に、先に会話資料内の語り状態と、全参加者が休止状態であった状態が会話資料の中で生じた回数について記しておく。談話資料内で、語りは233事例生起していた。さらに、そのうち17事例については、語りが始まる前に、すべての参加者が休止状態となることがなかったため、分析の対象外とした。全参加者が休止状態となった後に開始された語りは、216事例であった。その中で、ある語りの開始時点より前に、全ての参加者が休止状態となった時点までの間に、他の語りの開始がなされていない事例、つまり、全参加者が休止状態となった後に、再び全参加者が休止状態とならず、開始された語りは88事例であった。また手の位置の組み合わせに関しては、談話資料内で、308事例が確認され、ADパターンは14事例、ODパターンは103事例、ASパターンは189事例が確認された。

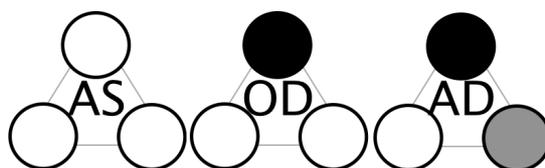


Fig.19 手の位置の組み合わせパターン

5.3.2 分析手法

休止状態の手の位置の組み合わせによって、語りのための環境が構築されているかを検討するために、全参加者が休止状態となった後に開始された88事例

の語りを分析の対象とした。分析手法として、まず語り開始前の休止の参加者たちの手の位置がどのパターンで組み合わさっていたかを分析した。その際、OD パターンに関しては、他の参加者とは異なる手の位置であった参加者が語り手となる可能性を検討するため、以下の 2 条件に分類した。(a)異なる手の位置であった参加者が語り手となった場合 (Fig.19 において黒丸の参加者が語り手となった場合) を **matching** 条件(以下, m 条件)とし, (b)それ以外の参加者が語り手となった場合を **not-matching** 条件(以下, n 条件)とした。さらに, 対象となった 88 事例の語りの開始時間に関して, 語り開始前に全参加者が休止状態となった時点との差分について分析を行った。

5.3.3 結果

語り開始される直前で, 全ての参加者が休止状態となったときの, 手の位置の組み合わせのパターンはそれぞれ, AD パターンが 5 事例, OD パターンが 38 事例, AS パターンが 45 事例であった。手の位置の組み合わせ全体の生起数に対して, 語り前で生起した各々のパターンの割合に対して χ 二乗検定を行った結果, 有意傾向が確認された($\chi=5.43, P<0.07$)。さらに OD パターンの中で, m 条件は 21 事例, n 条件は 17 事例であった。参加者が休止状態となった時点から, 語り開始時点までの時間差の平均はそれぞれ AD パターンが 23.28 秒, OD パターンが 13.55 秒, AS パターンが 14.75 秒となり, OD パターン内の m 条件は 9.25 秒, n 条件は 18.87 秒であった。Fig.20 は OD パターンの m 条件と n 条件の語り開始されるまでの時間差の分布をカーネル密度推定した結果を示した。また m 条件のバンド幅は 4.76, n 条件のバンド幅は 9.43 であった。

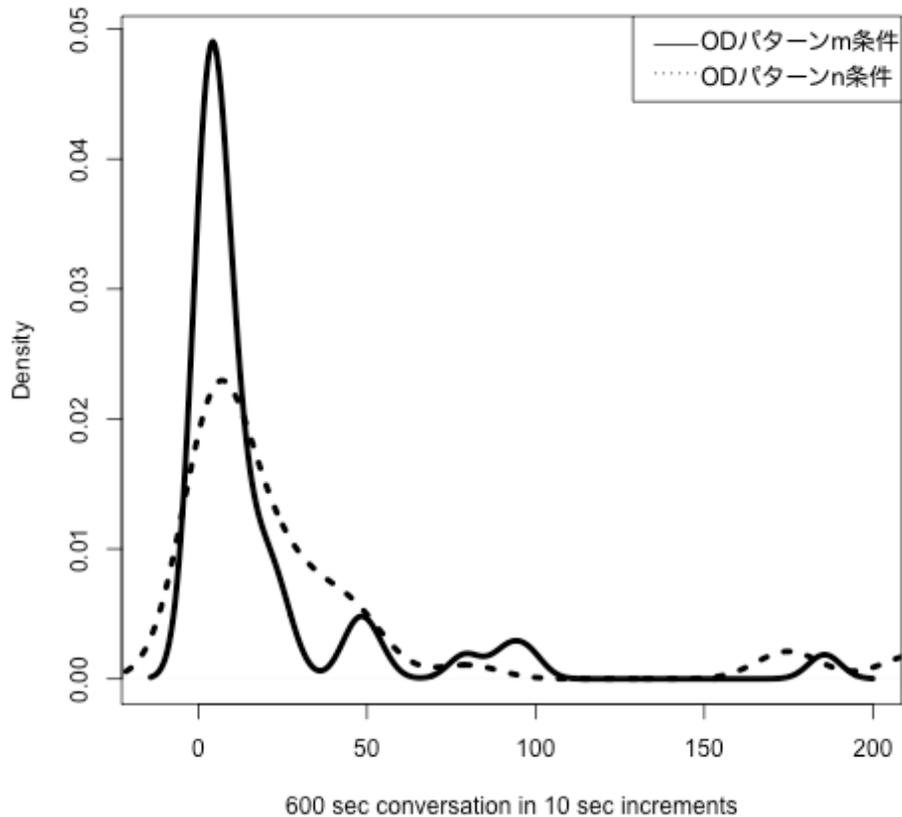


Fig.20 OD パターン形成後の語り開始までの時間頻度

5.3.4 考察

第3章の研究1によって、立位会話時、ある参加者が他の参加者と異なる立ち位置となることで、語り手となることが示されていた。本分析の結果は、手の位置の組み合わせのパターンにおいて、一人だけ異なる手の位置の参加者がいる OD パターンは、語り前での生起頻度が多く、また OD パターン形成から語り開始されるまで時間差が短いことを示していた。このことは、OD パターンになることは、異なる手の位置の参加者が語り手に、それ以外の参加者は聴き手に別れるということが、手の位置によって互いに承認され、それにより、OD パターン形成後に語り開始されたことを示唆している。さらに、OD パターンの中で、異なる手の位置であった参加者が語り手となる m 条件では、OD パターン形成後にすぐに語り開始されることが多く、一方で n 条件では、語り必ずしも OD パターン形成直後になされているわけではないことが示された。この結果は、OD パターンにおける異なるホームポジションであった参加者

が語り手を担うことを参与者間で承認し合い、つまり手の位置の構造によって、語りのための環境が構築されていたため、語りがスムーズに開始されたことを示唆している。また、逆に異なる手の位置の参与者がいるにも関わらず、他の参与者が語り手となり、語りを開始するためには、他の利用可能な資源によって、語りの環境を構築しなければならないため、語りの開始の遅延が生じたと考えられる。以上の量的分析の結果は、休止状態の手の位置が3名の参与者の中で、一人だけ異なるとき、その参与者は語り手となる可能性が高いことを示すものである。ただし、注意しなければならないのは、量的分析の結果は、必ず異なる手の位置の参与者が語り手となることを示したものではないことである。

5.4 分析 2 異なる手の位置を利用した語りの開始場面の質的検討

量的検討の結果は、休止状態の手の位置の組み合わせの中で、一人だけ手の位置が違う配置が形成された後に語りが開始される傾向があり、同時に手の位置が違う参与者が語り手となるとき、スムーズに語りの開始がなされているということを示していた。量的分析の結果から、手の位置の組み合わせを利用して、人々は語りのための環境を構築している傾向が示された。一方で語りの環境を構築し、語り手／聴き手という役割に別れ、それを互いに承認するための利用可能な資源としては、先行研究が示してきた前置きや事前質問といった発話による資源が利用されうる。このような資源が利用されたときに、必ずしも手の位置のような他の資源が利用されていない可能性がある。そのため、分析結果が示すように、すべての語りの前で、OD パターンが形成されていないと考えられる。また逆に OD パターンが形成されていたとしても、語りが開始されなかったことがあることを量的結果は示してもいる。このことは、OD パターンのような手の位置の違いが、語りを開始するための環境として利用されていない可能性も示唆するものである。そのため、量的分析の結果だけでは、語りが開始される前に偶然 OD パターンのような休止状態の手の位置の組み合わせが生起してただけであり、参与者たちが実際に手の位置を利用可能な資源としていたのかについては、明らかになっていない。そこで OD パターンが形成された事例について質的検討を行うことで、参与者たちが手の位置の組み合わせを利用した上で、語り手／聴き手に別れ、互いに承認し、語りの環境を構築し、

語りを開始していることを明らかにする。以下、2つの事例の分析を分析2とする。事例2-1と事例2-2の発話の書き起こしのルールについては第3章に詳述したとおりである。また、参与者たちの身体状態について記すときの補助として、それぞれ図の横に、参与者たちの状態を線画化したものを付記してある。

5.4.1 事例1

まずはODパターンの中で、休止状態で異なる手の位置であった参与者が語り手となり、語り開始された事例として、本章の冒頭で示した事例2-1を再度検討していく。Fig.18-(a)のように、A,B,Cにおいて三者は机の下に手を置く、ASパターンを形成していた。03行目においてAが与えられたトピックについて、誰から話すかとBとCに問いかける。このときAは自身の髪を触る自己接触動作を伴いながら、発話を産出した。その後、Bが06行目の発話とともに、机の上に手を置き、AがBの机の上に手を置く動作と同時に非ジェスチャー動作を止め、09行目の途中までで、両手を机の下に戻した。結果、08行目途中において、Fig.18-(b)のようにBのみが両手の上に机を起き、AとCが机の下に手を置き、ODパターンが形成された。そして、12行目において、Bが語りを開始した。この事例において、ODパターンが形成された後、すぐに異なる手の位置であった参与者Bが語り手となり、語りが開始された。ODパターンとなる前に、Bは手の位置を変更し、その動作は自身の語りの開始の承認を求める発話(06行目)と同期していた。このことから、Bは自身の手の位置を変更することが、語り手になろうとすることを他の参与者にディスプレイし、このディスプレイが他者に了解可能なものと考えていたといえる。さらに、AがBの手の位置を変更すると同時に、自身の行っていた動作を終え、Cと同じ机の下に手を置くという手の位置へと復帰させながら、Bが語り手になろうとすることを承認する発話(09行目)をしていることは、AはBが異なる手の位置となるODパターンを形成するように自身の手の位置を調整しており、Bが語り手となる語り開始されることを承認することを示したといえる。以上のことから、この事例は、参与者たちはODパターンとなるように互いに調整しながら、語りへの移行を行っていたことを示すものであったといえる。

5.4.2 事例2

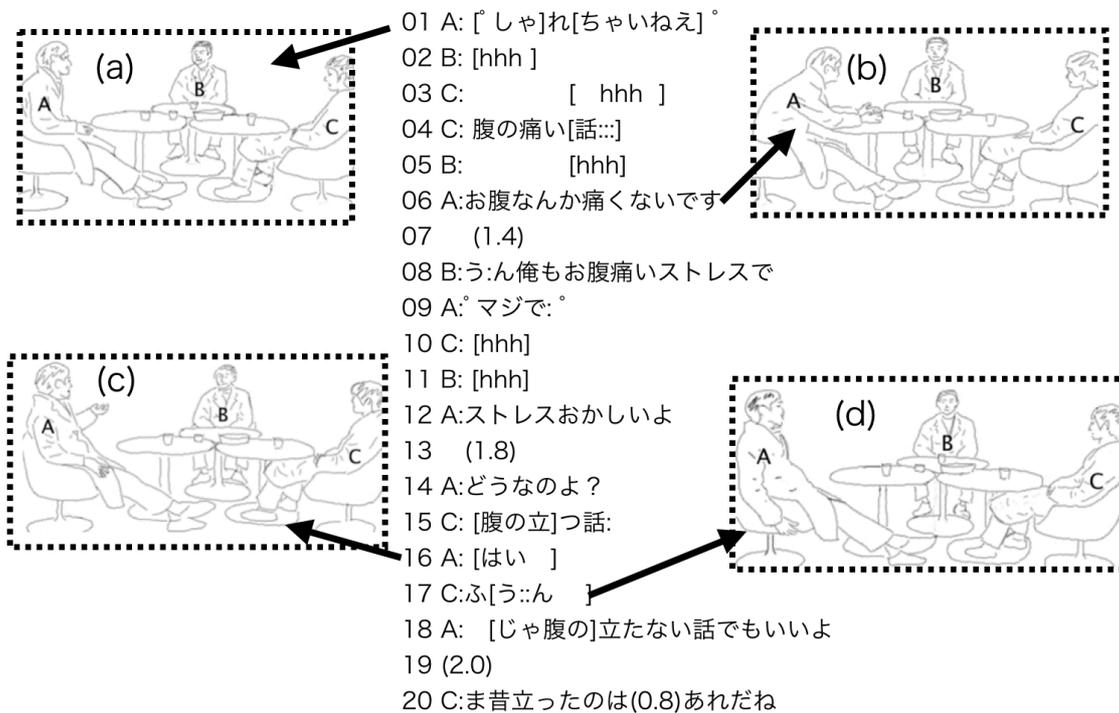


Fig.21 事例 2-2 における発話，手の位置の変遷

次に先の事例とは，逆に OD パターンが形成されたにも関わらず，語りが開始されなかった事例を見ていく。

事例 2-2(Fig.21)に含まれた会話は“腹がたったこと”がトピックであり，01 行目で A は，直前の自身の発話が冗談のつもりではなかったことについて，右手を机下に，左手を椅子の後ろに回した状態で述べた(Fig.21-(a))。その後 C が「腹の痛い話:::」と発話(04 行目)をし，A はそれを否定するかのよう「お腹なんか痛くないです」(06 行目)と述べた。このやりとりの間に，A が上半身全体を前方に倒して両手を机に乗せたことで(Fig.21-(b))，参与者たちの手の位置の組み合わせは OD パターンとなった。この状態は 12 行目まで継続された。その後，A は椅子の背にもたれながら B に顔を向け，「はい」と言いながら手のひらを上に向けた左手を B に差し出した(Fig.21-(c))。そして B に差し出した左手を机下に戻し，A の手の位置は両手を机の下に置くものとなった(Fig.21-(d))。これにより参与者たちの手の位置の組み合わせ AS パターンとなり，その後 C が語り手となる語りが開始された(20 行目)。この事例において，OD パターンの中で異なった位置に手を置いていた A は語り手にならなかった。

Aは手の位置を変更してODパターンとなったと同時に06行目の発話がなされた。その発話の後、1.4秒の沈黙が観察されている。そして参与者たちの手の位置の組み合わせがODパターンとなっている間、Aの発話(12行目)の後には、再び沈黙が観察された。このことは、参与者たちがODパターンにおいて異なる手の位置をすることは、その参与者が語り手となろうとしていることをディスプレイしている、ということを知っていることからこそ、他の参与者は発話を産出することを躊躇し、沈黙が生じたものであると考えられる。さらに、13行目の沈黙中に、Aは机の上に手を置く状態から、一度机の下に手を置く状態に変更し、その後、Bを指差した(16行目)。この動作は、一度自分が他者とは一人だけ異なる手の位置となったことで、自身が語り手となろうとするディスプレイをしてしまい、自身が語りを開始することが適切であると参与者間で理解されていることを了解しているからこそ、まず一度手の位置の組み合わせを変更し、指差しをすることで、他の参与者に発話を強く促すことを示す振る舞いを行ったといえる。このような、1.4秒の沈黙の生起、手の位置の変更、指差すという振る舞いは、参与者がODパターンによって語りのための環境が構築され、異なる手の位置の参与者が語り手となることを適切であることと了解しているからこそこの振る舞いといえる。このことより、仮に手の位置の組み合わせが語り出すことに対して何も寄与していないのであれば、Aは、机の上に手を置いたまま、他の参与者からの語りを待つことも可能であるはずである。にも関わらず、参与者が敢えて手の位置の変更を行っていたということは、参与者たちが語りを行うために手の位置の組み合わせが利用可能な資源であることを強く示す事例であるといえる。

5.4.3 考察

分析2では、参与者たちの手の位置の組み合わせがODパターンとなっていたとき、参与者たちがどのように振舞っていたのかを分析した。事例内における参与者たちの振る舞いは、互いの手の位置の組み合わせの中で、一人だけ異なる手の位置となることが語り手となることを示し、また、他の参与者は聴き手であることを示すものであり、すなわち手の位置の組み合わせを利用して語りのための環境構築として互いに調整していることを示すものであった。特に事例2-2において、異なる手の位置である参与者は語り手となることが適切で

あるからこそ、語り手とならないとき、わざわざ撤回する必要があったことを示していた。以上より、OD パターンという手の位置の組み合わせは、単に偶然語りの前に生起するのではなく、参加者自身にとって利用可能な資源であるといえる。

5.5. 総合考察

本章では、座位会話時に手の位置という身体位置を利用し、人々が相互行為の基盤を構築するかについて検討してきた。特に、参加者が異なる身分に分かれ、相互行為を展開する語りに着目した。そして他の参加者とは異なる身体位置を示した参加者が語り手となるように、語りのための環境を構築しているかについて2つの分析を実施した。量的検討によって、他の参加者とは一人だけ異なる手の位置の参加者がいる陣形では、その参加者が語り手となる語り開始されることが多いことを示した。さらに、質的検討によって、互いの手の位置の種類の違いを、参加者たちが互いに調整していることを示し、さらに彼らが語りを開始するために必要な相互理解による環境構築のために利用していることが示された。これらの結果より、これまでの研究による立ち位置と同様に、座位会話においては休止状態の手の位置が相互行為の基盤を構築するために利用可能な資源であることが示された。

5.5.1 相互行為分析として手の位置の組み合わせを検討すること

Kendon(1990)の F 陣形研究及び H 陣形という概念を提示した研究 1 は、参加者たち各々の立ち位置の組み合わせによって形成される陣形には2つのパターンがあり、それぞれのパターンは会話内の活動に対応していることを示唆した。そして研究 2 では、手の位置の組み合わせに2つのパターンがあり、そのパターンが、会話内の活動の変化に対応していることを示したものであった。

研究 1 における立ち位置と同様に、手の位置及び、その組み合わせを対象としたことは、相互行為分析における連鎖、そして資源という観点から議論するにふさわしいだろう。相互行為分析の考え方、及び連鎖・資源という概念については、第 2 章で詳述した。再度簡単に連鎖の概念について以下に示しておく。会話内である参加者 A の振る舞い(振る舞い a)が生起し、続けて他の参加者 B

の振る舞い(振る舞い b)が生起したとしよう。このとき、振る舞い a の反応として振る舞い b が生起したとき、振る舞い b は振る舞い a に対する B の理解の示しとなる。そして、振る舞い a に対して振る舞い b が反応となりえるのは、それが反応として適切/逸脱したものとして参与者 A が理解を示す必要がある。このような連鎖から鑑みると参与者間の立ち位置の調整も、手の位置の調整も、位置を変更する振る舞いに対して、適切な反応として位置を変更し、ある参与者の変更に対する理解を示し、それを承認するという連鎖的構造となっているといえる。そして、この連鎖的構造の中で、活動への理解を示すこと、そして相手の振る舞いへの理解を示すために利用されていることから、手の位置、その変更、そして他の位置との組み合わせパターンは、Goodwin(2013)の示す記号論的資源として、相互行為の中で利用されているといえるだろう。

これまで、いくつかの先行研究において、相互行為における手の位置は検討されてきた。例えば、手の置き方(e.g. 膝の上に置く、腕組みなど)の違いが、人の心理状態の違いを示すものとした研究(大坊, 1998)、トピックの変更に合わせて手の位置を変更することを示した研究(Bull, 1987)、手の位置の種類が次の動作の種類と関連することを示した研究(Dosso & Whishaw, 2012)などが存在する。しかし、これらの研究は個々人の手の位置の機能についての議論であった。対して本章での検討とは、手の位置とは、個々人の振る舞いとして理解されるというよりも、時間性をもった連鎖的構造の中、もしくは他者との関係性で理解される、発話、視線、立ち位置などと同様に相互行為における利用される資源として分析可能なものであることを示した。

5.5.1 相互行為のための資源としての手の位置の特性

相互行為において、資源として利用される身体に関わる現象は様々なものが存在する。先行研究で示されてきた身体の位置、身体の向きを内包する立ち位置といった資源と、本研究が対象とした手の位置という資源の類似点として「定位置」を持つこと、そして異なる点として「志向性」について議論する。

身体位置の定位置

立ち位置、手の位置の2つの身体資源がもつ共通の特徴は定位置が存在する

点である。Sacks & Schegloff(2002)は、相互行為での身体の振る舞いを検討する中で、定位置(home position)という概念を提唱した。身体の定位置という語が指し示すは、身体動作(e.g. ジェスチャーなど)が開始される前／終了後に戻ってくる位置である。定位置は Kendon の提唱する休止位置(rest position/ relax position/ relaxing position)(Kendon, 1972; 1975; 2004; Dosso & Whishaw, 2012)と同一なものとみなされがちである(e.g. 細馬, 2009a)。確かに、この動作の開始前／終了後の休止状態の手の位置が同じ場所になるという現象を捉えた点では、同じであり、Kendon も Sacks & Schegloff(2002)の論文へのコメントの中で、休止位置と定位置が同じ現象であることを明言している。

しかし、Sacks らの提案する定位置という概念には、単に、動作が停止／休止した位置であること以上のことが含意されていると推察される。彼らは動作の開始する場所と動作が終了し戻ってくる位置が、しばしば同じ位置であることを多く観察した。そして、単にそれは頻度の問題ではなく、一つの身体動作が、一つの単位として、我々が理解可能な組織であると主張した。すなわち、ある定位置から開始されて、他の位置に戻ってくる身体動作は、定位置が変更されたらと参与者たちにとって理解可能なものなのである。そのため、Sacks ら(2002)は定位置の中に、動いている状態(例えば、頬を嗅いでいる状態やペン回しをしている状態)をも含めており、単なる身体の停止状態を定位置と呼んだわけではない。この定位置という概念は、Schegloff(1998)の身体捻りの研究の中で、さらに拡張されている。身体捻りの研究は、我々は身体を捻ることによって、複数の活動に関与することができること、つまり、捻ることによって、上半身と下半身が異なる方向を向くとき上半身と下半身は、それぞれ異なった活動への志向を示していることを明らかにしたものである。その中で、定位置という概念が拡張されている。Schegloff(1998)は、身体が捻られたとき、下半身こそが基礎(base)となる志向を示すものであり、捻られた身体の上半身が示す向きは一時的なものであり、そのうち下半身の示す向きのほうへと戻ってくるのが投射されているとしている。だからこそ、上半身で関与している活動は短い期間で終わることが投射され、身体をひねった参与者は、下半身が向くほうの活動へと復帰することが予測できるのだとしている。つまり、身体資源の一部のものというのは、適切に配置されるべき場所が存在し、そこが定位置となり、そこから外れたとき、参与者たちは定位置からずれたことは、有標的な状態であると理解を示すことができるのである。翻って、Kendon(1990)の F 陣

形研究を鑑みると、F 陣形を形成するという事は、各々の参加者がもつ操作領域を共有させるという記述以外に、立ち位置の定位置(つまり下半身の向き)を同じ方向へと定めていると記述することができる。そして、定位置を合わせることによって、相互行為の基盤を構築し、相互行為を展開させるのである。

以上のように、手の位置も定位置を持つのであると考えられる。まず個人内において Sacks & Schegloff(2002)が示唆したように、ジェスチャーやその他の動き(モノを取るといった実用的な動きから、頬をかくといった自己接触的動き)と対比される形で、それらの動きが開始され、戻ってくる状態として、休止状態の手の位置や微かに動いている状態であっても、一定の位置に置かれた手の位置が、会話の中でそこに置かれるべき定位置となりうる。そして、定位置から外れることは、ジェスチャーなど相互行為の中で、有標な状態として参加者たちが利用可能なものとなるのである。同時に参加者間の手の位置の組み合わせにおいて、全参加者の手が同じ位置のパターンは、定位置が合わさった状態である。対して、1人だけ異なる手の位置になるように組み合わせることは、その参加者が他者の定位置から外れ、有標な存在であることが、参加者たちの中で利用可能となるのである。このことは逆に、手の位置を合わせた状態が無標な状態であることを示唆するものである。本研究で扱った会話資料の冒頭部分で、参加者たちの手の位置は、机の上か机の下に置かれていたかは関わらず、3名とも同じ位置に置かれることが多かった。このことは、量的に有意に示すことはできないし、必ずしもそうである必要があると主張するわけではない。なぜなら、定位置が揃っていることは、無標な状態であり、参加者にとって観察可能でも利用可能でもない状態であり、研究者にとって記述可能なものでもない。この手の位置の組み合わせのパターンにおいて、無標状態が存在する可能性は、視線や立ち位置といった身体に関わる現象に対して、手の位置がもつ特異性に依拠すると考えられる。以上のように、手の位置、立ち位置というのは、各々の参加者が定位置を持つものである。そして、その定位置を参加者間で合わせることで、外すことが相互行為における構造の変化を示すために利用されていることが示唆された。

手の位置という資源の独自性

一方で視線や立ち位置に対して、本研究で検討した手の位置は、そのもの自体が何を志向しているかを記述することが困難である。例えば、博物館で展示物を向きながら、立つことは、その人が展示物を見ることを志向していると記述可能である。しかし、手を机の上においていること自体で、その参加者がしようとしていることを記述することは困難である。そして本章の質的分析で示したように、他の参加者と異なる位置に手を置いたときのみ、その違いをもって記述が可能となる。つまり、一人が異なるという手の位置が有標状態は記述でき、相互行為分析の方法論を用いて、質的に検討可能である。対して、参加者たちが手の位置を揃えた無標状態は記述することが困難であり、有標状態の質的検討から類推するに留まるのである。

しかし、身体が無標状態は、相互行為の記述として困難である故に相互行為の研究対象から欠落させてよいのだろうか。立位会話において、相互行為の基盤を構築する F 陣形とはある種の無標状態であり、その状態から変化し、相互行為の階層の変化を反映させるものである。状態からの変化は有標状態なものであり、記述可能である。しかし、その有標であることを示し、かつ相互行為の基盤となる身体の組み合わせが無標状態であることを記述することは、何が有標状態であるかを理解するために必要なものである。本章では、手の位置を対象とし、量的検討で組み合わせパターンの傾向を提示し、その後質的検討を行った。これまでの議論のように、志向が記述可能な身体に関わる現象は、有標な状態を質的検討において、連鎖的構造、そして相互行為の資源として利用されている様子を検討可能である。しかし、手の位置のように志向が記述困難なものを、まず量的検討によって傾向を明らかにし、その傾向に沿った形で質的検討を行うことで、身体の有標／無標構造を明らかにする可能性を示したものであり、相互行為を分析するための新たな方法論の提案したものと見える。

6. 研究 3 身体配置に内包される階層構造の検討

研究 1 と研究 2 では、会話という活動が、どのように空間に位置づけられるのかを検討してきた。特に、単一の活動ではなく、複数の活動から構成される会話において、それぞれの活動が、複数の種類の身体配置という形で、空間に位置づけられることが示された。研究 1 では、雑談から展示物解説への活動の変化と、立ち位置による陣形の変化が相関していることが示された。研究 2 では、雑談から語りという活動への変化と、手の位置の組み合わせのパターンの変化が相関していることが示された。以上の結果は、身体配置には、参与者全員が同じ状態となるようなパターン（F 陣形や全員手を同じ位置に置く状態）と一人だけが異なるパターン（H 陣形や一人だけ異なる位置に手を置く状態）の 2 パターンがあることを示した。さらに、前者のパターンは参与者の役割や立場平等な会話活動と結びつき、後者のパターンは参与者間の役割に差異がある会話活動と結びつく可能性を示唆した。

同時に、研究 1 と研究 2 においても、この 2 つのパターンが相互行為の中で時間的に連続して生起することは観察されたが、この 2 つのパターン間の関係性については分析を行ってこなかった。そこで研究 3 では、これまでも扱ってきた収録された会話データを対象に、2 つのパターンの関係性について検討を行っていく。具体的には、研究 2 の考察で述べたように、F 陣形などのパターンが基底的な状況であり、そこからの逸脱として H 陣形などのパターンが存在し、参与者たちが理解できるものとなっている可能性が考えられる。この点について、検討を行った。特に、前者を「無標状態」、後者を「有標状態」と見なしうるのか、について議論を行っていく。

まず、本研究における、無標と有標の関係性について、どのように捉えているのか、簡単に示す。無標と有標という用語は、言語学で古くから議論されている(大橋, 2010)。たとえば、「は」と「ば」という音の対や「men」と「women」という英単語の対はそれぞれ、前者が無標、後者を有標という関係を含んでいる。この関係とは、それぞれが共通要素を持ちつつも、有標のものは、無標のものに何かが付加えられている関係となっている(濁点や wo など)。さらにいえば、無標とされる「men」は単に男性を指すだけではなく、人全体を指し示すことが可能であり、そこに wo をつけることによって、人全体の中の特定の集団(女性)を指し示すことが可能になっている。つまり、無標と有標の関係性

とは、無標が有標を包含する階層構造をもっているといえる。まとめると、無標-有標の関係性とは、表現として、後者は前者に付け加えられた形式となっていること、さらに表現が指し示すものが、後者は前者に包含されるといった、階層構造をもっていることと考えられる。

では、研究1と2が対象としてきた身体配置の2つのパターンが無標-有標の関係性をもっているかについて議論を進めるために、パターンの形式の違いについて検討する。2つのパターンとは、F陣形やASパターンといった参加者の立ち位置や手の位置がすべて同じ状態のパターンと、H陣形やODパターンといった参加者のうち1人が異なる立ち位置や手の位置の状態のパターンのことであった。この2つのパターンが、これまでの研究を通して会話内で観察でき、また人々が会話を展開するための資源として利用していた事実は、2つのパターンが独立した無関係なものではないことを指し示している。そして、この2つのパターンが相互に関係し、その差異を人々が利用していることは、パターン間の差異は人々にとって利用可能なものになっているといえるだろう。では、その差異とはなんだろうか。本研究が対象としてきた3人の身体位置によって形成されるパターンでの、パターン間の差異とは、3人のうち1人が異なる状態となっていることである。つまり、3人内の2人が、どちらの状態においても共通項となっているといえる。以上のことから、前者のパターンのうち2人が共通項となり、1人が変化することによって後者のパターンが作り上げられている。よって表現として、H陣形やODパターンはF陣形やASパターンをベースとして、そこに差異が付け加えられることによって成立しているといえるため、有標・無標構造を見出すことができる。

以上のことを踏まえて、それぞれの身体配置パターンが、相互行為の中で指し示すものについて検討する。研究1で対象とした未来館SC会話コーパスの会話データの中で観察されたF陣形とH陣形は、それぞれ雑談と展示物解説という活動と結びついていた。研究2で対象とした千葉大学3人会話コーパスの会話データで観察された手の位置のASパターンとODパターンは、雑談とストーリーテリングという活動に結びついていた。雑談は参加者すべてが平等な権利をもっている活動に対して、展示物解説とストーリーテリングの活動は参加者の一部が話者としての権利をもっている活動といえ、身体配置の2パターンと同様に、全員が同じか一部が違うかという対比的構造をもっているといえる。一方で、これらの活動が、身体配置パターンの形式で観察できた階層的構造を

もっているとは考えにくい。つまり、雑談がベースとなって展示物解説／ストーリーテリングがなされている、もしくはその逆であることを証明するのは困難である)

そこで、本章での分析は研究1で対象とした未来館SC会話コーパスの会話データと研究2で対象とした千葉大学3人会話コーパスの会話データについて、並列し、分析を行う。この2つの会話データは、様々な面で異なる。一方で、どちらも収録された会話データという特徴をもっている。このことから、2つの会話データはどちらも“収録される”活動として、参与者たちが位置づけている可能性がある。そこで本章の分析では、会話データの収録冒頭部分を対象に、まず参与者たちが、これから行われる活動／今行われている活動を、“収録されるもの”としてどのように位置づけているか分析する。つまり、収録される会話の多くは“収録される活動”というのを出発点とし、そこから会話内での独自の活動が展開されているという仮説を本章では検討するものであり、この検討を通して会話が基底となる活動とその上に成り立つ活動という階層的構造をもっていることを示し、それと身体配置パターンがもつ階層的構造が結びついていることを示すことが、本章の目的である。以下、会話の中で人々が今行っている／これから行う活動を“収録されること”といかに結びつけているのかを明らかにし、その上で身体配置パターンとの関係性について分析を進めていく。

6.1 相互行為における“収録されること”

研究1や2において、収録された会話データを分析対象としたように、近年、会話やコミュニケーションを含んだ人々の相互行為研究の中で、ビデオカメラによって収録した映像データを基に分析を行う手法が一般的になりつつある。そして、近年増々盛んになる身体に着目した相互行為研究は、収録された映像データを基に研究をすすめられ(e.g., Streeck, Goodwin, and LeBaron, 2011 ; Wachsmuth, Lenze, and Knoblich, 2008), 人々の相互行為の研究を行おうとするとき、収録した映像は欠かせないものとなっている。

相互行為の中のことばや身体を微細に分析するために、相互行為を映像データとして収録することは、最早欠かせないことであり、様々な映像データが収録されている(高梨, 2013)。しかしながら、“収録される”という実践そのもの

を対象とした研究は意外にも少ない。これはこれまでの研究が、映像データを、何らかの研究目的を達成するために用いてきたからであると考えられる。例えば教室の生徒と先生の談話を検討することを通して教室での学習プロセスを検討するなどである。こうしたデータの使用方法においては、“収録されること”は言わば前提であり、分析対象とならなかつたと考えられる。

こうした“収録されること”に示唆的な論考が土倉(2014)である。土倉(2014)は、研究協力者2名に観光をしてもらい、2人の内1人にハンディカメラを渡し撮影してもらった後、得られたデータの分析を行っている。その中で、例えばカメラの向こう側にいる第三者たちに丁寧語で語りかけるといった事例を通して、参与者たちがカメラという資源を参照しながら、相互行為を展開している過程を示した。

土倉(2014)の研究は、“収録されること”が相互行為を展開する資源となっていることを示している点で極めて興味深い。しかしながら、土倉(2014)が対象としたデータは、観光客同士の相互行為を撮影するという、参与者たちが収録されることへ高い志向性を示す場面であった。当然ながら、収録される状況は、以上のような参与者たちが収録されることに対して志向性を有している場面だけでなく、多様に存在しうる。

本章では、映像データの中の相互行為における“収録される”ことを鍵とし、これまでの研究で取り扱ってきた2つの収録された会話データ(未来館SCコーパスと千葉大学3人会話コーパス)を対象とした分析を行う。

この2つの会話データは、様々な面で異なる。例えば、未来館SCコーパスの参与者は、立ち、歩きまわりながら会話をするが、千葉大学3人会話コーパスでは、参与者は座って会話をする。また会話に参加している人数も、前者は2人以上から大勢、後者は3人で固定と異なる(ただし、本研究で分析する未来館SCコーパスの事例は、参与者が3名の会話だけである)。また、前者では、SCと来館者という、参与者間で社会的役割の違いがすべての会話にもあるはずだが、後者の参与者間で、社会的役割の違いがあるかは不明確である。以上のように、2つの会話データは様々な面で異なる。だが、参与者にとって“収録される”ものであることは共通している。この共通性が、参与者にとって、どのような意味をもたらすのかを検討するために、2つの会話データの収録冒頭部分の検討を行っていく。

以下の点についてのみ先に注意しておく。以降の分析の中で、2つの会話デ

ータについて、前者をフィールド的、後者を実験的な会話データとして扱うことがある。そして、それぞれの会話データがもつ特徴ことを完全に否定するつもりはない。だが、2つの会話データを、フィールド／実験的会話、自然／不自然な会話のような分類をし、比較検討をすることは、本章の目的ではない。そもそも、Speer (2002)が指摘したように、会話データが一律に自然／不自然(フィールド／実験) 分類するかを議論することは困難である。未来館 SC コーパスは、SC の日常業務を切り取った会話データとして、自然な会話、もしくはフィールド研究の対象となりえる。しかし、このコーパスは様々な研究領域で扱われることを想定し作られたため(城ら, 2015)、参加者たちは彼らの顔や動作を収録する様々な機器で収録されている。よって、同意を得た参加者のみを収録に参加させるため、収録スペースをあらかじめ仕切った展示ブースで行われた。そのスペースには、同意を得た参加者のみしか入れない状態であった。このことは、未来館 SC 会話コーパスが実験室的様相を持っているといえよう。対して、千葉大学3人会話コーパスに収録された会話データは、実験的ではある。だが、発話が脚本で指定されたもの(例：長岡ら, 2011)、アニメーション再生課題など課題によって会話の流れの枠組みが提示されている(例：McNeill, 1992)と比して、提示された話題から自発的に参加者が脱線可能という観点など、なるべく自然な会話に近づけようとしたものである。以上のように、本研究で扱う会話データはフィールド／実験の互いを代表的なものであるわけでもない。そして、この対立構造を真摯に考えることは、何が真の自然・日常的会話なのかを考えることであり、それは本章の目的ではない。むしろ相互行為の微細な分析においては、串田(2006)が指摘したように、データがどのように収録されたのかではなく、データを何についてのデータとして分析するかということが重要である。本章では、それぞれのデータを人々が収録される活動に従事した場面として分析を行っていく。

6.2 本章の分析の流れ

本章の目的は、人々の相互行為を収録した映像データの中で、参加者たちにとって、“収録される”ことを、どのように扱われるのかを明らかにし、相互行為内の階層構造と身体配置パターンの階層構造の関係性について検討することである。

西阪(2001)は、心理実験であったとしても、実験すること自体が、相互行為の中で参加者の振る舞いによって顕在化し、利用されるものであるということを目指した。その指摘を踏まえると、“収録される”ことも、相互行為の中で、何かしら顕在化し、利用される可能性が高い。本章では、2つの会話データを分析することで、様々な環境に即して、人々は“収録される”ことを相互行為の中で、多様なやり方を取り扱うことを、それぞれの会話データの中で示していく。未来館 SC コーパスに関しては、まず撮影機材への参照という現象に着目する。収録されるということは、当然何かしらの機材で撮影がなされているのであるはずである。そして、土倉(2014)は、2人の内1人が、ハンディカメラをもって会話を行うという極めて収録されることが志向される状況の分析を行った。その中で、参加者たちがカメラを参照しながら、相互行為を展開している、いくつかの事例を示した。このことから、“収録される”ことと密接に結びついた撮影機材を参照することで、参加者が何を行っているのかについて、未来館 SC 会話コーパスのいくつかの事例の分析を行う。一方、千葉大学 3 人会話コーパスでは、収録された環境の違いによって、撮影機材を参照する現象は観察できなかった。だが、西阪(2001)が心理学実験で観察したように、研究者によって与えられた課題・状況を参加者が参照し、議論する様子がいくつかの事例で観察された。この現象をつぶさに分析し、課題・状況を参照・議論することで、彼らが何を達成するかについて検討し、“収録される”ことと、どのように接続しうるのか議論を行う。

以上の分析を通して、相互行為の中での“収録されること”が扱われる様を明らかにする。このことによって、会話データの収録冒頭では収録される以前の活動、今まさに収録されるものとして扱われた活動、収録されるものとして扱われている活動と、会話データ特有の活動（展示物解説やストーリーテリングなど）という3つの活動が観察可能となっているといえる。この活動たちの関係性を身体配置パターンとの関係性も含め、検討を行っていく。

6.4 カメラの存在を利用した収録される活動の組織的構築

はじめに、未来館 SC 会話コーパスの会話データの分析を行っていく。前述のように、未来館 SC 会話コーパスでは、収録冒頭部分において、参加者たちが、何らかの形で、カメラを参照する2つの事例について分析を行う。2つの事例

は SC と来館者たちがピンマイクを装着し，彼らの近くにカメラマンが近づき，まさに収録が開始された場面である．それぞれの事例における scA は参加者の SC，CM はカメラマン，v01 と v02 は来館者を指す．また，それぞれの事例の scA と v01，v02 は異なる人物である．

6.4.1 収録される活動をそれ以前の活動と異なるものとして位置づける

Fig. 22 は事例 3-1 の発話を転記したものと，参加者たちの身体の振る舞いを写したものである．

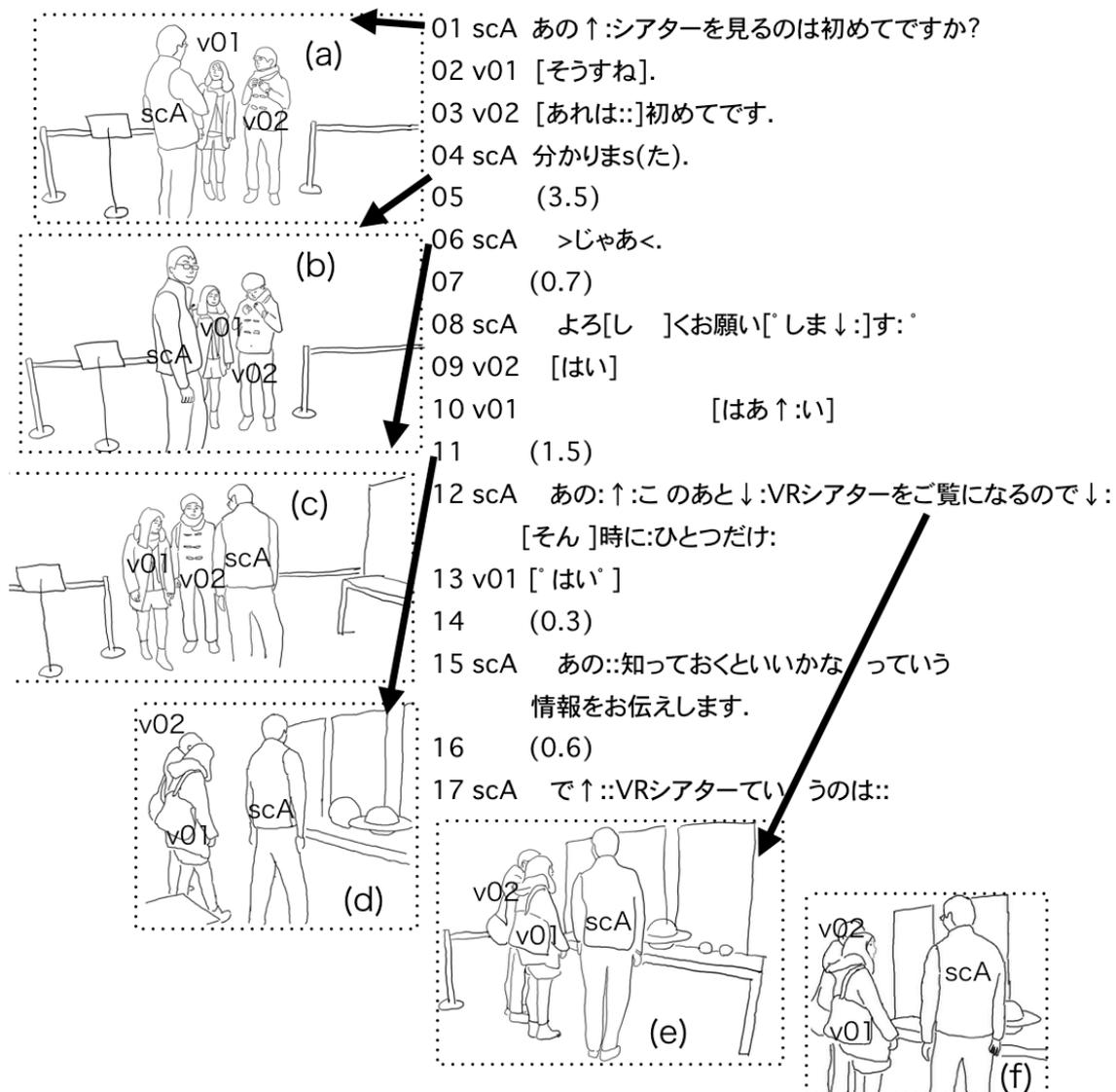


Fig. 22 事例 3-1 における参加者たちの立ち位置の模式図・トランスクリプト・静止画

まずは、この事例を便宜上 3 つの段階に分けて説明していく。1 つ目の段階では scA による来館者の知識の確認が 01 行目から 04 行目においてなされていた。01 行目において、scA から来館者に対する質問が開始される。この 01 行目のシアターというのは、未来館の展示物の一つである。このシアターを来館者たちが、この後見に行くことを予定し、収録直前に scA に伝えていたと想定される。この来館者の（想定される）発話に続けて、scA は来館者たちのその施設に対する経験の有無の確認する質問を行った。この質問に対する応答が来館者側からなされ(02 行目, 03 行目), 続けて, その応答を scA は受け入れた(04 行目)。

この 1 段階後、会話は、06 行目から 11 行目までの 2 段階目と 12 行目から 17 行目までの 3 段階目と続く。説明の都合上、先に 3 段階目について説明する。3 段階では、scA は、来館者たちが、このあと行く VR シアターという施設を見に行くという前提の確認を行い(12 行目)^{xiii}、この確認を v01 が受け入れると(13 行目)、続けて、これから伝える情報が、「知っておくといい」ものであると伝える(15 行目)。3 つ目の段階で、scA は来館者に対して、先にこれから行われる活動が解説であり、その解説のポイントは「ひとつだけ」(12 行目)、「知っておくといい」(15 行目)ものとし、17 行目で、VR シアターという施設についての解説を開始する。

以上のように、1 つ目の段階では、施設についての体験・知識の有無を確認した。そして、来館者の知識・体験状態に合わせて、scA は未来館の VR シアターという施設に関する解説を開始した。この 2 つの段階に挟まれて、scA は「じゃあ」(06 行目)という発話で、来館者たちを促しながら、「よろしく願います」と開始の合図を産出した (08 行目)、その合図に対して来館者たちも返答していた(09 行目と 10 行目)。

続けて、参与者たちの身体的な振る舞いについて、記述していく。冒頭部分では、scA と来館者は Fig.22-(a)のように立っていた。04 行目に続く、3.5 秒の沈黙(05 行目)の中で、まず来館者のほうへ視線を向けたまま、scA は軽くうなずき、続けて、カメラのほうへと顔を向けた(Fig.22-(b))。カメラへ一瞬視線を向けたあと、scA はゆっくりと展示物のほうへと歩いて行きながら、「じゃあ」(06

^{xiii} 収録開始以前から SC と来館者は会話を行っていた。そして、01 行目からの SC の発話から、来館者たちがこの後 VR シアターに行く予定であり、そのことについて会話していたと推察できる。そして、01 行目で示されたように、行く予定の施設に関して、来館者たちは、知識・体験がないことが示されている。以上のことを前提とし、12 行目では「VR シアターをご覧になるのであれば」で、前提の確認を行うことで、この後 SC が提示・解説を行う準備 (Pre-sequence) をしているといえる(Schegloff, 2007)。

行目)と発話をした。scA はそのまま歩いて、来館者の横切った直後に、「よろしくお願ひします(08 行目)」と開始の合図をし、体を捻り、来館者のほうへと視線を向けた(Fig.22-(c))。それを受けて、来館者は開始を承認しながら、scA のあとに続き、展示物のほうへと歩いて行った(Fig.22-(d))。scA が「VR シアターをご覧になるので(12 行目)」と発話するところで、移動は終わり、scA と来館者たちは展示物を前に並んだ(Fig.22-(e))。

以上のように、この事例には来館者の知識・体験の有無の確認から(1 つ目の段階)、解説の開始(3 つ目の段階)が含まれていた。SC は、来館者の知識状態を確認し、確認した知識状態にあわせて解説を組み立てる(城ら、2015)。しかし、本事例では、この 2 つの段階の間に開始の合図(2 つ目の段階)が挟み込まれている。この挟み込まれた挨拶について、発話のデザイン、身体の利用の観点から検討する。

事例の中で観察可能なように、来館者たちは開始の合図(08 行目と 09 行目)以前から会話を行っていた。つまり、この開始の合図は、それ以前の活動とは異なる、新たな活動を開始するために産出されたと考えることが可能である。さらに、この合図が「よろしくお願ひします」という形であったことは、これから異なる活動が行われ、それに対する協力が依頼されているといえる。以上のように、話の位置や形式から、挟み込まれた開始の合図は参与者たちが、これからの活動とこれまでの活動として異なるものとし、同時にそのことを承認したものといえる。

では、これからの活動を、これまでの活動と、どのような点で異なるものとして、位置づけたのだろうか。05 行目において沈黙の中で、scA は来館者たちに向かって頷き、続けて後ろを振り向き、カメラのほうへと一瞬視線を向けていた。scA がカメラのほうへと視線を向けたのは、来館者の知識・体験の有無の確認が終わったあとの、長い沈黙が生じていた間に起こったものである。3.5 秒という極めて長い沈黙が生じているということは、会話の進行がなんらかの理由によって中断されていると推察できる。そして、沈黙が終わり、会話が再開されたときには、その理由が解消されていると考えることは妥当であろう。沈黙間で観察されたのは、scA が振り向き、カメラを見たことである。この振る舞いによって、沈黙が生じたなんらかの理由が解消され、06 行目で scA は発話を産出し、会話が再開したと考えられる。では、後ろを振り向き、カメラへ一瞬視線を向けることによって、何が解消したのだろうか。考えられる可能性の 1

つは、scA は、手持ちカメラをもつカメラマンが自身を含んだ参与者たちを撮影するに適切な位置にいることを確認したと考えられる。そして視線を向けた後の 06 行目から、scA と来館者の間で開始の合図とその承認がなされていた。前述のように、この 06 行目からの一連の振る舞いは、これからの活動が、これまでとは異なる新たな活動であることを示すものである。このことから、scA はまずカメラを見ることによって、収録されることが適切に行うことができるかを確認したといえ、これからの活動を“収録される”活動として位置づけたといえる。この位置づけに対して、来館者たちは、明確な反応を示すわけではない。しかし、開始の合図へ反応すること、scA の移動に続くことから、scA が提示した活動の境界と、これからの活動の位置づけを承認したといったとしても妥当であろう。

以上のように、この事例で参与者たちは開始の合図によって、これまでの活動とこれからの活動を異なるものとして、位置づける。そして、これからの活動は、カメラで適切に撮影されるべき“収録される”活動として位置づけたといえる。この分析は、カメラの存在によって、合図が挟み込まれたことを主張したいわけではない。カメラがなくとも、挟み込まれた開始の合図がなされる可能性はあり、同時にカメラがあっても挟み込まれた開始の合図がなされない可能性もある(下記の事例 3-2 では、観察されていない)。しかし、この場面において、挟み込まれた位置で参与者たちが開始の合図を行ったのは、カメラが(参与者にとって)適切な場所に来たことへの反応であると観察可能な位置においてである。このことから、カメラが収録を行うために適切な位置にあることを確認したことで、scA は、彼らが収録されるべき活動である“展示物の解説”を開始できる位置へと移動を開始したと言える。そして、カメラの位置確認、移動の開始と連なってなされた、06 行目の「じゃあ」は、来館者たちに対して、これまでとは異なる活動が開始されることを示し、移動を促すものである。この促しに加えて、さらに続く 08 行目と 09 行目の開始の合図を行うとき、scA の下半身は展示物の方へと向けられ、上半身のみに来館者のほうへ向けられていた。この身体捻り(Schegloff, 1998)において、scA は下半身の向きによってその場で引き続き会話を展開するのではなく、これから移動する場所を示し、来館者もそちらの方向へと移動することを促すことを示している。以上のように、開始の合図とその承認に関する発話と身体を通して、参与者たちはそれぞれが、これから新たな活動へと従事することを示し、そして、その活動は収録される

べきものであり、その活動に対して適切な振る舞いをするを通して、“収録される”活動、即ち展示物の解説を収録するという活動を構築していたといえる。

続いて、参与者たちの移動と立ち位置について検討していく。当初は Fig.22-(a)のように、来館者たちは横並びになり、scA がその前に立っているという位置関係で、参与者たちは立っていた（便宜上、この位置関係を立ち位置 1 と呼ぶ）。そこから前述のように参与者たちは、展示物のほうへと参与者たちは移動した。そのとき、scA は、先に来館者の前を横切り、来館者のほうへと振り向きながら (Fig.22-(c))、展示物への移動を開始した。そのため、来館者よりも先に移動を開始した。その後、すぐに来館者が移動を始めた (Fig.22-(d))。展示物前に到着する直前に、scA は体全体を少しだけ右に旋回しはじめ (Fig.22-(e))、来館者が展示物前で立ち止まると、来館者が横並びにたち、彼らに対して、少し体を向けて scA が立っているという Fig.22-(f) のような位置関係となった（便宜上、この位置関係を立ち位置 2 と呼称する）。

この立ち位置と移動を検討していくためには、これまで見てきた F 陣形及び、会話における立ち位置の研究 (Kendon, 1990 など) の概念を適用するのが、適当であろう。立ち位置 1 は、前述した開始の合図以前の会話時に形成されたものである。この立ち位置の中で、scA は横並びの来館者の前に立っていた。これは SC と来館者という異なる役割の間で会話する活動に従事していることを示しているといえる。一方で、立ち位置 2 は、より複雑である。まず、位置関係としては、2 人の来館者は横並びであり、そこから少し離れて scA が横に並んでいる状態である。そして、scA は、やや体全体を捻り、来館者へと視線を向けていた。この立ち位置の解釈の様々な可能性がある。1 つの可能性として、scA と来館者の間がやや離れ、来館者のほうへと体を向けていたことから、立ち位置 1 と同様に、彼らが SC と来館者という役割に分かれていたとも考えられる。立ち位置 2 において、開始される活動は展示物の解説である。解説という活動は SC が語り手となり、来館者たちが聴き手となるように、それぞれが異なる役割になる活動である。研究 1 では、解説活動の際に、SC と来館者たちは、平等ではない立ち位置の陣形を形成することが観察されている。研究 1 に従うならば、立ち位置 2 は立ち位置 1 と同様に、展示物解説という活動のために、scA が来館者と異なる位置に立ったと解釈することができる。しかし、これまでの分析が示したように、立ち位置 1 から 2 への移動は、これからの活動を収録さ

れる活動として位置づけた後に行われたものと考えられる。この観点に立ち、立ち位置 1 とは違い、誰か 1 人が異なる位置にいるというよりは、3 名の参加者が横並びに立っていたことから、参加者たちが、収録される活動に参加する者として同じ役割を担っていたという解釈も可能である。

立ち位置 1 から 2 への移動のとき、scA は先に移動し始めていた。そして、展示物前に先に到着することで、これから解説を行い展示物がどこなのかを来館者に示し、誘導することで、自身が解説役であることを強く示すこともできたはずである。しかし、実際には先に移動しはじめた scA 来館者のほうを見やってみてから、少しだけスピードを下げ、横並びで移動し(Fig.22-(d))、展示物の前に到着するのは 3 名とも、ほぼ同時であった。立ち位置 2 は完全に 3 名が横並びというのは、scA が離れているように見える。このことは、来館者間は既知の間柄であり、その 2 人に対して他者である scA が、来館者間と同様の距離で近づくことが難しいからという理由なのか、もしくは前者の解釈のように scA が離れるように志向していたと考えることもできる。しかし、展示物への移動時の振る舞いから、scA が来館者と横並びになることを志向していたと解釈できる余地がある。

以上の 2 つの解釈を織り合わせるならば、立ち位置 1 から立ち位置 2 の移動において、一時的に 3 名は横並びとなるように志向した可能性がある。展示物前に到着直前であり、その後解説活動に入るところで、scA が来館者に対して体を向けることで、解説役の SC と聴き手の来館者というように異なる役割を担うことを示すように、立ち位置を調整したと記述可能であろう。2 つの立ち位置間での移動において、3 名が横並びになろうとしたという記述が可能ならば、この立ち位置は、これからの活動が収録という活動であり、その活動に参加する者としては同じ役割を担っていることを示していた可能性がある。ただし、前述のように、立ち位置 1 から 2 への移動は様々な要因が絡みあった複雑なものである。立ち位置の違いによって示される活動の違いに、収録される活動も入るのか否かの検討は他の事例の分析で更に検討していくこととする。

以上、フィールド環境会話の収録冒頭において、参加者は展示物の解説活動を、“収録される”活動であるとして、位置づけることを、発話、身体、特に互いの立ち位置を通して行っていた。さらに、収録される会話という活動は、単にカメラが録画を開始したことによって開始されるのではなく、参加者たちが開始の合図、立ち位置の変更という発話・身体を通して、相互調整を行い、参

与者たちが，“収録される”活動への参与を承認することによって，開始されると考えられる．

6.4.2 理由の提示による収録される活動を位置

次の事例 3-2 は，収録された活動が，単にカメラマンという外部者や SC といった特定の参与者だけによって開始可能なわけではないことを示すものである．事例 3-2 の参与者たちの発話と身体ふるまいは，Fig.23 に示されている．

まずはこの事例を、説明のための便宜上 4 つの段階に分けてながら、事例の流れを見ていく。1 段階目として、01 行目から 03 行目まで、scA は来館者に対して、収録に協力することへの感謝を述べ、来館者が反応している。04 行目においてカメラマン(Fig.23 において、CM と表記)は、収録の開始を参与者たちに促している。次に 06 行目から 22 行目までは、scA が来館者に対して、“今なぜ我々がカメラで収録がなされているか” についての理由説明を提示しているところである。2 段階目として、06 行目と 11 行目において、scA は自身が今トレーニング中であり(11 行目)、研究のためのサンプルになっている(18 行目)ためであると来館者に伝えている。これに対して来館者は、サンプルになっていることへ笑いを示し(19 行目)、さらに自身たちも同じくサンプルとなっていると発話した(22 行目)。3 段階として、32 行目から 38 行目までの中で、scA と来館者たちは、カメラの場所を確認しあうことを行うことで、実際に彼らが収録されている環境にあることを確認しあい、承認しているといえる。事例 3-1 では、発話によって直接カメラへ言及することなく、これからの活動の位置付けを示すことによって、新たな活動の開始を示していた。一方で、事例 3-2 では、カメラがそこにあること、参与者たちが収録されていることへ、発話によって直接言及することによって、これからの活動が“収録されるもの”として、異なることを示している。最後に 4 段階目として、42 行目から 48 行目において、scA は来館者に対して、これから解説する場についての知識の有無を確認し(42 行目)、知識がないことが来館者たちによって示されると(44 行目・46 行目)、展示物の解説を開始する(48 行目)。

以上、4 つの段階をまとめると、(1)挨拶、(2)SC による収録の理由説明、(3)来館者によるカメラの位置の指摘、(4)知識の確認の有無・展示物解説の開始であった。続けて、参与者たちの身体の振る舞いについて見ていく。段階(1)の v1 と scA が挨拶する中で、カメラマンが v02 にピンマイクを装着させている(Fig.23-(a))。カメラマンからの発話を受けて(04 行目)、scA の発話から撮影の理由説明を提示が行われると(06 行目)、参与者たちの立ち位置は来館者が横並びとなり、その前に SC が立つ位置関係となった。これは事例 3-1 における立ち位置 1 と同様の形といえる(Fig.23-(b))。11 行目で、scA は撮影理由を提示しながら、展示エリア外の方へと体の向きを変える。このとき、来館者は scA に対して、志向を向け続ける(Fig.23-(c))。その後、18 行目において、再び scA が来館者のほうを向き、来館者が横並び、その前に SC が立つ形となった(Fig.23-(d))。

scA は 32 行目の発話を産出しながら、scA は右足のみを前に出し、展示物のほうへと体を向けようとしていた(Fig.23-(e)). しかし、自身の発話と重なって産出されていた v02 のカメラの位置を指摘する発話(33 行目)を受けて、scA が再び来館者たちのほうへと体の向きを向けた(Fig.23-(f)). そして、段階(4)において、参与者たちの立ち位置は再び来館者が横並び、その前に SC が立つ形に戻った. 知識確認が終わると、scA が展示物のほうへと、体の向きを向けて、来館者もそちらのほうに向けると、展示物の解説が開始された. このとき、SC と来館者は展示物の前に 3 名とも立った (Fig.23-(g)).

事例 3-2 は、知識状態の確認と展示物解説の開始の間に開始の合図が挟み込まれていた事例 3-1 とは違い、知識状態の確認の後に、すぐさま展示物解説が開始されていた. しかしながら、参与者たちは、この解説という活動を開始する前に、収録されている理由の説明という活動に従事していた. そして、この理由説明という活動は、収録される会話という活動に従事するために、互いの承認が必要なものであったことが観察された.

撮影の理由説明は、06 行目の scA の発話から開始され、31 行目の v01 の、説明の受け入れによって、一度閉じているといえる. 閉じているからこそ、scA は「そうなんですよ、も(32 行目)」と説明の受け入れを繋いで展示物の解説を行おうとし、自身の体を展示物のほうへと移動させようとした. しかし、この理由説明と同時に v01 が産出した 33 行目のカメラの位置の指摘によって、この展示物の移動は急遽中断された. この中断によって、scA は、前に出していた右足を軸に回転をし、再び来館者たちのほうへと向き直した. このことから、収録の理由の説明・提示というものは、参与者間で相互に承認されなければならない. そして、相互に承認することによって、次に行われる活動が“収録される活動”であることを、参与者間で、位置づけているのである.

また、この収録の理由の提示が、参与者間の問題であり、外在的な理由 (e.g., 撮影の倫理的な問題) に依拠していないのは、断片 1 でこの理由説明の段階が観察されなかったこと、そしてこの未来館コーパスでは、収録スペースに入る前に来館者は同意書を書いていたことから、明確である.

そして、断片 2 の中に 2 つの立ち位置が観察される. 1 つ目は Fig.23-(b),(d) のような立ち位置(立ち位置 1), もう一つは Fig.23-(g)のように、展示物の前に 3 人が並んだ立ち位置である(立ち位置 2).

事例 3-1 は、収録前の状態から、“収録される”ことへの移行を挟み、展示物

解説という活動へと移行するものであった。その中で、参与者たちの立ち位置は、従事する活動と、彼らを取り巻く環境に合わせて、変化している可能性を指摘した。事例 3-2 の中でも、同様に立ち位置の変化が生じている。ここで着目したいのは、scA の移動が一度明示的に中断されたことである。まずこの中断は、33 行目の来館者の発話後に生じた。33 行目「あ〇あっちにも」という発話は、来館者がカメラの位置を指摘するものであった。この scA が移動しようとする／この発話より前では、収録の理由説明という活動が起こっていた。そしてカメラの位置を指摘するという発話は、収録の理由説明という活動に関わると考えることが妥当だろう。一方で、33 行目と重なって生じた scA の発話(32 行目)は、理由説明の活動を閉じ、すぐに異なる活動を開始しようとする発話と記述できるものであった。つまり、ここでは scA は収録の理由説明が参与者間で共有され、終了可能となったとしていた。一方で v02 は、理由説明の活動が、まだ閉じていないという認識を示しているといえる。この観察から、参与者間で、今の活動の位置づけについて、ズレが生じていたといえる。では、このズレは、どのような調整され、解消されたのだろうか。scA は移動を中断し、来館者のほうへと向き直った。向き直ったことで、3 人の位置関係は、展示物に対して並んでいる状態ではなく、立ち位置 1(Fig.23-(b),(d))になっているといえる。そして、scA の 38 行目の発話は、32 行目から 37 行まで連なる来館者側のカメラ位置の指摘に対する反応となっている。そして、38 行目の発話は、収録されることを謝る形式となっている。この発話を受けて、来館者は 39・40 行目に見られるように、scA の謝罪を受けていれている。この一連の振る舞い後、42 行目から、scA は展示物解説を開始している。そして、このとき三人の立ち位置は展示物の前に並ぶようになっていた。つまり、活動も立ち位置も変わっていたということである。展示物解説をするために、展示物前に並ぶのは、展示物の物理的特徴によって当然と考えることもできる。しかし、立ち位置の変更中断という現象から、この立ち位置変更が、活動の変更に結びつくように、参与者たちが組織立てていると、考えることもできるだろう。

6.4.3 日常会話の中で“収録される”ことを位置づけること／利用すること

以上のように、未来館 SC 会話コーパスの収録冒頭部分において、参与者たち

は、展示物の解説という日常的な活動を行おうとしている。その中で、彼らは、活動を“収録される”ものとして、位置づける。事例 3-1 で見てきたように、開始の合図という発話によって、これからの活動とそれ以前の活動の境界を示した上で、これからの活動を“収録される”ものと位置づけることもできる。一方で、すでに参与している活動が“収録される”ものであることを、カメラ位置を指摘するというやり方で、互いに確認しあい、その上で展示物解説という活動に移行することもある。どちらにせよ、参与する／している活動を“収録される”こととして位置づけることをしているといえる。その位置づけは、ことばだけではなく、身体の振る舞いを通して達成される。そして、位置づけるということの達成を通して、彼らは所謂日常的、自然な、フィールド上の相互行為を展開させるのである。

また、どちらの事例においても参与者たちは収録される以前の活動、収録されるものとして扱う活動、以降の展示物解説という活動にあわせて、立ち位置の組み合わせの調整が観察された。そして、2つ目の収録されるものとして扱う活動時の立ち位置の組み合わせは、(それ以外の活動時の立ち位置と相対的に)参与者たちが円形や横並びとなるように調整されることが観察された。一概に、これらの立ち位置による身体配置が F 陣形と判断することは困難である。しかし、収録されるものとして、相互行為の中で参与者たちによって扱われている活動は、互いが平等な状態となるように身体配置によっても示されていると記述できる可能性があった。

6.5 実験であることを利用した収録された活動の組織的構造

次に千葉大学 3 人会話コーパス (Den & Enomoto, 2007) に収録された会話データについて分析していく。ここまでの分析では、カメラを参照する振る舞いと、その周辺の参与者たちの振る舞い、及び収録の理由を説明するという一連の活動の観察を行った。以上の観察を通して、参与者たちは会話の中で、自身の参与する活動を、それまでの活動とは異なる、“収録される”ものとして位置づけていることを示した。

しかし、撮影機材を参照することだけが、これから参与する／参与している活動を“収録される”ものとして、位置づける方法なのだろうか。特に、これから検討していく千葉大学 3 人会話データのような実験室での会話では、研究

者によって、収録より前に、カメラの位置の説明、収録理由の説明がなされている。つまり未来館のデータ床となり、参加者が収録されていることを十全に理解している状況であるといえる。しかしながら、このような理由の説明は、参加者が“収録される”ことを参加者自身で位置づけることなく、与えられた課題を達成するためにのみ振る舞うとみなすための理由となるのだろうか。

“収録されること”は、撮影機材や撮影状況を通してのみ確認されるわけではない。とりわけ、以下分析の対象とする千葉大学 3 人会話コーパスにおいては、実験の教示を遵守することが、収録されることへの志向になりうる。

実験という実践に対して、西阪（2001）は会話分析を通して重要な指摘を行っている。西阪（2001）は、心理実験が進行するときの人々の振る舞いを観察し、実験の方法的実施が局所的に組織化されていることを示した。つまり、“実験がなされている”ことが、単なる参加者の行動を制約するものではなく、実験という活動を達成するための資源として利用されていることを示したのである。

千葉大学 3 人会話コーパスは、日常会話を収録するという実験であった。つまり、千葉大学 3 人会話コーパスでは、実験の教示を適切に遵守することが、“収録されること”への志向となりうるといえる。

千葉大学 3 人会話コーパスの教示を確認する。千葉大学 3 人会話コーパスは、研究者によって集められた参加者たちの会話であり、会話のトピックをサイコロで選ぶよう研究者によって教示されていた。また、この実験では参加者たちはトピックについて宣言することを研究者によって指示されていた。さらに、提示されたトピックからの脱線が許されていた。こうした日常的な会話を収録するための教示は、参加者が相互行為を展開するためにどのような利用されているのだろうか。

分析の着眼点は以下である。研究者の教示から、参加者は 2 つの問題に直面すると考えられる。第一に参加者たちは、どのようにトピックを決定するのか（提示されたトピックに従うのか否か）、第二に決定されたトピックについて誰が会話を展開するのか。こうした問題は、断片の中にどのように現れ、そしてどのようなやり方で解決がなされているのだろうか。以上の過程について具体的な相互行為の断片の分析を通して検討していく。

6.5.1 教示されたトピックに従って会話を展開する

研究 2 における事例 2-1 について、手の位置と語りの開始の関係性ではなく、まず、会話のトピックをどのように選択したかについて検討していく^{xiv}。

千葉大学 3 人会話コーパスでは、収録冒頭において、参加者の 1 人が「トピックは〇〇（事前に提示されたトピック）です」と宣言するように指示されていると考えられる^{xv}。事例 2-1 の 01 行目は、この指示に従い C が事前に提示されたトピックの宣言を行った。このあと沈黙に続き、03 行目で、A が参加者の中で、提示されたトピックに関して誰が話を展開するかの問いかけがなされた。この問いかけに対して、06 行目で B はトピックに関する話があることを示し、また自身がトピックに関する語り手となることを立候補する。08 行目で A は B がトピックに関わる話をもっていることを確認し、11 行目で A は B が最初の語り手となること承認する。これを受けて、B は 12 行目で、提示されたトピックに従った語りを開始する。

^{xiv} 次ページに Fig.18 を再掲する。

^{xv} 伝・榎本(2013)による千葉大学 3 人会話コーパス内に、そのような指示がなされてことについては記載されていない。しかし、公開されている 12 会話データの内、11 会話データにおいて、トピックの宣言がなされている。そしてトピックの宣言がなされていない 1 会話データは、他の会話データとは様々な面で異なるものである(参加者たちが私服である、自前のペットボトルを持ち込んでいるなど)。このことから、異なる 1 会話データは、試験的に収録されたデータであると考えられる。よって、他の 11 会話データで観察された、このトピックの宣言は、実験的にデザインされたものとするのが妥当といえる。

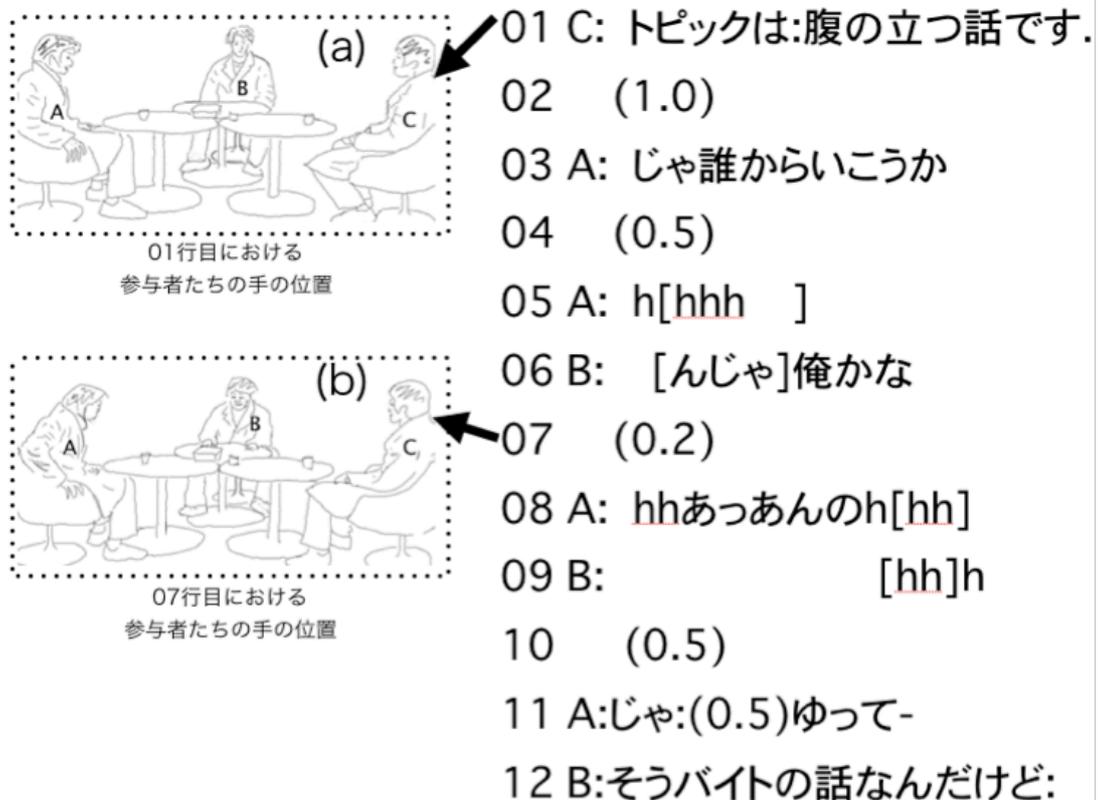


Fig. 18 事例 2-1 における発話と参加者たちの手の位置

同じく事例 3-3(Fig.24)においても 01 行目で C は研究者の指示に従い、トピックを宣言した。続けて、12 行目において A が、他の参加者に対して誰が話を展開するかを問いかける。これに対して、16 行目で B が C に視線を向けながら、自分より先にトピックに関する話をするように促す。これに対して C は 17 行目で、トピックに沿った話の詳細が接客関係のものであるかを尋ねる。この発話と重複して B が、C のバイト先の名前をあげる(18 行目)。このことは、C はトピックに従った話しが、バイト先に関して可能であるはずということを B が示したものであり、16 行目において B がなぜ C に対して、先に話すことを促したのかを理由説明するものといえる。さらに B は 23 行目において、バイト先において、“殴ろうと思ったくらいお客”と発話し、これはトピックに従い、より詳細な話の内容を C に対して提示している。より詳細な内容を提示することによって、B は C に話すことを促している。以上の促しを受けた結果、C は 26 行目

以降、トピックに従い、かつ B によって、より詳細化した内容に従う語りを行った。

01 C: トピックは(.)[腹の立つ話で]す

(02から11行目まで省略)

12 A: ° なんかありますか?>-どうぞどうぞ<°

13 (0.6)

14 B: あ::.

15 C: やあ::?

16 B: どうですか?-じゃ:先(0.3)

17 C: 接[客とし↓て]

18 B: [ユニクロ班]として

19 C: ¥接客として?¥

20 B: 接客として

21 (0.3)

22 C: 接客として:::そうだね:もう.

23 B: あ↑のも↓う殴ろうと思ったぐらいな客↓:(0.3)

[° はなししてこうぜ°]

24 C: [殴ろうと思った]客:

25 (0.7)

26 C: ん:::.....h>° なんだろうな:° <(0.8)¥いすぎて絞りきれないよう[な¥hhhh

27 B: .hhhhhhhh

28 (1.2)

29 C: だね:↑:(0.7)ら:↑あ(0.7)>ユニクロに別に限ったことじゃないんだけど<も:

Fig. 24 事例 3-3 におけるトランスクリプト^{xvi}

事例 2-1 と事例 3-3 において、参加者たちは、事前に研究者によって提示されたトピックに従った話を、誰が展開するかについて交渉を行っていた。どちらの断片においても、研究者の指示によるトピックの宣言のあとに、誰が話を展

^{xvi} 省略した 02 行目から 11 行目では、01 行目の C の発話の言い方に関して、笑いが起こっていた。

開するかという問いかけがなされる。この問いかけに対して、事例 2-1 では語り手となろうとする参加者自身が立候補するという語り手への自薦がなされ、問いかけを行った参加者が自薦を承認することにより、語り手が語りを展開し始める。事例 3-3 ではある参加者が他の参加者を語り手として推薦する形で、語り手の他薦がなされていた。そして推薦者は、語る内容をさらに詳述することによって、被推薦者に対して、推薦理由を示し、その理由を被推薦者が受け入れることによって、語りりが開始された。以上のように事例 2-1 と 3-3 は自薦と他薦の違いがあるものの、研究者の指示による宣言に沿った形で、参加者の中で問いかけ、推薦、推薦の承認という連続性が存在する。さらに、“トピックに従った話を展開するか否か”と“誰が話を展開するか”という2つの参加者たちが直面する課題のうち、後者のみを交渉することによって、自動的に前者が“トピックに従う話を行う”という形で解決されるという組織が存在することを示している。この2つの課題のうち、誰が話すのかを解決することで、トピックに従うか否かが決定するという組織は、トピックに従わない次の事例 3-4 の冒頭でも観察可能である。

6.5.2 教示されたトピックから外れて会話を展開する

事例 3-4(Fig. 25)では、01 行目の C のトピックの宣言につづいて、03 行目において B が教示されたトピック(大事件)には従わず異なるトピック(旅行の話)で、会話を展開することを提案する。このトピックの提案は、“旅行の話のつづき”であり、この収録以前になされた話を続けることを提案したものであった。この提案は、トピックを提示されたものから変更することを示すだけでなく、変更予定のトピックの語り手として、以前にそのトピックについて話していた参加者(10 行目より C であることが判明する)を推薦する形となっている。このことは断片 1, 2 で見てきたように、“誰が話を展開するか”という課題を解決することで“提示されたトピックに従うか否か”という課題に従わない形で、解決を図っていた。さらに、トピックの語り手として、他薦された C は、単に B からの他薦だけではなく、08 行目の A からの質問に応答するという形で、語りを開始している(10 行目)。このことも、事例 2-1 と事例 3-3 と同様に、課題を解決するために、参加者間で、交渉がなされていることを示している。

01 C: トピックは大事件です
 02 (0.3)
 03 B: 大事件ないので旅行の話のつ[づhきh]
 04 C: [hh h]
 05A: [ahhhh]hh .hh
 06 B: .hh
 07 (0.4)
 08 A: °う::ん° ↑ えじゃプラハと他は?
 09 (0.3)
 10 C: え::っとね中欧:の:ツアーにこうプラハだけっていう
 のがなくて:

Fig. 25 事例 3-4 におけるトランスクリプト

6.5.3 実験環境会話において、収録される活動という環境の利用

以上のように参加者たちは、“誰が何のトピックを展開するか”という問題の解決を行っていた。この問題は、研究者が与えた課題から、参加者によって取り出され、彼らが直面すべき問題として再構築されたものである。そして、この問題は“与えられたトピックに従うか／そして何を話すか”と“誰が話すのか”という 2 つに分けることもできる。しかし、参加者たちの振る舞いは、この 2 つは順番に解決し、会話を展開するのではない。まず研究者に指示されたトピックの宣言の発話を利用する形で、相互行為を展開し、事例 2-1, 3-3 のように推薦を募り、誰が話すかを定める、事例 3-4 のように話す内容を提示するというように、どちらかの問題の解決を図ることで、2 つの問題が同時に解決されるやり方を組織していた。

だが、事例 3-1, 3-2 の分析と並べた時に、この参加者たちの振る舞いは、今まさに自身が参加している活動を参加者間で位置づけている過程ということができるだろう。ただし、冒頭で記したように、千葉大学 3 人会話コーパスは、研究者による収録前の撮影理由の提示・カメラの位置の指摘などがなされてい

る可能性が高い。そのため、参加者たちが、今、これから参加している活動を、これまでの活動とどのように境界付けているかについて、検討することが難しい。

事例 3-1 と 3-2 の分析では、研究 1 で着目してきたように、立ち位置のような参加者たちの身体的位置関係の変化と彼らが参加する活動の変化が関わっている可能性を示唆した。同様に、再び、参加者たちの手の位置に着目したとき、事例 3-3 では、すべての参加者が両手を机の上に置いていた。事例 3-4 では、すべての参加者が両手を机の下に置いていた。一方で、研究 2 で分析したように、事例 2-1 では、以下のように来館者たちの手の位置が変更されていた(Fig.26)。

研究 2 における分析を踏まえ、翻ってみると、事例 3-3 と 3-4 や、事例 2-1 の前者の状態(Fig.18-(b))のように、すべての参加者が同じ手の位置であった。手の位置をあわせるということは、すべての参加者が同じ身分であることを示し合っている可能性がある。このことから、収録開始直後、参加者たちは参加している活動が、互いに同じ身分・役割であることを示し合わす必要がある。そのように示し合わせる必要がある活動として、“収録される”ことがあるのではないかと、考えることも可能だろう。

ただし、これは偶然の可能性は十二分にあるだろう。前述のように、活動が変わることへの参加者たちの交渉は、収録外ですでに終わっている可能性が高い。そのため、事例 3-1 や 3-2 と比して、事例 2-1, 3-3, 3-4 の中で、参加者たちによって“収録される”ことが前景化する可能性が極めて低いといえる。そのため、立ち位置も含めて、身体位置の組み合わせを変えることと、活動を変えることの関係性については、さらなる検討が必要である。だが、会話冒頭部分以外でしばしば背景となってしまう“収録される”ことを分析対象とするためには、立ち位置や手の位置の組み合わせといった、参加者にとって有標的ではないものを分析する必要があるのかもしれない。

最後に、千葉大学 3 人会話コーパスに基づいた分析をまとめておく。実験的に与えられた環境を、参加者間で新たな問題として再構築し、相互行為を展開するために利用していることを示すものであった。この結果は、たとえ実験的環境の中であっても、その中の相互行為は、参加者間がその場で秩序だった組織を組み立てていることを示したものであるといえる。この結果は、相互行為研究のために収録された実験的会話であっても、西阪(2001)が心理実験の観察を通して指摘したことと同様のことが指摘できたといえよう。

本章の目的は“収録される”ということが、参加者にとって、どのようなものかを検討することであった。そのような観点にたったとき、事例 3, 4, 5 の観察を通して、導き出された実験的に提示された環境を参加者が利用することは、どのように考えることができるのだろうか。

事例 3-1 と 3-2 で、分析した撮影機材を人々が参照するという振る舞いは、「撮影者／機材が相互行為に影響を与えた場面」として受け止められる可能性があることを指摘した。同様に、断片 3 から 5 にかけて分析した実験的環境を参加者が利用する振る舞いは「研究者／実験目的が相互行為に影響を与えた場面」として受け止められる可能性がある。しかし、この 2 つの記述の仕方は、撮影者／機材や研究者／実験目的などを、「日常的な相互行為」には本来存在しない不純物として扱っているといえる。そしてそのように考えることは、純粋な「日常的な相互行為」が存在する前提としているのではないだろうか。本章が複数の断片の分析を通して示してきたことは、撮影者／機材や研究者／実験目的も、参加者たちが相互行為の中で活動を位置づけることによって前景化するものであり、またそうした収録されることをめぐる様々な環境が相互行為を展開する資源として利用されていることであった。このような意味において、参加者らは今参加している活動を「実験である」と位置づけること、及び“実験的環境”を資源として利用することで相互行為を展開していたといえる。したがって、しばしば背景化する“収録される”ことを、参加者が資源として利用し、相互行為を展開している事例だったといえるだろう。

6.6 結論

本章は、異なる環境によって収録された 2 つの会話データの微細な分析を通して、参加者たちが参加する／している活動を“収録される”こととして位置づけるやり方を見てきた。そして“収録される”活動として位置づけることによって相互行為を展開する様々なやり方を見てきた。このやり方の中で、“収録される”ということは、参加者たちにとって、利用可能な資源となっているといえる。以下では再び、相互行為研究における、資源 (Goodwin, 2013) という概念にもとづいて、“収録されること”について考察を行う。

6.6.1 利用可能な資源としての“収録される”こと

第2章に詳述したが再度相互行為分析、及び Goodwin(2000; 2013)における資源の概念について再度触れておく。利用可能な資源とは、参与者たちが相互行為を展開するために使うかもしれない様々な資源のことを指す。Goodwin(2000)は、子供の遊びや考古学者の採掘作業場面の観察・分析を通して、我々の相互行為の中で産出される振る舞いがそれ単体で他者に理解されるのではないことを指摘した。我々が相互行為の中で産出する振る舞いは、音声発話の意味、統語的構造、イントネーションや身体の向き、視線、身振り・手の形といった参与者たちが産出するものだけではなく、遊びのために地面に描かれた円や採掘する土の色の違いといった参与者たちを取り巻く環境など、多様な記号論的資源との組合せによって理解することが可能となる。そのとき、適切な記号論的資源の組み合わせは、文脈的統合態という集合として組織される (Goodwin, 2000; 2013)。本章の分析は、これから、もしくは今行っている活動とは、“収録される活動である”ことが、参与者にとって記号論的資源の一つである可能性を示したものである。それ故、本章の分析は、収録冒頭部分にとどまったものの、それ以外の会話場面においても、常に顕在化しているわけではないが、会話の中で常に利用される可能性はある。従ってこうした資源は、収録されている以上は、利用可能であるし、説明なしにその環境を破棄するような逸脱行為は難しいと考えられる。確かに、急なアクシデントが起こって、収録環境から参加者がいなくなるという可能性がないわけではない。しかし、それは急なアクシデントという説明可能な理由があるからこそいなくなるという“逸脱”した行為が可能となるわけであり、その行為が逸脱とみなされないわけではない (Goffman, 1961)。このような意味で、参与者たちは“収録される活動”を行うための環境の中で、制約を受けているといえる。そして、これまでの分析で見えてきたように、単に制約を受けるのではなく、その環境を利用して、相互行為を展開しているのである。

6.6.2 “収録されること”を資源として捉えること

本章冒頭で述べたように、人々の会話などの相互行為を研究対象とするとき、収録された会話映像を分析することは切り離すことができないものとなっている

る。そして、これらの研究が分析対象とする収録された会話映像の中で、参加者たちは“収録されること”を、相互行為を展開するための資源として、様々なやり方で利用する可能性を本章の分析結果は示唆したといえる。以下は、本章の主筋からはやや外れるが、“収録される”を利用可能な資源と考えることが、（特に心理学・認知科学領域における）相互行為研究に対してどのような意味を持ちうるのか議論する。

本章で扱った会話データは、すでに述べたように、様々な面で異なる（例えば、人々が座っているか／立っているか、同性間の会話か／異性も含めた会話か、など）。それらの違いの中でも、この2つの会話データを、本章の中でこれまですでに言及してきたよう、日常的／実験的、もしくはフィールド／実験室という違いによって表現することができる。ただし、冒頭で触れたように、2つのデータが、そのような対立構造で簡単に分類できるわけではなく、本章は、比較検討を行うことが目的でもないとしてきた。

研究対象となるデータが実験的に収集・収録されたものか否かという区別が重要となるのは、主に心理学や認知科学の領域である。心理学において、因果関係に基づく記述を与えることに主眼が置かれた実験研究で取りこぼした現象を拾い上げるために、90年代以降、質的研究の重要性が指摘されてきた。この質的研究の特徴の一つとしては、単純な因果関係では記述できない、相互反動的な現象を見出すためにフィールド研究の重要性が主張されてきた（やまだ、2007a）。また認知科学においても、フィールド研究を特集した学会誌が発刊された（伝・諏訪・藤井、2015）。フィールド研究と打ち出すことは、認知科学の領域が、これまで扱うことができなかつた現象や方法論を包含可能とする方向性を示すものである。このとき、伝ら（2015）は、フィールド研究を“研究者が介在しなくても起こる状況の相互行為を対象としたもの”と定義づけている。この定義は、当然既存の実験研究との対比を強く想定したものにみえる。確かに、彼らの定義に従うならば、本研究で扱ってきたような会話データを、フィールド／実験として区別することも可能である。

一方で、どちらの会話データにおいても相互行為上の資源として“収録されること”を利用されていることは、フィールド／実験に関わらず人々が制約された環境の中で相互行為を行い、その制約を利用し相互行為を展開していると考えられる。千葉大学3人会話データのように、実験的に収録された会話における環境の制約は明確である。このような会話がなされる環境は、会

話をする場所や会話目的・内容といった点で研究者によって構築され、制約されたものである。一方、未来館 SC データのように、SC の社会的実践を収録した会話においても、会話環境は制約されているといえる。このときの制約とは、SC が展示物を来館者に解説という活動へ志向していることから来る制約である。この活動の中で、参加者たちは解説活動以外のことを行うことも可能であるが、それは逸脱とみなされるといえ、参加者たちの振る舞いは制約されているといえる。また同時に、その活動が収録されていることによって、解説活動からの逸脱も当然ながら、収録スペースから出ようとすることや、カメラの範囲外にしようとするこゝも、逸脱とみなされると考えられ、これも参加者たちの環境を制約していると考えられる。しかし、これらの制約というのは、参加者たちの行動に制限を与えているというより、むしろ相互行為を展開するための資源となっている。以上のように、本章の分析結果は、フィールド／実験という違いに関わらず、収録された映像データの中で、参加者たちは様々な形で“収録される”という制約を受けながらも、その制約を資源として利用していることを指摘したものと見える。

6.6.3 相互行為における収録される活動と身体配置

本章の分析と考察を通して、収録された会話データの冒頭で、今行っている／これから行っている活動を、場面ごとにそれぞれのやり方で、収録されたものとして人々が取り扱っていることが示された。このことは、参加者たちは収録以前の活動、収録される活動、さらに会話内で行われる活動（展示物解説やストーリーテリングなど）の3つを、それぞれ異なるものとして取扱い、相互行為を展開していることを示唆している。そして本章で取り扱った事例の中で、人々は収録される活動が開始されるに伴って、互いの立ち位置を同じ状態とするように調整していることや、手の位置を同じ位置にしようとしている可能性が示唆された。つまり収録される以前の活動から異なる活動を始め、その活動を“収録される”ものとして位置づけるとき、人々は互いの状態が同じ身体配置パターンを利用していると考えられる。もちろん、収録される以前の活動が、どのような活動であったか観察・分析できない以上、収録される活動と紐付いているとは必ずしもいえない。また、手の位置についての議論は、収録開始前の手の位置については分析対象とはなっておらず、開始直後の手の位置の組み合わせ、およびそこからの変化のみで議論を行ってきた。しかし、事例 3-1 や

3-2 で見てきたように、3つの活動の境界で観察される人々の立ち位置を調整する振る舞いは、それぞれの活動と身体配置のパターンが結びついていることを示唆しているといえる。

特に、収録される活動と人々が同じ状態となる身体配置パターンと結びついているということは、人々の活動が以下のような階層構造をもっている可能性を示唆しているといえるだろう。身体配置は、すべての人が同じ状態のパターンと、一人が異なるパターンの2つのパターンからなる。そして、形式上、前者のパターンは無標、後者は有標なものであり、後者は前者から変化する形で現れるものであった。そして、本章の分析は、収録される活動が前者のパターンと結びつくことを示していた。そして、ある活動を収録されるものとして位置づけられたことは、次の展示物解説やストーリーテリングなどの他の活動が開始されたときに、無関係なものとなるとは考えにくい。むしろ、その後の活動は、収録されていることを基底としつつも、独自の活動に人々は従事していると考えられる。このことをより詳細に検討するためには、独自の活動に従事しているときに、人々が収録されていることをどのように利用しているのかを検討し、実際に収録されていることが活動の基底となっていることを示さなければならない。しかしながら、研究1, 2で示してきた身体配置の2つのパターンが雑談とストーリーテリングという参与者たちの役割の違う活動に結びついているだけではなく、その活動は、身体配置のパターンの形式がもつと同様に、階層構造をもっていることを研究3は示唆したといえる。

7. 総合考察

本研究は人々が活動をいかに空間に位置づけているかについて検討を行ってきた。まず、Kendon(1990)は、会話は人と人が協同して行う活動であり、立ち位置の陣形によって空間に位置づけらる。その陣形と維持されるシステムは F 陣形と呼称される。

研究 1 では、さらに複数の活動によって構成される単一の会話の中で、活動の変化によって立ち位置の陣形が変化することを示した。さらに、活動の違いとは、参加者の役割の変化である。そして、陣形も、それに応じて変化する。すなわち、参加者が平等の役割のときは、所謂 F 陣形のように参加者たちの立ち位置間に差異を見出すことができないような陣形となり、対して参加者の間で 1 人だけ他とは異なる役割となっている状態では、異なる役割の参加者が、他の参加者とは異なる位置と見なすことができる陣形が形成される。以上のことから、参加者の役割の変化によって、活動が変化するとき、それを反映するように、人々は陣形を変化させることが示された。研究 2 では、座位会話における身体配置を検討した。その中で、立ち位置の代替として手の位置に着目した。結果、立ち位置と同様に、活動の変化に応じて、参加者たちは手の位置の組み合わせのパターンを変えていたことが見出された。第三の研究では、“収録される”という活動が、発話・身体配置を利用しながら、どのように位置づけられるのかを明らかにした。さらに、位置づけられた活動自体を利用しながら、相互行為を展開していることを明らかにした。

研究 1, 研究 2 で取り扱った現象のみに着目すると以下のようにまとめることができる。即ち、研究 1 は、フィールド会話における立ち位置、そして参加者間の雑談から解説場面への遷移を対象とし、F 陣形と H 陣形があることを示した。研究 2 は、実験室における手の位置、そして雑談から特定のトピックについての語りへの遷移を対象とし、手の位置の組み合わせに AS パターンと OD パターンがあることを示した(Fig. 26)。

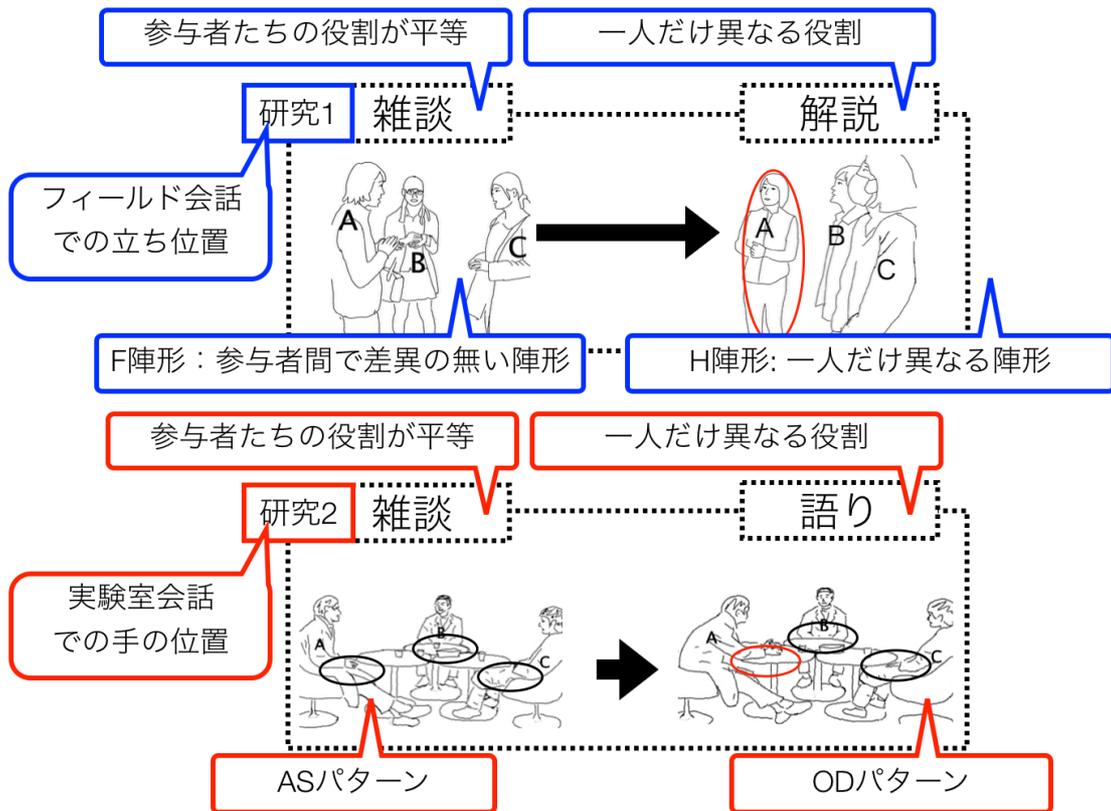


Fig. 26 本研究における研究成果 1

これらの研究結果は、Kendon の F 陣形研究を様々な面で拡張したものである。Kendon(1990)の F 陣形研究は、単一の会話が維持される限り、1つの F 陣形が維持されることを示したものであった。対して、研究 1 では、複数の活動が含まれ遷移する／会話内での参加者の役割が変化する単一の会話の中で、その違いを反映するために参加者たちが陣形を変化させる可能性を示唆した。また Kendon の F 陣形研究や、それに連なる後続の研究(Mondada, 2009; 星ら, 2009)は立位会話のみを対象としてきた。対して、研究 2 では座位会話を対象とし、手の位置に着目した。そして、立ち位置による陣形の代替として手の位置の組み合わせが利用される可能性について指摘した。さらに、研究 2 の身体配置の変化は、周囲の環境や参加者の人数の変化といった他の要因によるものではなく、単に会話内の活動の変化に基づくものであるといえる(Fig.27)。

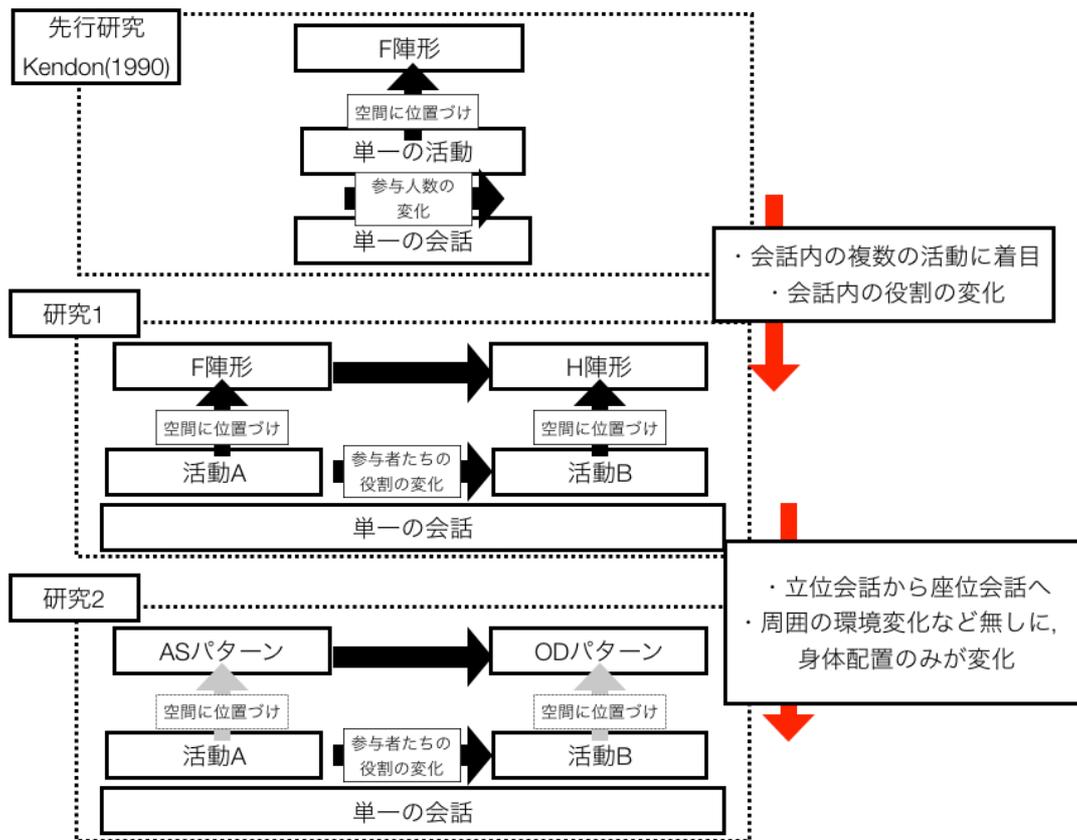


Fig. 27 本研究における研究成果 2

本研究は Kendon の構造的アプローチに基づき、相互行為の中の身体に関わる現象を対象とし、相互行為の構造を明らかにすることを目的としてきた。本研究で明らかにしてきた構造とは、以下の 2 つである。すなわち、(i)会話内で身体配置による無標状態と有標状態という対比構造が存在すること、(ii)会話という相互行為は複数の活動によって構成されるという多層的構造が存在することである。

7.1 身体配置に内包される対比構造

研究 1 と研究 2 で示されたように、身体配置には参加者間の身体位置に差異を見出すことができないパターン(立ち位置による F 陣形や手の位置による AS パターン)と、特定の参加者が他とは区別可能なパターン(立ち位置による H 陣形や手の位置による OD パターン)が存在する。このパターンの違いとは、様々

な参与者たちの特性や周囲の物理的環境、具体的な活動内容の違いによって、身体配置が変化することを指すだけではなく、より一般的な身体配置の違いであると考えられる。すなわち、無標状態と有標状態の対比構造である。

二項対立のものを区別するために、標識(maker)の有無によって、有標(marked)と無標(unmarked)という用語を用いたのは構造主義言語学のプラハ学派が端緒とされる(大橋, 2010)。相互行為研究においても、有標・無標という用語は、しばしば利用される(例えば、ある動作が停滞している、発話と共起していることから、その動作が他の動作に対して有標と記述される(細馬, 2015)。本研究でも H 陣形や OD パターンといった特定の参与者が他とは区別可能なパターンが、F 陣形や AS パターンに対して、異なる特徴をもったものとして記述可能である。この2つのパターンの前者を有標状態、後者を無標状態とした対比構造として捉えることが可能なのか、そして対比構造を見出すことの意義について議論を行っていく。

研究1, 2を通して F 陣形・AS パターンといった参与者たちの身体位置が同じ状態となる身体配置のパターンは、雑談などの参与者が平等な会話に対応し、H 陣形・OD パターンといった特定の参与者の位置のみが異なる身体配置のパターンは、展示物解説や語りといった特定の参与者が他とは異なる役割を持った会話に対応していた。そして、この2つの身体配置のパターンは、個々に独立しているわけではない。つまり、参与者たちが身体配置を利用できることから、2つのパターン間に対比構造があると想定できる。即ち、一人だけ違う身体配置のパターンと理解できるのは、参与者の身体配置が同じ状態のパターンの存在に依拠し、そして、同じ状態であることも、違うパターンの存在によって理解可能になる(Fig. 28)。

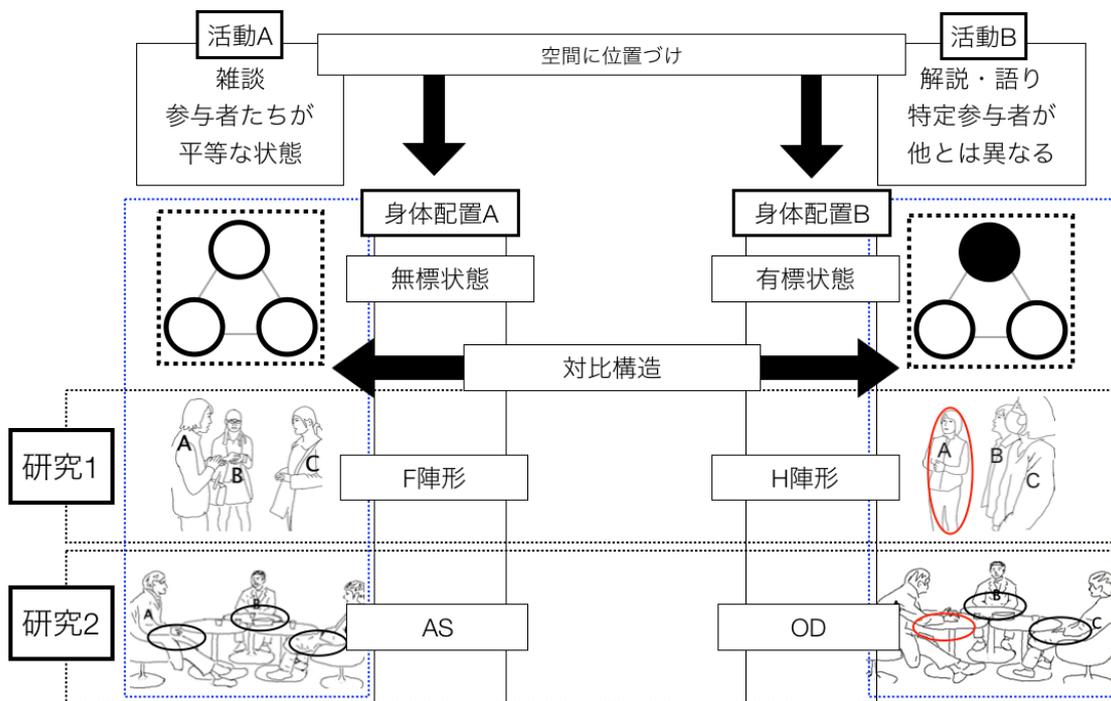


Fig. 28 身体配置における有標・無標の対比構造

以上のような身体配置パターンには対比構造が存在することを本研究は主張する。より詳細に検討するために、2章に記した Goodwin(2013)らに代表される相互行為分析の知見をもう一度振り返る。人々の相互行為とは、先行する発話、身振り手振りなどの身体に関わる現象や人々を取り巻く物理的環境といった様々なモノに取り囲まれて行われる。そのモノの中から、参加者たちは利用可能な資源を取り出し、相互行為を展開する。つまり Goodwin(2013)の提唱した概念を適用するならば、取り囲むモノとは基体(substate)であり、その中から利用可能な資源として記号論的資源(semiotic resources)を取り出す。そして、記号論的資源の組み合わせによって文脈的統合態(contextual configuration)が構成される。さらにこの文脈布置は相互行為が展開する中で、基体となり、記号論的資源として利用されるのである。

本研究の分析の多くは、相互行為分析の知見に強く依拠するものである。研究1において、H陣形と呼称される状態が参加者にとって利用可能なものであることや、ODパターンと呼称される手の位置の組み合わせが、参加者にとって利用可能なことは、その状態となった後に、参加者たちがどのような振る舞い

をしたのかという連鎖的構造の記述に依拠するものである。そして、Goodwinの提示する枠組の中で、身体配置は基体の一つであり、それが参与者によって適切なものとして選択されたとき記号論的資源となるのである。研究2の事例2を振り返って見るならば、一人だけ机の上に手を置いている状態という基体が、参与者たちによって記号論的資源として選択される。この手を机の上に置いているという資源は、他の資源（発話など）と組み合わせることによって、机の上に手を置いた特異な参与者が、語り手となることを規範とする文脈的布置を構築するのである(研究2と3で見てきたように、机の上に手を置いただけで、語り手となるわけではない)。そして、この捉え方は先行する相互行為分析の知見に反するものではない。先行研究の多くで示唆されていたように、語りがなされる前に、語り手となる参与者が、特徴的な振る舞い（手を机の上にあげる、今まで行っていた振る舞いを中断するなど）を行うことがあることが観察されている(Goodwin, 1984; Streeck & Heritage, 1992)。つまり相互行為分析の知見に基づくならば、H陣形やODパターンは、参与者にとって利用可能な資源である。そして、先の細馬(2015)の記述に基づくならば、参与者たちが他の状態と区別しているという意味で、有標な状態と捉えることが可能であろう。

そして、本研究の分析が示してきたように、身体配置のパターンは連鎖的組織を通して形成されており、他の資源（発話や身振り、視線など）と同様に、参与者にとって利用可能なものとなっている。しかし、これらの身体配置は、何に対して有標なのだろうか。本研究では、F陣形やASパターンといった身体配置のパターンが無標状態として存在すると考える。F陣形やASパターンの特徴は、参与者たちが互いに同じ状態と記述可能な点である。つまり、参与者たちが互いの身体を通して、対称性を維持した状態であるといえる。この身体の対称性が崩れたとき、すなわちH陣形やODパターンという身体配置になるとき、その崩れは有標なものとなり、参与者たちにとって利用可能となるのである。この考えは、単なる仮説に留まるものではない。例えば、研究1におけるF陣形の状態で展示物解説を行った事例1-2では、SCが解説となるような内容を巧みに調整した。さらに、研究2の事例2-2では、机の上に手を置いた参与者が机の下に戻した。これらの事例における参与者の振る舞いは、現在の身体配置が有標状態であること、さらにそれがどんなどんな無標状態に対して有標であるかを理解していることを示唆するものであるといえる。

これまでの相互行為分析では、参与者たちが、どのような振る舞いを利用可

能な資源とし、活動をどのように達成しているかを明らかにしてきた。その中で、視線、身振り手振り、周囲の環境などの基体はすべて平等なものであり、参加者が、活動のために適切に利用したものだけが記号論的資源として選択されるとされてきた。だが、このことは相互行為分析が対象としえるのは、参加者たちが適切に利用している資源であり、それは資源が有標状態となっている場面のみを記述することしかできないといえるのではないだろうか。

当然、相互行為分析の目的から考えるならば、参加者たちが利用している資源や無標状態を分析の対象といえることに価値があるとはいえない。しかしながら、Goodwin(2013)は、発話という基体が記号論的資源として利用されていることを記述するとき、文法構造や音韻構造の重要性を指摘した。このことは、我々の周囲を取り囲む基体自体が内包する構造が、参加者にとって重要であることを示している。例えば、発話は文法構造や音韻構造といったものを内包する。同時に、その構造の中で発話とはどのようなものを位置づけられる。よって、相互行為分析における記述も、その振る舞いが内包する構造に依拠していると考えられる。

発話と同様に、相互行為における身体に関わる現象も、その中で参加者にとって利用可能な資源となることは、対となる無標状態が存在する可能性は十分にありえるだろう(例えば、発話と共起した身振りがジェスチャーとなるのは、身振りが発話と共起しないことが無標状態であることへの対として有標であり、ある人へ視線を向けることは、人に視線を向けていないことが無標状態であることの対として有標である、など)。本研究は、身体配置のパターンが利用可能な資源となることを示した。そして、身体配置だけに焦点を当てた分析を通して、その無標／有標の対比構造が存在することについて議論してきた。このことは相互行為における身体に関わる現象が、参加者にとって利用可能となるためには、どのような構造に依拠しているかを示唆したものである。

本研究の分析で示してきたように、身体配置には、この対比構造が常に内包されており、それは、(参加者にとって)利用可能となる身体に関わる現象が、内包されている可能性があるものである。そして、身体配置がもつ対比構造の中で、有標状態は相互行為の中の連鎖的構造を記述することによって、示された。また、相互行為分析による記述の多くは、有標状態を記述しているといえる。本研究が示してきたように無標状態(F陣形やASパターン)は、その崩れが生じたときに、明らかになるものである。しかし、多くの無標状態は(崩れ

ない状態では) 記述することが困難である。だが、今後我々が日常的に行っている相互行為の検討を続けていく一つの方向性として、より無標状態へ着目することで、さらに相互行為研究を発展させることができるかもしれない。例えば、これまで扱われてきた相互行為における有標状態が、どのように有標であり、また一連の会話／活動の中で、その状態はどのように位置づけられているかを再考するためには、無標状態を考える必要があるだろう。

また、本研究で扱ってきた相互行為場面は、同じような身体を持つ人々によってなされるものであった(本研究で取り扱った未来館 SC 会話コーパスも、千葉大学 3 人会話コーパスも成人同士の会話である)。このことは、対比構造における無標状態を考える上で、極めて重要である。身体配置が無標状態となることとは、参加者が自身の身体を通して他者の身体と対称の状態であることを維持している状態である(つまり、互いの操作領域を共有する位置に立つ、手の位置を同じ位置にするといったことである)。参加者同士が皆同じような身体をもっているとき、無標状態となるように、互いの身体位置を調整し、身体配置を構築することは、参加者たちは“意図”せず、容易になしえるものであると予想される。特に、参加者同士が同じ身体を持っていると想定するならば、相互行為の相手が自分と同様の操作領域を持つと参加者が想定し、それを共有することは、ほぼ自発的になされることになるだろう。自発的に F 陣形が構築可能であるからこそ、そこから外れた H 陣形が有標なものとして機能しうるともいえる。しかし、相互行為の相手が、自身とは異なる身体をもつとき(所謂‘健常の成人’に対して子供や老人、身体に障がいをもつ人、もしくは人以外のロボットやアバターなど)、他者のもつ操作領域を想定することは困難になる。このようなとき、参加者たちが、F 陣形といった無標状態をどのように構築しえるのか、という問いは相互行為研究において重要なものといえ、多様な人々が参与する相互行為を観察し、分析することは今後の大きな課題といえる。

この問いを本研究で示した身体配置と、それが内包する対比構造の範疇で考えるならば、本研究の主張とは、単に同じような身体をもつ参加者間のみで適用可能な議論と考えるべきだろうか。そして、この問いは、相互行為における身体配置(立ち位置にせよ、手の位置にせよ)が生得的な構造なのか、文化慣習によるものなのか、という問いに繋がるものである。まず、身体配置のパターンが生得的なものと仮定する。Kendon(1990; 2010)の提示した操作領域、そして操作領域を共有させる形で構築される F 陣形は、生得的であるという仮定

に反するものではない。会話という活動のための操作領域の広がりも、人の音声を聞くことができる範囲(よって極端に離れる場所に相手が立つことは推奨されない)かつ、相手を視認できる視野の範囲(よって、相手が自分の背中の後ろにいることは推奨されない)の中であると考えることができる。つまり、人々が集まって会話をするとき、もっとも自然に身体が配置されたのが F 陣形であると考えることができる。一方で、本研究で検討した手の位置は、生得的であるという仮定に反するものである。手を机の上に置くか、下に置くかという差異は、立ち位置のように参加者が他者の発話を聞くことができる範囲や視認できる範囲とは、関係がない。むしろ、人の話を聞くときには、膝の上に手を置くほうがよいといったマナーに関連するものである。このことから、一人だけ異なる手の位置となったものが話し手となり、他が聞き手となるのは、身体配置のパターンが文化慣習によるものであるという仮定を支持するものである。

では、立ち位置と手の位置による身体配置とは、それぞれ生得的／文化慣習によって形成されたパターンに過ぎないのだろうか。まず、立ち位置による身体配置が、生得的ではない可能性を検討する。ここまでの議論は、会話に参加する人々が同じような身体を持つことを前提としたものであった。しかしながら、本研究で分析を行った会話の参加者たちは、当然であるが、まったく同じ身体を持っているわけではない。そして、先行研究で検討されてきた会話事例の参加者たちも同様であろう。それにも関わらず、参加者たちは F 陣形を形成する。そして、本研究の序論で述べたように、F 陣形とは特定の形状を指すものではない。相互行為の中で、参加者間の調整によって形成されるものである。以上のことから、立ち位置による身体配置が、必ずしも生得的な身体能力にのみ依拠して形成されているわけではないといえる。対して、手の位置の組み合わせのパターンが、文化慣習にのみ依拠しているかを検討していく。仮に、完全に文化慣習によって、パターンが決定しているならば、語りを行う前に語り手は机の上に手を置く、聞き手は机の下に置くというパターンのみが観察されるはずである。しかし、研究 2 の量的検討が示したように、語り手が机の下に手を置くパターンも存在し、同時に研究 2 の事例 2-2 で示されたように、語り手とならない参加者が机の上に手を置くことも観察される。このことから、完全に手の位置のパターンが文化慣習に依拠したものと言い切ることは困難である。

以上の議論からも、立ち位置・手の位置による身体配置、そのパターンが、

生得的／文化慣習によるものと断定するのは困難である。前述のように、より多様な身体をもった人／人以外のものとの相互行為を分析することによって、どちらによるものか結論づけることができるかもしれない。しかし、本研究の主張は、身体配置のパターンというものは相互行為の中で、参与者たちによって調整可能なものであり、その調整の中で、利用可能な資源となっていると主張したい。このことは立ち位置による陣形が、生得的能力によって自然と決まる可能性が高いこと、または手の位置が文化慣習に従おうとして、意図的に移動する可能性が高いことを否定するわけではない。相互行為に対する研究が常に批判してきたように、日常的な相互行為というのは、参与者がもつ生得的能力や外在的な基準によって営まれているわけではない(谷, 1997; 木村, 2006)。むしろ相互行為を展開する中で、身体配置のもつパターンやそれが内包する対比構造を、参与者の中で顕在化させ、利用していると考えらるべきだろう。

7.2 身体配置の多層的構造と相互行為のための基盤を構築すること

これまでの分析は、相互行為が展開される中で、身体配置の対比構造が顕在化され、利用されていることを示したものであった。しかしながら、この対比構造は、参与者にとって単に利用可能な資源となっているだけでなく、相互行為の基盤となりえるものと考えらる。

研究1, 2を通してF陣形・ASパターンといった参与者たちの身体位置が同じ状態となる無標な身体配置のパターンは、雑談などの参与者の平等な会話に対応し、H陣形・ODパターンといった特定の参与者の位置のみが異なる有標な身体配置パターンは、語りなど特定の参与者が先導的な会話に対応していることが示された。そして、この2つのパターンは互いの存在に依拠した対比構造であることを、前節では、議論してきた。しかし、研究3の分析は、“収録される”という会話を有標なものとして位置づけるため、それ以前の会話との境界をつくりあげ、その際に、身体配置の変化を利用し、“収録される”以前の活動を無標なもの、“収録される”ことを有標なものとしていた。このとき、収録される以前の活動は立ち消えるものなのだろうか。研究3の考察を通して、収録される以前の活動は立ち消えるのではなく、それ以降の活動の基盤となっており、有標な活動（ここでは収録される活動）が終わったとき、立ち戻れる活動となっている可能性を指摘した。このことから、身体配置の無標状態のパター

ン (F 陣形や AS パターン) と有標状態のパターン (H 陣形や OD パターン) は単に、並行な対比構造というよりも、無標状態を基盤とし、その上に有標状態が作られるという階層構造をもっていると考えられる。以下、身体配置のパターンが階層構造を含むものである可能性と、身体配置が相互行為の基盤となる可能性について議論していく。

我々は、日常的に他者と協同で何かしらの活動を行う。一人では動かさないモノを誰かと協力して運ぶといった達成されるべき目的のある作業を、私たちは日常的に見かけ、そして行うことも多々あるだろう。この作業は、2人以上で行い、その間で、互いに作用を及ぼし合っているという意味で、協同して荷物を運ぶという活動は相互行為 (interaction) と呼ぶことができるだろう。このような相互行為は、参与者たちは、互いの振る舞いが、互いに影響を与えているものとして考えることができる(木村, 2006)。木村(2006)は互いの振る舞いが、互いに影響を与え合うことによって、共在の枠組みが構築されると主張している。会話という相互行為では、発話、視線、身振り手振り、そして立ち位置の調整といった参与者間の振る舞いの連鎖が観察可能である。この振る舞いの連鎖は、参与者たちが互いに影響を与えているといえるだろう。では、すべての振る舞いの連鎖が共在の枠組みをつくりあげるものなのだろうか。もしくは、これらの連鎖は階層性を持ち得ないものなのだろうか。

身体配置とは、活動を空間に位置づけるものであった(Kendon, 1990)。つまり F 陣形や一定の手の位置の配置パターンを形成するように、参与者たちが互いの身体位置を調整(つまり相互に影響を与え合う)ことによって、今まきに行おうとしている活動が会話として位置づけられるのである。このことは、会話という活動内で起こる他の振る舞いの連鎖に対して、より大きな枠組を作り上げるものといえるだろう。

そして、身体配置がもつ対比構造によって、会話内に含まれる複数の活動は、区別される。無標状態の身体配置によって位置づけられた活動と有標状態の身体配置によって位置づけられる活動の2つが存在する。先程も議論したように、有標状態であることは、無標状態と対になる形でのみ顕在化されうる。つまり有標状態に対して、無標状態と想定されるものが、先立って存在する必要があるのだ。このことから、ある活動は、まず無標状態として位置づけられる。これは、F 陣形や AS パターンによって位置づけられるものであり、会話であるという大きな枠組が作られるといえるだろう。そして、それに対して展示物解説、

語り，さらには収録されることといった活動が，有標状態として位置づけられる．以上のように，身体配置，そして内包される対比構造によって，我々の日常的な相互行為は，複数の層をもつ構造を見出すことができる．

重要なのは，F 陣形や AS パターンのような手の位置といった特定の形状が，会話開始時に出現するということではない（これらの形状は，人の生得的な特徴／文化慣習によって，無標状態となりやすい性質をもつのかもしれない）．特に研究 3 が示してきたことは，相互行為の開始時の状態は，しばしば参与者たちにとって無標状態として位置づけられ，相互行為が展開され，活動が変化するとき，その無標状態を対にする形で，ある活動を有標状態として位置づけていることを明らかにした．

8. 結論

本研究では、収録された会話映像データを対象に分析・検討を行った。分析の中では、特に手の位置、立ち位置といった人々の身体位置、そしてその組み合わせの身体配置に焦点を当てた。結果、多様な会話の中で、身体配置は2つのパターンをもつ。1つのパターンは、すべての会話参加者の身体位置が同じ状態である。もう1つのパターンは特定の参加者のみが他者と異なる身体位置となる状態である。この2つのパターンは、会話の構造を反映するものであった。

そして、この2つのパターンは配置をつくりあげる身体の特長や反映する会話構造から、前者は無標状態、後者は有標状態といえるものであった。この2つの状態は階層構造をもっており、会話という相互行為を展開するための基盤構築の一端を担っていると考えられる。以上のように本研究は Kendon(1990)の F 陣形の研究を様々な面で拡張するものである。そして、いずれかの学術領域に位置するというよりも、様々な領域の知見を踏まえた上で新たな知見を提供することを目的としたものであった。以下、それぞれの流れ特に情報学と相互行為研究に対して、本研究の成果がどのように位置づけられ、どのような点が貢献するかを見ていく。そして、最後に本研究の示唆に基づき、今後身体に関わる現象について、どのような観点での研究を展開すべきかについて述べる。

8.1 情報学に対する貢献

会話を人と人とのもっとも素朴な情報のやり取りと考えるならば、身体配置を通して、会話の基盤構築の一端を明らかにすることは、情報学の基礎に貢献しているといえる。

また、身体配置でつくりあげる2つのパターンが、会話内活動の変化と関わることを示したことは、ロボットやアバターなどの人工物を、どのように人々の会話に自然に参加させるかの、システムの構築に対して示唆を与えるものとなるだろう。すでに Kendon(1990)の示した F 陣形のコンセプトに従ったロボット、アバターの開発がなされつつあり(星ら, 2001)、本研究で示した H 陣形のコンセプトも含めることによって、または座位会話場面において手の位置のパターンを調整することによって、より円滑な人とロボット間のコミュニケーション

ンが可能となるだろう。しかしながら、F 陣形や H 陣形を単なる立ち位置によって作られる形状と考え、ロボットやアバターのシステムに埋め込むのは危険である。さらに、本研究で示した無標／有標という考え方からするならば、ロボット・アバターは、その存在から人とは異なる有標なものとみなされるだろう。このとき、このような存在と互いに同じものとして扱える F 陣形や AS パターンのような無標状態をつくれるかを検討することは今後の課題となりえるだろう。

また本研究で示した相互行為内の有標／無標構造という概念は、人とエージェントの間の相互行為をデザインするヒューマンエージェントインタラクション(Human-Agent-Interaction, 以下 HAI)のコンセプトに対して強い親和性をもっているといえる。HAI では、エージェントが人の発話のような複雑なものではなく、ピープ音や LED による発光といったシンプルなものの方が、より円滑かつ有意に人との間で相互行為が可能であることが指摘されている(山田, 2009; 山田ら, 2013; 小林・山田, 2006)。この知見は、ピープ音や LED による発光といったシンプルなものは、複雑な発話を産出させるよりも、それを発信していない状態に対して有標であることを、人が明確に見出すこと可能となっていることを示唆しているといえる。対比構造の中の無標状態は、人と人の相互行為においては、その特性上、隠された状態となりがちである。しかし、人とロボット／エージェントの間に相互行為を達成するためには、本研究の示唆する身体配置の内包する対比構造のように、その間でなされるやり取りが、何かしらの無標状態の対となる対比構造を組み込む必要があると考えられる。

8.2 相互行為研究に対する貢献

相互行為研究に対する貢献としては、相互行為の利用可能な資源の分析対象を、身体位置まで拡張した点、そして無標／有標という対比構造が相互行為研究において有益である可能性を示したという 2 点をあげることができる。ここまで見てきたように、相互行為研究は、発話を対象としたものから、視線、表情、そして身振り手振りへと、相互行為の中で参与者たちが利用する資源の分析対象を(様々な理由によって)拡張してきた。本研究は、立ち位置や手の位置といった身体位置が組み合わさることによって、利用可能な資源となっていることを示したものである。これまで、利用可能な資源とされてきた視線や

身振り手振りは、能動的に産出されるものであった。対して、必ずしも能動的に産出されているわけではない立ち位置や手の位置が、ある種の条件下では資源となりうることを示したことは、相互行為研究において、人々の何を観察対象とするかについて新たな視座を提供するものとなるだろう。

これまでの相互行為研究の多くは、有標状態を分析対象としてきた。例えば、身体に関わる現象では、身振り手振りを対象とし、それが起きていない状態の身体は分析対象の枠外であった。また、会話内で分析の対象としえるのも、有標的状态、もっともミクロには会話内で何かのトラブルが発生し、それが修復されている連鎖部分や、より大きく見るならば、会話内で社会的に有標な活動（例えば展示物解説場面といった名付けが可能なもの）を対象としてきた。そして、それ以外の部分は **Small talk** や雑談といったようなカテゴリーで分類されつつも、参加者が何を志向し、会話を構成しているのかが検討困難なことから、大きな枠組みで検討されてこなかった(井出・村田, 2016)。

一方で、本研究では、能動的に産出されることが多い、発話、視線、身振り手振りに対して、身体位置を対象としたこと、さらに語りや展示物解説といった活動に着目しつつも、その基底(base)となる収録される以前の活動などに着目したことなど、本研究は有標なものに着目をしつつも、その前提となりうる無標状態があることを指摘してきた。特に、手の位置を対象とした研究2は、質的検討では、有標状態を分析しつつ、量的検討によって傾向を示すことで、有標状態の背後に存在する無標状態の可能性を示したものであり、今後の相互行為研究の方針に一定の示唆を与えるものといえる。

8.3 身体に関わる現象研究の今後

本研究は、身体が作り出す有標／無標状態という対比構造、そして階層構造を相互行為の中で作り出すことを示したものであった。この構造を作り上げるためには、参加者が互いの身体が同じ／異なるということを互いに示し、理解することが重要である。しかしながら本研究の分析では、参加者たちがほぼ同等な身体、または身体能力をもった人々と想定した上で、分析・議論を重ねてきた。例えば、F 陣形とは、ある人が会話相手の姿を見ることができ、相手の話を聞くことができる位置、かつ相手も自分の姿を見ることができ、自分の話を聞くことができると推測される位置に立つことによって形成されるものであった。このときの会話参加者は、視力・聴力が自分と会話相手でほぼ同じとき、

本研究で取り扱ったような F 陣形を形成するといえる。また、机の上に手を置く／下げるといふ振る舞いによってパターンを形成し、資源として利用するためには、会話相手が手の上げ下げに十分な能力をもっている必要があると考えられる。これらの議論は、我々の相互行為における身体の利用は、人々の身体の持つ生態学的特性に制約を受けているという考え方である。勿論、手の位置のパターンなどは、生態学的制約ではなく、文化慣習的に形成されている可能性もあり、今後さらなる検討が必要である。その検討のためには、より多様な身体を持つ人々が参与した会話を検討することが必要であろう。

我々の日常会話は、必ずしも同じような身体、身体能力をもった相手とのみならずされるわけではない。子供と大人の会話や、高齢者の入った会話、さらには何らかの障がいを持った人々との会話は、多様な身体の参与した会話としてわかりやすい例といえる。このような互いに異なる状態から、人々はどのように無標状態を作り上げるのか、そのやり方を検討することによって、我々の相互行為における身体が、どのように利用されているかをさらに検討していくことができるだろう。

参考文献

- 秋田 摩紀 (2004). 視線の攻防、視線の快樂: 近代日本の演説指南書にみる知識人の「身振り」 近代教育フォーラム, 13, 211-225.
- Birdwhistell, R. L. (1970). *Kinesics and Context: Essays on Body Motion Communication*. University of Pennsylvania Press.
- 坊農真弓(2008). 日本語会話における言語・非言語表現の動的構造に関する研究 ひつじ書房.
- 坊農 真弓(2009). F 陣形 坊農 真弓・高梨 克也・人工知能学会(編) 多人数インタラクションの分析手法 (pp.172-186) オーム社.
- 坊農 真弓 (2011). 手話会話に対するマルチモーダル分析—手話三人会話の二つの事例分析から 社会言語科学, 13(2), 20-31.
- 坊農 真弓・高梨 克也・緒方 広明・大崎 章弘・落合 裕美・森田 由子 (2013). 知識共創インタフェースとしての科学コミュニケーター——日本科学未来館におけるインタラクション分析 ヒューマンインタフェース学会論文誌, 15(1-4), 375-388.
- Bono, M., Ogata, H., Takanashi, K., & Joh, A. (2014). The Practice of Showing 'Who I am': A Multimodal Analysis of Encounters between Science Communicator and Visitors at Science Museum. Organized Session: Brightening Life Style up with Technologies. *HCI International 2014*, 22-27.
- Bull, P. (1987). *Posture and Gesture*. NNNN: Pergamon Pres (ブル, P. 市河 淳章・飯塚 雄一・高橋 超・大坊 郁夫(訳) (2001). 姿勢としぐさの心理学 北大路書房).
- 大坊 郁夫(1998). しぐさのコミュニケーション-人は親しみどう伝え合うか- サイエンス社.
- Den, Y., & Enomoto, M. (2007) A scientific approach to conversational informatics: Description, analysis, and modeling of human conversation. In T. Nishida (ED.), *Conversational informatics: An engineering approach* (pp. 307-330). John Wiley & Sons.
- 伝 康晴・榎本 美香(2014). 『千葉大学 3 人会話コーパス』使用説明書, http://research.nii.ac.jp/src/files/Chiba3Party_manual.pdf(情報取

- 得 2016/2/10).
- 伝 康晴・諏訪 正樹・藤井 晴行 (2015). 特集「フィールドに出た認知科学」編集にあたって 認知科学, 22(1), 5-8.
- Deppermann, A. (2013). Multimodal interaction from a conversation analytic perspective. *Journal of Pragmatics*, 46(1), 1-7.
- Dosso, J., & Whishaw, I. (2012). Resting hand postures: An index of what a speaker may do next. *Gesture*, 12(1), 84-95.
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1971). Constants across cultures in the face and emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 11, 124-129.
- 榎本 美香・伝 康晴 (2011) 話し手の視線の向け先は次話者になるか 社会言語科学, 14 (1), 97-109.
- 藤垣 裕子・廣野 喜幸(編)(2008) 科学コミュニケーション論 東京大学出版会.
- 古山 宣洋 (2002). 発話と身振りの記号論-個人内および個人間での発話と身振りの強調による談話の構造化- 齋藤 洋典・喜多 壮太郎(編), ジェスチャー・行為・意味(pp.56-70) 共立出版.
- 古山 宣洋 (2009). キャッチメント 坊農真弓・高梨 克也・人工知能学会(編) 多人数インタラクションの分析手法(pp.137-152) オーム社.
- 古山 宣洋 (2012). ジェスチャーとは何か 日本語学, 31(3), 4-15.
- Georgakopoulou, A(2010). Narrative Analysis, In R.Wodak, B.Johnsto and P.Kerswill (Eds.), *The SAGE Handbook of Sociolinguistics*(pp.396-412), SAGE Publications Ltd (イェルガコポロ,A. 佐藤 彰・秦 かおり・岡本 多香子(訳) (2013). ナラティブ分析 佐藤 彰・秦 かおり(編) ナラティブ研究の最前線-人は語ることで何をなすのか (pp.1-42) ひつじ書房).
- Goffman, E. (1961). *Encounters: Two studies in the sociology of interaction*. Bobbs-Merrill (ゴフマン, E. 佐藤 毅・折橋 徹彦(訳) (1985). 出会い—相互行為の社会学, 誠信書房).
- Goffman, E. (1963). *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*. Free Press (ゴフマン, E. 丸木 恵祐・本名 信行(訳)(1980) 集まりの構造—新しい日常行動論を求めて, 誠信書房).
- Goffman, E. (1981). *Forms of Talk*. University of Pennsylvania Press.

- Goodwin, C (1981). *Conversational Organization: Interaction Between Speakers and Hearers*. Academic Press.
- Goodwin, C. (1986). Gestures as a resource for the organization of mutual orientation. *Semiotica*, 62(1-2), 29-49.
- Goodwin, C. (2000). Action and embodiment within situated human and interaction. *Journal of Pragmatics*, 32(10), 1489-1522.
- Goodwin, C. (2007). Environmentally Coupled Gestures. In D. S. Susan, C, Jastine, & E.T. Levy (Eds.), *Gesture and the Dynamic Dimension of Language: Essays in Honor of David McNeill* (pp. 195–212). John Benjamins Publishing Company.
- Goodwin, C. (2013). The co-operative, transformative organization of human action and knowledge. *Journal of Pragmatics*, 46(1), 8-23 (グッドウィン, C. 北村 隆憲(監訳)・須永 将史・城 綾実・牧野 遼作(訳)(2017), 人間の知と行為の根本秩序-その協働的・変容的特性- 人文学報, 513(1), 35-86).
- Hall, E. (1966). *The Hidden Dimension*. Double day (ホール, E. 日高敏隆・佐藤信行(訳) (1970) かくれた次元, みすず書房)
- Heath, C (1989). Pain Talk: The Expression of Suffering in the medical Consultation. *Social Psychology Quarterly*, 52(2), 113-125.
- 平本 毅・高梨 克也 (2015). 環境を作り出す身振り——科学館新規展示物制作チームの活動の事例から 認知科学, 22(4), 557-572.
- 平本毅(2015). 会話分析の「トピック」としてのゴフマン社会学, 中河伸俊・渡辺克典(編) 触発するゴフマン やりとりの秩序の社会学(pp.104-129) 新曜社.
- 星 洋輔・小林 貴訓・久野 義徳・岡田 真依・山崎 敬一・山崎 晶子(2009). 観客を話に引き込むミュージアムガイドロボット 電子情報通信学会論文誌, 92(11), 764-772.
- 古山 宣洋 (2009). キャッチメント 坊農 真弓・高梨 克也・人工知能学会(編) 多人数インタラクションの分析手法(pp.137-152) オーム社.
- 細馬 宏道(2009a). ジェスチャー単位 坊農 真弓・高梨 克也・人工知能学会(編) 多人数インタラクションの分析手法(pp.119-136) オーム社.
- 細馬 宏通(2009b). 話者交替を越えるジェスチャーの時間構造 —隣接ペアの場

- 合一 認知科学, 16(1), 91-102.
- 細馬 宏通(2015) 真似の相互行為論 ゴール志向性から受け手志向性へ 木村 大治(編) 動物と出会う II:心と社会の生成(pp.37-54) ナカニシヤ出版.
- 村田 和代・井出 里咲子(2016) 雑談とその諸相 村田 和代・井出 里咲子(編) 雑談の美学 言語研究からの再考(pp. iii-xv) ひつじ書房.
- Jefferson, G (1978) Sequential aspects of storytelling in conversation. In J. Schenkein(Ed.), *Studies in the organization of conversational interaction*(pp.219-248). New York, NY: Academic Press.
- Jefferson, G (2004) Glossary of transcript symbols with an introduction. In G.H. Lerner (Ed.), *Conversation analysis: Studies from the first generation*(pp.13-23). Philadelphia: John Benjamins.
- 城 綾実・細馬 宏通(2009). 多人数会話における自発的ジェスチャーの同期 認知科学,16(1), 103-119.
- 城綾実・坊農真弓・高梨克也 (2015).科学館における「対話」の構築：相互行為分析から見た「知ってる？」の使用 認知科学, 22(1), 69-83.
- 城 綾実・牧野 遼作・坊農 真弓・高梨 克也・佐藤 真一・宮尾 祐介 (2014) 異分野融合によるマルチモーダルコーパス作成・展示フロアにおける科学コミュニケーションに着目して・第71回人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会資料, 71(SIG-SLUD-B401), 7-12.
- 城 綾実・牧野 遼作・坊農 真弓・高梨 克也・佐藤 真一・宮尾 祐介 (2015) 異分野融合によるマルチモーダルコーパス作成—各種アノテーション方法と利用可能性について 人工知能学会研究会資料, SIG-SLUD-401, 7-12.
- Kendon, A (1975). Gesticulation, speech and the gesture theory of language origins. *Sign Language Studies*, 9(1), 349-373.
- Kendon, A (1990) *Conducting interaction: Patterns of behavior in focused encounters*, Cambridge University Press.
- Kendon, A (2004). *Gesture: Visible Action as Utterance*. Cambridge University Press.
- Kendon, A. (2007). On the Origins of Modern Gesture Studies. In D. S. Susan, C, Jastine, & E.T. Levy (Eds.), *Gesture and the Dynamic Dimension of Language: Essays in Honor of David McNeill* (pp. 13–28). John Benjamins Publishing Company.

- Kendon, A (2010). Spacing and Orientation in Co-present Interaction. In A. Esposito., N. Campbell., A. Hussain., & A. Nijholt (Eds.), *Development of Multimodal Interfaces: Active Listening and Synchrony: Second COST 2102 International Training School, Dublin, Ireland, March 23-27, 2009, Revised Selected Papers*(pp.1-15). Springer Berlin Heidelberg.
- 菊地 浩平・坊農 真弓 (2013). 相互行為における手話発話を記述するためのアノテーション・文字化手法の提案 *手話学研究*, 22, 37-61.
- 木村 大治(2006). 共在感覚—アフリカの二つの社会における言語的相互行為から, 京都大学学術出版会
- 木村 大治(2015). はじめに 行為のもつれ 木村大治(編) *動物と出会う I: 出会いの相互行為*(pp. i-x) ナカニシヤ出版
- 喜多 壮太郎(2002). *ジェスチャー 考えるからだ*, 金子書房
- 小林 一樹・山田 誠二(2006) 行為に埋め込まれたコマンドによる人間とロボットの協調 *人工知能学会論文誌*, 21(1), 63-72.
- 串田秀也(2006). 相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織 *世界思想社*
- 牧野遼作・坊農真弓 (2016) 子供のいる多人数会話で互いの存在を利用すること～ 科学コミュニケーターの常体／敬体の使い分けに着目して～ *信学技法*, 116(242), 7-12.
- Mandelbaum, J (2013). Storytelling in Conversation. In J. Sidnell & T. Stivers (Eds.), *The hand-book of Conversation analysis*(pp.492-507). Blackwell Publishing.
- McNeill, D (1992) *Hand and Mind*. The University of Chicago Press.
- McNeill, D (2005) *Gesture and Thought*. The University of Chicago Press.
- 南 保輔 (2001). 相互作用研究におけるフレームバイフレーム分析の方法と可能性—文脈分析の概略とパソコンでの応用例 *コミュニケーション紀* 14, 129-154.
- Mondada, L (2009). Emergent focused interactions in public places: A systematic analysis of the multimodal achievement of a common interactional space. *Journal of Pragmatics*, 41(10), 1977-1997.
- Morris, D., Collett, P., Marsh, P., & O'Shaughnessy, M (1979). *GESTURES:*

- their origins and distribution. JONATHAN CAPE LTD (モリス, D., コレット, P., マーシュ, P., & オショネシー, M. 多田 道太郎・奥野卓司(訳)(1992), *ジェスチャー—しぐさの西洋文化* 角川書店).
- 長岡 千賀・小森 政嗣・桑原 知子・吉川 左紀子・大山 泰宏・渡部 幹・畑中千紘 (2011). 心理臨床初回面接の進行—非言語行動と発話の臨床的意味の分析を通した予備的研究 *社会言語科学*, 14(1), 188-197.
- 西阪 仰 (1997). 相互行為分析という視点 金子書房.
- 西阪 仰 (2001). 心と行為—エスノメソドロジーの視点 岩波書店.
- 西阪 仰 (2008). 分散する身体—エスノメソドロジー的相互行為分析の展開 勁草書房.
- 西阪 仰(2008b). トランスクリプションのための記号 [v.1.2 2008 年 1 月], <http://www.meijigakuin.ac.jp/~aug/transsym.htm> (情報取得 2016/2/10).
- 野邊 修一 (1997). 米国人英語話者が産出する描写的ジェスチャーと音響/音韻的ピークに関する一考察 *流通科学大学論集 人文・自然編*, 9(2), 249-262.
- 大橋 克洋(2010) 無標, 有標の言語学, *ポリグロシア*, 19, 151-164.
- Pomerantz, A, (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action*(pp.57-101). Cambridge University Press.
- Psathas, G (1995). *Conversation Analysis: The Study of Talk-in-interaction*. SAGE publications (サーサス, G. 北澤裕・小松栄一(訳)(1998) *会話分析の手法* マルジュ社).
- Sacks, H(1972). An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology. In D. Sudnow (Ed.), *Studies in Social Interaction*(pp.31-73). Free Press (サックス, H. 北澤 裕・西阪 仰(訳)(1995) *会話データの利用法会話分析事始め* サーサス.G., ガーフィンケル, H., サックス.H., & シェグロフ.E.A. 北澤 裕・西阪 仰(訳) *日常性の解剖学知と会話(新版 pp.93-173)*).
- Sacks, H (1974). An analysis of the course of a joke's telling in conversation. In J. Sherzer & R. Bauman (Eds.), *Explorations in the Ethnography of Speaking*(pp.337-353). Cambridge University

- Press.
- Sacks, H., & Schegloff, E.A (2002). Home position. *Gesture*, 2(2), 133-146.
- Schegloff, E. A (1984). On Some Gestures' Relation to Talk. In J.M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action*(pp. 266-296). Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A (1998). Body Torque. *Social Research*, 65(3), 535-596.
- Schegloff, E. A (2007). *Sequence organization in interaction*. Cambridge University Press.
- Shannon, C. E. & Weaver, W (1967). *The Mathematical Theory of Communication*. The university of Illinois press (植松 友彦 (訳)(2009) 通信の数学的理論 竹馬学芸文庫).
- Speer, S. A. (2002). 'Natural' and 'contrived' data: a sustainable distinction?. *Discourse Studies*, 4, 511-525.
- Streeck, J. & Hartge, U(1992) . Previews; Gestures at the transition place. In P. Auer & A.D. Luzio (Eds.), *The Contextualization of Language*(pp.135-157). John Benjamins Publishing.
- Streeck, J., Goodwin C., & LeBaron, C. (Eds.) (2011) *Embodied interaction: Language and body in the material world*. Cambridge University Press.
- 菅原 和孝(1996).コミュニケーションとしての身体. 菅原 和孝・野村 雅一(編). コミュニケーションとしての身体(pp. 008-39) 大修館書店
- 高木 智世(2009). 隣接ペア概念再訪: 相互行為の原動装置, 認知科学, 16(4), 481-486.
- 高梨克也(2013). 三者会話の調査・分析法. 日本語学, 32(1), 58-69.
- 谷 泰(編)(1997). コミュニケーションの自然誌 新曜社
- 土倉 英志(2014). 行為と資源の調整された関係性として日常を理解すること —機能システムの発達という視点 認知科学, 21(1), 155-172.
- Wachsmuth, I., Lenzen, M. & Knoblich, G. (2008) *Embodied communication in humans and machines*. Oxford University Press.
- 山田 誠二(2009). HAI 研究のオリジナリティ 人工知能学会誌, 24(6), 810-817.
- 山田 誠二・寺田 和憲, 小林 一樹(2013). 人を動かす HAI デザインの認知的アプローチ 人工知能学会誌, 28(2), 256-263.

初出一覧

以下の 4, 5, 6 章は, それぞれ論文や学会要綱として公開したものを, 本稿を作成するために, 大幅に改稿したものである. また, 1, 2, 3, 7 章は, 本稿作成のため新たに書き下ろしたものである.

4 章 研究 1 異なる陣形による複数の活動を位置づける方法の分析

牧野遼作・古山宣洋・坊農真弓 (2015). フィールドにおける語り分析のための身体的空間陣形: 科学コミュニケーターの展示物解説行動における立ち位置の分析 認知科学, *22(1)*, 53-68.

5 章 研究 2 手の位置の組み合わせによる活動を位置づける方法の分析

Makino, R., & Furuyama, N. (2013). Home position-formation: as a combination of multiple participants' home position, *The international Workshop on Multimodality in Multiparty Interaction (MiMI2013)*, 64-74.

牧野遼作・古山宣洋 (2014). 座位会話における三者の身体配置による語りのための環境構築 第 71 回言語・音声理解と対話処理研究会 (SIG-SLUD), 35-39.

6 章 研究 3 収録されることを位置づけるやり方の分析

牧野遼作・阿部廣二・古山宣洋・坊農真弓 (2017). 会話における“収録される”ことの多様な利用 質的心理学研究, *16*, 25-45.

謝辞

未熟な自分が、この博士論文を書き上げることができたのは、ひとえに数多くの方々の助けがあったからです。最初に、審査委員の先生方にお礼申し上げます。博論審査の主査を快く引き受けてくださった宮尾祐介先生、また副査を引き受けていただいた山田誠二先生、博士論文の予備審査より審査委員を引き受けていただいた稲邑哲也先生、先生方からは専門の異なる自身の研究に対して有益なコメント、アドバイスを数多くいただきました。いただいたコメント、アドバイスについては今後も課題として、自身の研究がより情報学へと貢献できるように、これからも研鑽したいと考えています。

本研究の分析対象となった日本科学未来館の科学コミュニケーターの方々の会話データは、坊農真弓先生の研究プロジェクトの一角として収録されたものです。先生は、自分を未来館の研究プロジェクトに参加させてくださった。このプロジェクトに参加できたことは、身体配置についての研究を進めるための大きなきっかけとなりました。その後、大学院生として2年間、特任研究員として1年間、自身の研究の面白さを見出し、そして叱咤激励してくださることで、博士論文を書き進めることができました。千葉大学の伝康晴先生は、学部時代の恩師であり、本研究で用いた「千葉大学3人会話コーパス」の動画データを提供していただきました。学部時代に行っていた人の手の位置をただ分類するだけの研究を先生が面白がってくださったことが、この研究のきっかけとなっています。他大学院に進学後も、数多くの研究会や勉強会に参加する機会を提供してくださったこと、博士論文の審査委員も快く引き受けてくださったことに感謝します。早稲田大学の古山宣洋先生は、総合研究大学院大学の入学当時の指導教官であり、研究室在籍時、そしてその後も常に自身の指導に多大な時間を割いていただきました。先生は自分の研究の面白さや重要さを自分以上に常に理解して下さり、そして何度も、長い時間をかけて研究の意義を教えてくださいました。この博士論文を書き上げることができたと思っています。

また自身が参加した数多くの研究会、勉強会にも大変助けられました。特に、LC研究会と身振り研究会では、何度も発表させていただき、そのたびに有益なコメントをいただきました。中でも、京都大学の高梨克也先生、東京工科大学の榎本美香先生からは、研究の進め方、分析の方針など、多くのことを教わり

ました。会話分析・相互行為分析については、会話分析初級者セミナー、中級者セミナー、そして千葉大学の西阪仰先生の講義に参加したことが大きなきっかけとなり、会話分析を学ぶことで、博士論文を書き進めることができました。また、須永将史さんと城綾実さんに行った読書会・勉強会を通して、相互行為の中の人々が利用する資源として身体を考えることの重要性に気づかされました。居關友里子さんには、本研究のアイデアレベルの相談から最終稿段階チェック作業まで、様々な面で大変お世話になりました。そして、同じ研究室のメンバーであった末崎康博さん、児玉謙太郎さん、小室允人さん、阿部廣二さん、国立情報学研究所で皆さんと話したことが、本研究を書き上げる動力となりました。その他多くの方々に大変お世話になりました。

最後に、家族である祖母の雨宮真佐子、弟の健作、そして母の以佐子からの不出来の息子に対する寛大な理解と、援助のおかげでこうして博士論文を書くことができました。感謝しています。